
SAVIOUR ～機兵が歩む道～ 魔法少女リリカルなのは編

風羽 鷹音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SAVIOUR機兵が歩む道

魔法少女リリカルなのは編

【Nコード】

N30170

【作者名】

風羽 鷹音

【あらすじ】

とある少女は何の縁か因果か、ある並行世界に跳ばされる。

その世界には少女が知る人物たちがいた。しかし、その人物たちは少女が知る人物たちよりも10歳以上も若かった。

「魔法少女リリカルなのはStrikerS」その後の世界から、
「魔法少女リリカルなのは」の世界へ。

少女は自分が知る悲しい結末を回避すべく動き出す。

このお話はオリジナル主人公である少女が限りなくハッピーエンドに近い結末を目指して小さい体でがんばる(?)お話です。

第00話 それがすべてのはじまり

見渡す限りが森の中、直径が百メートル程開けた場所の中心に少女は立っていた。

少女の前には一辺が二メートルほどの立方体。

そして周囲には二十七体程の『人形』が、その四肢をバラバラにされた状態で転がっていた。

『人形』といっても銃やらなんやらで武装されているし、バラバラにされた四肢を見ればそれらが機械仕掛けであることもわかる。どう考えても『人形』の用途は物騒なものとわかる。

「困りましたね…」

少女がぼやく。

『人形』の残骸をつくりあげたのは彼女なのだが、その理由は単に『人形』が自分の敵であったからで『人形』達が守っていた立方体が何なのか、彼女は全くわからなかった。

「反省、ええ軽率だったと反省してます」

少女は誰に言うわけでもなく再びぼやく。

ぺたぺたと触りながら立方体の周りを一周する。

あちらこちらに、つなぎ目の様な物は確認できるがそれだけだ。少女はふと周囲に視界を巡らせる。

囲まれている。

身長が150程の『人形』が二十七体に、白衣を羽織って髪を後ろで結わえた身長が170程の女性が一人、そして同じく白衣を、こちらはちゃんと着た、髪はショートカットで身長が150程の少女が一人。

女性のほうはタバコをくわえて余裕が感じられる態度だが、白衣を着た少女のほうは自分達が包囲した少女をにらみつけているが白衣が大きすぎ、だぶついていて迫力に欠けていた。

「お久しぶりです『クリエイター』隣の方は初めて見る顔ですね」

包囲された少女は内心焦ってはいたが、それを表に出さず淡々と挨拶をした。

『クリエイター』と呼ばれたのは女性のほうだが、女性が答えるより先に白衣を着た少女が噛みつく。

「貴方、生みの親である『クリエイター』に対して言うことはそれだけか！」

「制作者の間違いでしょう、生みの親とか気持ち悪いこと言わないでください」

白衣の少女の噛みつきはバツサリと切り捨てられた。

『クリエイター』は白衣の少女の頭をポンポンと叩きながら、くつくつと笑い、

「コイツは新人のリア」

『クリエイター』は白衣の少女を紹介し、顎で、自分たちが包囲した少女にも自己紹介を促した。

「ミルア・ゼロです」

「おまえ最近『機兵』なんて名乗ったりしてるだろ、随分と自虐的だな。らしいといえば、らしいかもしれないが」

「よけいなお世話です。それに私にはちょうどいいでしょう？不本意ながらもこれでも貴方の作品ですので」

ミルアは淡々と答えていくが『クリエーター』は楽しそうに言葉を放つ。

リアはそんな二人のやりとりにじれったさを感じていた。

『クリエーター』はリアのそれを感じ取ったのか、

「で、ミルア。早速で悪いがお前の後ろにある装置の実験にな、つきあってもらうぞ？ コレも何かの縁だしな」

「無論お断りです、どうして私があなた方の実験に付き合わなきゃならないんですか？むしろ邪魔したい——っ!？」

ミルアは答え終わらないうちに自身の周囲に現れた魔法陣から伸びた鎖によって拘束される。

『クリエーター』はくっくつと笑って、

「便利なものだなバインドというものは」

「あんなモノ実験につかわず処分したほうがいいのでは？」

「人の研究成果を簡単に処分しようとしてくれるなよ。お前も一研究者だろくに……」

『クリエイター』はため息混じりにリアをたしなめる。

ミルアはバインドを解こうと体をよじるが『人形』達が距離をつめて銃口を突きつけてくる。

身動きできないミルアを尻目に『クリエイター』は装置に近づき触れる。

すると何もなかったかと思っていたところに切れ目が入りパカリと開いてコンソールが現れた。

なにやらよくわからない鼻歌まじりにコンソールを叩く『クリエイター』

「実験内容くらい教えていただけませんか？拘束されて銃口を突きつけられ、不安極まりないんですが」

「不安極まりないといっても貴方の表情は先ほどとなんら変わりないように見えますが？」

「ミルアの変化のわかりづらい表情は素だよ素。まあよくよく見りゃわからなくもない」

リアは『クリエイター』の答えに「そうですか」とだけ答えた。コンソールを叩き終えた『クリエイター』はミルアに近づき、その頬を人差し指でムニムニしながら、

「とりあえず座標などの計算は終了した。ということで早速『跳んで』もらおうか」

「はい？『跳ぶ』？意味がわかりません。何処へ『跳べ』と？それと人の顔で遊ばないでください」

ミルアの「ください」という最後の言葉が頬を引っ張られて「く

ださひ」になった。

ミルアとしては、公式たぬきを初めとした彼女たち以外に自分の顔を触られるのは不愉快でたまらない。

そんなミルアの気も知らず、頬を引つ張った『クリエイター』はくつくつと笑い、リアも笑いをかみ殺している。

もう気が済んだのか『クリエイター』はミルアの頬を離して、

「並行世界ってわかるか？ 私達やお前が普段『跳んでる』次元世界ではなくな」

「違いは？」

「そうだな、次元世界ほど移動は容易じゃないとか。少なくとも管理局の連中にそんな技術はないし、そもそも並行世界の存在すら確認できてないだろうな。」

「あなた方はその並行世界とやらに『跳べる』わけですね？ 技術を持つてると・・・」

「まあな、私達個人で『跳ぶ』こと、転移は容易だが質量が限られていてな、物資の輸送なんかだと船を使わなくちゃならない。けれど船自体が大型だから船自体に搭載する転移装置自体も大型になる。少量の物資を転移させるとなると効率が悪くてな」

「で、少量の物資用に小型の転移装置を開発、その実験に、たまたま居合わせた私を利用するわけですね」

ミルアの声にはあきらめと、あきれが混じっている。

そしてミルアは、ふと気がつく。

並行世界とやらを好きに移動できる彼等は、いったい何処の存在

なのか。

彼等の最終目的と様々な世界にちよつかいを出す目的がわからない。

「あなた方が世界を渡り歩く目的がさまざまくわからないんですが」

「んー、そうだな魔法技術や科学技術の調達、人材の拉致とか。特に並行世界は面白いぞ。こちらの世界からみたら『もしも』な世界もあるし、物語の中みたいな世界も腐るほどあるぞ」

「目を輝かせながら言わないでください。強制的に転移される側としたらたまったものじゃないんですが。あとさりげなく、人材の拉致とかすさまじいこと言ってくれますね。ますます邪魔したくなりましたよ」

「まあそういうことは転移先から戻って来てからにしてくれ。がんばれや」

「転移、開始します」

今まで若干蚊帳の外だったリアが号令を出すと、ミルアの体が光に包まれる。

『クリエイター』はのんきに手を振り、リアはそれをあきれた表情で見ていた。

「もしここで私が助けを請うたら止めたりとかしてくれませんか？」

「それはないな、そもそもお前が助けを求める姿が想像できん」

ミルアは最後に「でしょうね」とだけ言って自信を包む光が飛散

すると共にその姿を消した。

その場に残るは『クリエイター』とリアと『人形』達だけ。

『クリエイター』は転移装置をなでるように触りながら、

「リア、後で観測チームを追って転移させる。そうだな、数は5機程で」

「この装置でしたら一個小隊丸々転移できますが？」

「そんなにいらん。別にドンパチやらかすために転移させるわけじゃないんだ。見ておきたんだよ色々と」

そう言った『クリエイター』は微笑する。

リアはため息交じりに、

「貴方はご自身の作品に肩入れしすぎるのではないですか？」

「自分の作品に無頓着なのもどうかと思う」

「何もそこまで極端にしろとは言いません。ただ、あのゼロに関して、貴方は異常に気を使ってるように感じます。ゼロが周囲からなと呼ばれているか知ってるのでしょうか？」

リアは別に責めているのではない。

単に疑問だった。

『クリエイター』と自分は考え方なのか感じ方なのか、何かが違う。

違うからこそ対象に対して抱く思いも違うのだろう。

何が違うのかはまだわからない。

だが『クリエイター』が何を思っているのか、それが疑問であり

知りたいことだった。

そんなリアを知ってか知らずか『クリエイター』はくつくつと笑いながら、

「失敗作、できそこない、まあ他にもあつた気がしたが総じていい意味ではないな」

「では貴方は何故？ 貴方はゼロをどう思っているのですか？」

「そこが核心だな。私はミルアを失敗作だなんて思っていないんだよ。頭を弄つたのにもかかわらず、私に、そして我々に背いた。生命の可能性とでも言おうか？ 他に例えるなら雛が巣立っていった感じかな？」

『クリエイター』はそう言つて笑い「私はずいぶん嫌われた親鳥だがな」と言つてさらに笑つた。

そういう見方もできるのか。

リアは素直に感心した。

生命の作り手として、作品が自身の足で歩いて行くことを素直に喜んでいるのだ、この人は。

たとえそれが作り手である自分に牙剥く行為であつたとしても。

リアは漠然と、この人のようになりたいと思つた。

そんなリアを『クリエイター』は見透かしたように、

「まあ私みたいにはなるなよ？」

「なろうと思つてなれるものじゃないと思いますよ。私は私なりにやってみます。とりあえず観測チーム用の装備の準備をしてきます。その後、即撤収で構いませんよね？ いつまでも此処にいたら終い

には管理局に見つかりかねませんし」

『クリエイター』は「それで構わないよ」と言って準備のためその場を離れるリアを見送った。

ミルアを転移させた先がどんなところなのか知らないわけじゃない。
い。

知ってるからこそミルアが此処に居合わせたことは縁だと言った。
そこにはミルアがよく知る人物と同一の存在がいる。

もっとも歳にして10歳以上も前の存在にはなるが。

だからこそミルアがどのような行動をとるのか？

『クリエイター』はそれが楽しみでならなかった。

タバコの煙を天に向かって吐きつつ一人にやにやとしていた。

第00話 それがすべてのはじまり（後書き）

なにやら始まりました。

カザハネ タカネ
風羽鷹音です。

しよっぱななの主人公の描写が少ないですね。
どうしてこうなった。

第01話 その出会いに何を思う（前書き）

一週間で1話というのはどうなんだろうか。

第01話 その出会いに何を思う

車椅子に乗る少女、八神はやては「119番って何番やったっけ？」などと、とんちんかんな事をつぶやいた。

現時刻は早朝の5時。

場所は自宅の庭。

目の前にはあおむけで倒れている白い少女。

そう白いのだ。

太陽はまだ完全に昇ってはいないが部屋の明かりで庭は照らされている。

その明かりに照らされた少女は白かった。

まず髪の毛の白さが目につく。光の加減によつては銀にも見えるが、少女の髪は確かに白かった。

真っ白なショートボブといったところ。

そして肌も白い。

白人？なにそれおいしいの？

病的と言つていいほど白かった。

黄色いお猿さんとしては、その白さを分けてほしいと、はやては思った。

白い少女の服装は特に何もデザインされていない黒のTシャツに、白いミニのフレアスカート。ただし何処もなぜか穴だらけ、汚れは大したことないのに穴だらけ。

謎が謎を呼ぶというやつだ。

ついでに金属製の厚みのあるカードケースのようなものを腰の両側にそれぞれぶら下げている。

それはよくみると、まるで拳にはめ込めるように綺麗に四角い穴が開いていた。

他に持ち物のようなものは見たところない。
そして年の頃は自分と同じくらいだろうか。
そんなことを思いつつ観察をつづけるはやて。

やがて、はつとして「ええっと119番は・・・」などとまた繰り返す。

すると白い少女がゆっくりと目をあける。

そして上体を起こして周囲を見渡す。

ショートボブだと思っていた少女の髪型は少し違った。

ちょうど首の後ろあたりから尻尾のように、腰のあたりまで髪があった。

なんかカブトガニみたいやな、とはやては思った。

そして少女と目が合い、はやてはその目に惹きつけられた。

深い深い赤。

まるで血の色。

少女を総じて言うなら雪ウサギかハツカネズミ、いや、雪ウサギの
ほうがかわいいか。

ごめんなハツカネズミ。

「えと、とりあえずおはよう。いやー気持ちいい朝やねえ」

できうる限りの笑顔であいさつするはやて。

言っただけ、地べたで寝てて気持ちのいい朝はないかもしれないと、
自身のなかでつつこんでおく。

ファーストコンタクトは失敗と結論付けるはやて。

すぐさま取り繕うべく次のあいさつを考える。

「えっと、私の名前は『八神はやて』や。よろしく」

考えた末がコレである。

失敗の上塗りをしたと判断したはやてであった。

白い少女『機兵』ことミルア・ゼロは自分の耳を、そして目を疑う。

目の前の「八神はやて」と名乗った車椅子の少女は確かにミルアが知る八神はやてだった。

ただし写真や映像で見た【10年以上前】の八神はやてだった。

頭の中まで真っ白になりそうになる。

わけがわからない。

タイムスリップ？

いや違う。

自身の中の何かが違うと告げる。

そもそも、この世界の肌触りが自身の知る地球と違う。

ということは、ここが『クリエイター』の言う並行世界のひとつということだろうか。

そうだとすると、ある疑問が浮かんだ。

「はじめまして八神はやてさん。私の名前はミルア・ゼロ」

ミルアは立ち上がって、はやてに挨拶をする。

そして、

「早速で悪いのですが今日が何年何月何日か教えていただけますか

「？」

「ええとミルアちゃんやね。私の事は、はやてでええよ？それと今日は――」

はやての答えを聞き考えるミルア。

まだ闇の書の封印は解かれていない。

そして自身の記憶が確かならジュエルシード事件が始まるまでの時間もそうはない。

いまだ混乱しつつも現状を確認しようとする。

「えと、ミルアちゃん？大丈夫か？なんやえらい考えごとしてるみたいやけど」

「はい？ああ、大丈夫です。それと私の事はミルアと呼び捨てでかまいません、はやて」

下から顔を覗き込まれて思わずのけぞる。

以前あったときは「チビダヌキ」という印象だったが、今のはやては「マメダヌキ」

そんな失礼なことを考えていると、

「とりあえず、こんなところで寝てたわけでドロドロやし、おまけに服もぼろぼろ。お風呂沸かすし入ってき。詳しい話はお風呂から上がってから聞くよ。」

はやては、そういつてニコリとする。

一瞬戸惑うミルアだったが自分の体を見下ろす。
酷いものだ。

そう思い、はやての提案を受け入れることにした。

さて、どうしたものか。

ミルアは頭や体を洗い終え、口元まで湯に浸かりながら考える。まず一番いいのは元の世界に帰ることだが、そんな方法はさっぱり思いつかない。

転移する際の現象や自身に残る感覚はしっかりと記憶している。

だが、そんなもので、どうにかなるものではない。

仮に数式がわかれば逆算するなりなんなりで道筋はつかめるかもしれないが、あいにくとそこまで正確な記録は録っていない。

録れる間はあつたはずだが、完全に失念していた。

とんでもない大ボカだ。

そう思つて湯の中でぶくぶくと空気を吐く。

元の世界に帰る方法が見つからない以上、この世界に滞在するしかない。

いや、別の次元世界に転移するのもありだ。

そこで新たな問題。

この世界が自分の知つてゐる世界と同様の道を歩むのなら、近々始まるであろうジュエルシード事件と闇の書事件を無視するのかということ。

両事件の大まかな概要は知っているし本人達からも多少は話を聞いている。

そして以前『クリエイター』達の施設を襲撃した際、施設内のデータベース内に両事件の詳細があつて多少は目を通した。

もしこのまま両事件を放置すれば「あの人」が、そして今、胡散臭いことこの上ない自分に、やさしさを見せてくれるはやてが悲しむ結末が訪れる。

馬鹿馬鹿しい。

実に馬鹿馬鹿しい。

この二人を放置し、もし元の世界に帰れたとして、どの面を下げて「あの人」にあえばいい。

難しいことは考えるな、元の世界の二人とこちらの二人は別人だ。なら答えは簡単だ。

私はどうしたい？

二人が悲しむ結末、コレを回避する。それだけだ。

強引に結論づけたら少々心が軽くなった。

ミルアはそんな気がした。

そろそろいいかな。

そう思い、湯から上がった。

つい、すっかりしてしまった。

はやてはそう思いながら脱衣場へ向かう。

新しいタオルは置いておいたのに、肝心の着る物を置くのを忘れていた。

サイズは自分ので問題はないはず。

もしこれでウエストがばがばとか言われたらどうしよう、なんて考えてはいない。

本当考えてはいない。

くどいようだが・・・

いらぬ心配もほどほどに脱衣場のドアを開けようと、ドアに手をかけようとした。

しかし、その手をドアにかけようとしたとき、ドアの方がかつてに開いた。

正確にはドアの向こう側にいるであろう人物が先にドアを開けた。はやては先にドアを開けられ「あっ」と声を漏らしそうになつてすぐに息を飲んだ。

ミルアが倒れているときにその肌の白さは確認した。
しかし家の中で見るというそう白い。
その白さにははやてはポカンとしていた。

ミルアは頭からタオルをかぶった状態で何も着ていなかった。
その状態ではやての前に立っていた。

白っ、ほんまに白い。

上から下まで白っ。

あかん、白すぎてまぶしい。

そ、それに白いからピ、ピンクのさくらんぼが、が、が。
そもそもなんで平気で裸で私の前に立つてるの？

あ、あかんてまぶしすぎるし、さ、さくらんぼが・・・

「あの、はやて？」

ミルアの言葉に、はつと我に戻るはやて。
あわてて口元のよだれをぬぐって、

「ごめん、ごめん。服を置いとくの忘れてたな。私の服やけどサイ
ズ的には問題ないやろし」

「ありがとうございます。何も置いてなかったのでどうしようかと思いました」

そう言ったミルアは、はやてに背を向け頭にかけてタオルを壁掛けにかけ、下着を履こうと上体をかがめた。

「はい？」

前屈の状態のまま後ろを見るミルア。

見るとはやてが自分のお尻をわしづかみにしていた。

「あの・・・？はやて？」

はやては問われて思わず我に返る。

まずい、このままでは自分は変態。何とか弁明せねばと思い、

「え？あ、いや、丸くて白くておいしそうなお尻やなど、つい・・・」

はやては結局、弁明どころか変態宣言してしまう。

それを聞いたミルアは、例え世界が変わろうがチビダヌキだろうがマメダヌキだろうが、はやては、はやてなのだな、と妙に納得してしまった。

「とりあえず、その手を離してもらえないと下着が履けません」

「そやった、ごめんな、あはは・・・」

そういつてミルアのお尻から手を離すはやて。

どこか名残惜しそうな気がするのは気のせいだろうか。

手をわきわきさせて、その手を見つめているところを見るに名残惜しいのだろう。

ミルアは、まったくこの人は、と思いつつ手早く服を着ていく。服を着ていくたびにはやての表情が「残念です」と語っていた。

「魔導師っ？って何？魔法使いたいなもん？」

「みたいなもんです」

とりあえず驚いて見せるはやて、そしてそれに頷くミルア。

ミルアは自分の事がある程度話すことにした。

自身の素性など一から作ってもよかったのだが、はやてにはあまり嘘はつきたくない、というのがあった。

「魔法使いっていうと、箒つこて空飛んだり、人の恋路応援したり・・・」

「空は飛べますが箒は使いませんね、あと人の恋路云々な便利な魔法は使えませんし見たことないです」

空を飛べるということだけで、はやてには凄いことなのだが、ふと疑問に思う。

「具体的にどんな魔法が使えるんや？」

はやての疑問にミルアは少し答えにつまる。

はやては何かまずいことを聞いたのだろうか、と思い前言を撤回しようとしたが、

「もっぱら戦闘用です」

ミルアの言葉に面食らう、はやて。

よくよく考えてみれば、庭に倒れていた時のミルアの服装は酷いものだった。

もしかしたら、それと関係があるのだろうか。

はやては、聞いていいことなのだろうか、と悩む。

しかし、恐らくそれはミルアが此処にいる理由の核心部分、ジレンマとはこのこと。

「ミルア、聞いてもええかな？」

意を決するはやて。

そんなはやてにミルアは答え始めた。

「要するにミルアは違う異世界の人で悪い連中の実験に巻き込まれて、たまたま、うちの庭に跳ばされた、と」

「まあ、そういうことです」

なんとまあデンジャラスな。

それがはやての素直な感想だった。

魔法に関しては先ほどミルアが軽く飛んで見せてくれた。

他の魔法についてはミルアが「不審者でも狩りましょうか？」などといったので丁重にお断りした。

「で、ミルアは元の世界に帰る方法はあるん？」

「ないですね、残念ながら」

それはゆゆしき事態と思うはやて。

当然だ。

こんな白くて美味しそうな少女を野にほったからしにするのはよろしくない。

世の中には自分のように危ない人間がいるのだ。

いくら自衛する能力があっても、やはりよろしくない。

何やらおかしなことを自分で思った気がするが、そんなことは置いといてミルアに詰め寄ったはやては、

「うちの娘こになり」

危なさ絶好調。

良い子は決して誘いに乗ってはいけません。

「はい？」

ミルアは固まった。

はやての性格から滞在するように勧められるのは予想はしていた。ただ、その文句が「うちの娘こ」といのは予想外。

はやての危うさに関してミルアはまだ認識不足だった。

第01話 その出会いに何を思う（後書き）

んゝまだまだ遅いです。

執筆速度が。

書いてるこちらは楽しんで書いてますが。

なんか、変態はやてが出来上がった気がするのですが、
気のせいですかね？気のせいじゃない？そうですか。

あははー

第02話 金色の邂逅（前書き）

前回から2日しか経ってないけど案外書けるもので。
変なところで「やればできる子」を発揮します。

第02話 金色の邂逅

朝だろうか目が覚めるミルア。

しらない天井だ。

いや、冗談。知っている天井。

八神家の、はやての部屋の天井だ。

どういうわけだか八神家の娘こになって数日がたった。

もう一つ、どういうわけか、はやてと同じベットで寝起きしている。

どうしてこうなった。

はやての強引さに負けた結果が同じベットでの寝起きだ。

すりよって眠るはやてを見て、何か激しく何処かで選択肢を間違えたのでは？と疑問に思う。

視線を巡らせる。

そこにあるのは未だ封印が解かれていない闇の書。

ミルアとしては、おっかなびっくりである。

いくら封印が解かれるまでまだ時があるとはいえ、これはロストロギアである。

さも当然のごとく、そこに鎮座している闇の書。

早々に下準備を始めるべきか。

そう考えていると、はやてがもそもそと動き出す。

「お目覚めですか？はやて」

「ん、おはようやミルア」

「早速ですが私にしがみついている手を離していただけませんか？ベツトから降りれません」

「んゝもうちょい」

「別に悪くない提案ですね。私の服の中に手をつ突っ込んでいなければの話ですが」

「ええやん。かたいこと言わんとな。えへへ、すべすべえゝ」

絶対何か間違った。確信した。

しかし、はやてのスキンシップをそれほど嫌がっていない自分がいる。

毒されてきている。

あちらの世界の守護騎士の方々も裏では相当やばいのかもしれない。10年以上一緒にいればきっとやばいことになってるはずだ。

ミルアは一抹の不安を振り払い、渋るはやてをひき剥がす。

はやてをひき剥がした後、はやてを車椅子に乗せる。

今日の予定は服を買うこと。

いつまでも自分の服や下着を着せるのは忍びない、というはやての提案によるものだった。

だが、自分はお金を持っていない、はやてにミルアはその事を伝えると、

「任せとき、私が全部出す」

「いや、いくらなんでもそれは・・・すでに衣食住を提供されているですよ。そこへさらに新しい服というのは」

「気まずいか？」

「はい。気まずいです。とても。」

「ん、それならこれから私のおねがい、聞いてくれる？」

で、そのお願いの一つがベットを共にすることだった。

何か罨にハマった気がするのは気のせいだろうか。

気のせいだと思いたい。

「天気が良くてよかったですね」

「ほんまやね」

はやてとミルアは最寄りのデパートに向かっている。

ミルアの服を買ったためだ。

無論ミルアがはやての車椅子を押している。

押してもらってるはやては上機嫌。

「私ら周りから見たらどんな関係に見えるかな？」

「まあせいぜい友達でしょうね。姉妹というには似てないですから」

「恋人同士とか無理かな」

「無理ですね。さりげなく何いつてくれちゃってるんですか」

はやてはミルアにバツサリ切られて「ちっ」と舌打ちをした。
そして不意に道端の茂みを指差し、

「あれ、なんやろ？」

はやてが指差す方を見ると、そこには宝石のように光る石があった。
思わず固まるミルア。

はやてはそんなミルアを不審に思い、

「どないしたん？あれ何か知ってんの？」

「ええ、知ってると言えば知ってます。こんな形で見つけたくはなかったのですが」

そう言つてミルアは光る石を拾い上げ、その石を強く握る。
次にミルアが手の平を開いた時には石は輝きを失っていた。

「これはジュエルシードといって、異世界で生み出されたもので、
願いを叶える石とも言われてるんですが、制御が難しく、ほとんど
ただの【ヤバイほどのエネルギーの固まり】ですね」

それを聞きはやては冷や汗をながしながら、

「えと、そんな危ないもん捨てしもて大丈夫なんやろか・・・」

「一応封印処理したので大丈夫です。投げても蹴飛ばしても問題は
ありません。なんなら投げ飛ばしましょうか？」

「い、いや、いい。遠慮しとく」

あわてて首を横に振るはやて。

ミルアは「そうですか」と言ってジュエルシードを懷にしまいこんだ。

「具体的にどんくらいやばい物なん？」

「エネルギーを制御できず、完全に暴走した場合、世界はその形を維持できなくなりますね」

「めっちゃやばいやんそれ。といっても話が大きすぎてようわからん」

「地球を含めて一つの世界として形を維持してんです。お鍋の中にたくさんのが入ってるようなものです。世界がその形を維持できなくなるというのは、お鍋を叩きわるようなものです。ぐちゃぐちゃのバラバラですね」

「やばさがよう解りました」

「もし使用するなら他の世界に対して影響の少ない場所での使用になりますね」

ミルアはそう言うのとデパートに向かって車椅子を押し始めた。

はやてはしばらく進んだところで、

「さて、そろそろデパートに着くわけやけど、ミルアはどんな服がほしい？」

「そうですね、とりあえず以前着ていたのと同様の服がほしいです」

「ん、それじゃあ他は私が選んでもええか？」

「はい、お任せします」

ミルアがそう言うのと、はやてはニヤリとする。

そんなはやてを見てミルアは、しまった、と思う。

「あ、あの、はやて」

「前言撤回はナシな？お・ね・が・い」

退路は断たれた。

ミルアにはあきらめるといふ選択肢しか思いつかなかった。

デパートに着いてからミルアは、はやての着せ替え人形と化していた。

あれやこれやと次々と服を持ってきてミルアに着せていく。

そろそろ20着目だろうか。ミルアはよくわからなくなってきた。

少々げんなりしてきたが、はやてがとても楽しそうなので、まあいいかと思う。

しかしこう長時間試着室を占有していいのだろうか？と思い、店員の顔色をうかがうと何故か店員も楽しそう。

誰もはやてを止める者はいない。

絶好調なはやては本当に楽しそうだった。

かわりにミルアの精神力が削られていったが。

「いやー良い買い物したなあ」

「それは良かったです」

そういつて二人はデパートを後にする。

はやての膝の上には購入した服が入った袋がのっかっている。

最終的にははやてが厳選した服、6着購入した。

依然としてはやてのテンションは高い。

ミルアも着せ替え人形状態から解放され徐々に精神力が回復していた。

しかし、残酷な事にはやてが「また来たいな」と言い、ミルアの精神をえぐった。

ミルアは一呼吸してから、

「はやて、家に着いてから少し散策に出かけようと思つのですが」

「ん？ええけど、お昼ご飯どうするつもり？」

「すみません今日は遠慮させてもらいます。夕飯までには帰りますので」

「わかった。あ、やさしいからというても知らん人について行ったらあかんよ？」

「行きませんよ。必ずはやての元に戻ってきます」

ミルアがそういうと、はやては照れ臭そうに笑いながら手を伸ばしてミルアの頭をなでた。
はやてに頭をなでられ、戸惑いつつも温かい気持ちになっていることに気がつくミルアだった。

「それでは行ってきます」

「はい、気をつけてな。ちゃんと夕飯までには帰ってきていよ」

はやての言葉にミルアは頷いて答え家を後にした。

ミルアは少し歩いたところで不意に立ち止って懐のジュエルシールドに触れる。

思わぬ形で手に入れてしまった。

自分がやるうとしてしていることには欠かすことのできないピースであるジュエルシールド。

だが収集者は他にもいる。

具体的に動いているであろう二人。

「あの人」で『金色の雷光』こと『フェイト・テストロッサ』

フェイトさんに関しては対して問題視してはいない、

こちらとしてはフェイトさんに協力するつもりでいる。

問題はもう一人、

『白き砲王』こと『高町なのは』

確実になのはさんとはぶつかることになる。

しかも今後しばらくは、だ。

ついでに厄介なのは、なのはさんとぶつかり続ければ必然的に管理局を敵にまわすことになる。

実に厄介だ。言い方をかえるなら面倒だ。面倒といえば『プレシア・テストロッサ』

これからやろうとしている事には彼女の理解と協力が必要になる。はたして自分の話を聞いてくれるだろうかと不安になる。

娘である『アリシア・テストロッサ』を失った母、プレシア。

子を失い、壊れた親がどれほど厄介であるか、ミルアは過去の経験からそれを知っていた。

ミルアは悶々と考えながら再び歩き出す。

とにかくジュエルシードを収集しよう。

なのはさんと出くわした時は、その時はその時ということで行こう。若干行き当たりばったりな感じがするが、あまり時間をかけるわけにもいかない。

先に収集されては元も子もない。

ふと気がつくと公園に行きついていた。

ミルアは公園から少し外れた林の中に足を踏み入れる。

少しあたりを探ると、そこにジュエルシードがあった。

自身の鋭敏な感覚はこの手のことには実に役に立つ、そう思いながらジュエルシードを拾い上げる。

ミルアは拾い上げたジュエルシードを懷にしまい、左手を額にあてる。

すると、等身大の特撮ヒーローのような仮面がミルアの頭を包みこむ。

黒い半袖のジャケットに、後ろだけがやけに長い白のブリーツスカート、服装も同時に変化していた。

そして振り向きざまに左手を突き出し、自分に向かって放たれる拳を受け止める。

「くそっ！」

そう吐き捨てるのは、放った右の拳を受け止められた、獣の耳と尻尾が生えた少女。

フェイトの使い魔である『アルフ』

ミルアがあちらの世界で見た時は小さい姿をしていたが、目の前の人物は確かにアルフだった。

「このっ！はなせっ！」

そう言い、掴まれた右手を振り払おうとするアルフ。

ミルアはアルフの右手をひき寄せ、そのまま蹴り飛ばす。

アルフは「ぐっ」と息をもらしながら後方に飛ばされていった。

アルフを蹴り飛ばしたミルアはすぐさま振り向き、自分に振り下ろされる金色の魔法刃を左手で掴む。

「っ！」

魔法刃を掴まれ、驚く金髪の少女、フェイト・テストロッサ。

魔法刃を掴む左手から血が流れるが、ミルアはそんなことにかまうことなく、空いている右手でフェイトの腕を掴んで、そのまま蹴り飛ばしたアルフの方へ投げ飛ばす。

「くうっ！」

「フェイトっ！！」

投げ飛ばされたフェイトをキャッチしたアルフは牙をむき出しにしてミルアを睨みつけた。

ミルアはそんなアルフにかまうことなく、腰の両側にぶら下げていたカードケースのようなものを展開しつなぎ合わせる。

『双頭アンビブレード』

それは持ち手を中心に上下の区別がない剣。

剣といっても刃がついていないが魔力を走らせ刃の代わりをさせる。それがミルアの使う武器だった。

デバイスとしての機能はないが強度は相当ある。

ミルアは双頭をかまえて、

「さて、私としてはあなた方と争う気は、実はないのですが」

「あんだ、ふざけんじゃないよっ！」

声をあらげるアルフに、ミルアは懷からジュエルシードを一つ取りだして見せる。

それを見たアルフは目の色を変え、

「そいつをつ！よこせっ！」

そう叫びミルアに殴りかかった。

ミルアは身を屈めてアルフの拳をかわし、魔力刃を展開させていない双頭で突き飛ばす。

突き飛ばされたアルフに、フェイトが名を呼びながら駆け寄る。

フェイトは自身のデバイスであるバルディッシュをミルアに向け、

「それを、ジュエルシードをこちらに渡してください」

フェイトの言葉にミルアはあっさりと「いいですよ」と答える。

予想外なミルアの返答に思わず「え？」ともらすフェイト。

アルフの方もポカンとしている。

ミルアは双頭を待機状態にし再び腰の両側に下げると、

「だから、先ほど言ったじゃないですか、争う気はないと」

争う気はないと言いつつ、しっかりと反撃したのは、問答無用で攻撃してきた二人に対する、ちよつとした意地悪。

しばらく固まっていたフェイトだったが、はっと我にかえて、バルディッシュを待機状態にし頭を下げ、

「ごめんなさい。ほらアルフも」

「その、わるかったよ・・・」

蹴り飛ばされ突き飛ばされたアルフの方はしぶしぶ謝罪した。

ミルアとフェイトのファーストコンタクトは随分と過激なものになってしまった。

第02話 金色の邂逅（後書き）

はやてが絶好調です。

なにやらおかしい方向に進みつつあります彼女は。

元々そんなつもりはなかったのですが、いつの間にか勝手にキーを叩いてました。

さてフェイトとのファーストコンタクトとなりました。

ごめんアルフ、蹴っ飛ばしてごめん。

第03話 白き砲哮（ほうこう）（前書き）

タイトルの「砲哮」は「咆哮」をなのは風に変えた造語です。

第03話 白き咆哮（ほうこう）

ミルア、フェイト、アルフは未だ林の中にいた。

ミルアにいたっては仮面を被ったままで。

ミルアは懷から出した一つのジュエルシードをフェイトに差し出して、

「それでは、このジュエルシードは貴方にお渡しします」

「あ、ありがとうございます」

そう言つてフェイトは差し出されたジュエルシードを受け取った。フェイトは受け取ったジュエルシードをまじまじと見て、

「封印はされてるんですね」

「当たり前です。そんな危なっかしい物、素で持ち歩くわけにはいかないですよ。ああ、ところでお名前を伺つてもよろしいですか？ 私はゼロ、機兵とも名乗っています」

「あ、あの私はフェイト、フェイト・テストロッサです。それと使い魔のアルフ」

「その、ゼロだっけ？ さっきは悪かったよ」

謝るアルフにミルアは「いやこちらこそ」といって手を振る。フェイトは思い出したように、

「あの、手は大丈夫ですか？」

恐らく先ほど魔力刃を掴んだ左手の事を言っているのだろう。
しかしミルアは「大丈夫ですよ」といって再び手を振る。
そんなミルアにフェイトは「見せてください」と迫る。
ミルアはしぶしぶ左手をフェイトに見せた。

私は差し出された左手を掴み引き寄せた。
確かに、このゼロと名乗る女の子はバルディッシュの魔力刃を掴んで血が出ていた。
にも係わらず、この白い手には傷一つなかった。
本当に白い手だった。

「どうして」

思わず私はつぶやいた。

アルフも「どうしたの？」と覗き込んで私と同じ疑問を持ったのか
「え？」と声をもらす。

「単に自己再生能力が異常なだけです気にしないでください」

ゼロはそう言ったがかなりの出血をしていた。
なのに回復魔法も使うことなく、何もなかったかのように綺麗になっている。

その異常な自己再生能力というのは一種の希少技能なのだろうか？
そんなことを考えていると、

「気にするなといえば、あんたのその仮面はなんなの？」

そう言つてアルフがゼロの仮面を指差した。

それは私も確かに疑問には思っていたのだが、聞いていいのかどうかわからなかった。

そんな私やアルフの疑問にゼロは、

「一応、私はここでは普通に生活している事もあるので、顔を隠すという意味と、防御の意味もあります」

なるほど、ゼロはきっと私と違ってこの先もここで生活していくのだろう。

魔法技術がないこの地球で暮らしていくためにも自分のことは隠しておきたいのだろう。

私はそう納得することにした。

アルフも「まあ、そりや確かに」といって一応納得はしたみたいだった。

普通の生活。

私にもいつかできるだろうか。

ジュエルシードを集め終え、母さんの研究がうまくいったら、母さんと私とアルフの三人で普通の生活ができるかもしれない。

「一つよろしいですか？」

ミルアは何か考え込んでいるフェイトに声をかけた。

「あ、はい。なんですか？」

「何故ジュエルシードを集めているのか教えてもらえませんか？」

「え？そ、それは・・・」

答えに詰まるフェイト。

アルフのほうも困ったような表情をしている。

ミルアとしてはこの二人の反応は予測できていた。

そこで、懷からもう一つのジュエルシードを出して、

「もし教えていただけたら、このジュエルシードもお渡しします」

「え？」

「あんた、もう一つ持ってたのかい？」

ミルアが出したもう一つのジュエルシードを見て驚く二人。

ミルアとしてはここは素直に事情を話してほしかった。

プレシアとの接触を比較的スムーズに図るため、その存在をフェイトから聞いておく必要があったから。

プレシアの存在も知らずに接触を図るのはいらぬ疑念を抱かせる。ミルアなりにそういうのは避けておきたかった。

「あ、あの、母さんの研究のために必要なんです」

フェイトはしぶしぶ話した。

「いいのかい？」と聞くアルフに「大丈夫」と答える。

フェイトの言葉にミルアは頷くと、フェイトの手にジュエルシードを握らせる。

「本当にいいんですか？」と聞くフェイトにミルアは、

「教えていただけたら渡すといいましたので」

そう答え「もうないですよ」と軽く跳ねてみせる。

その後、フェイトとアルフは、ミルアに礼を言つとその場を立ち去ろうとした。

そんな二人にミルアは、

「もし、これから先、また私がジュエルシードを見つけたら、またあなた方にお渡ししますね」

その言葉にフェイトが「え？」と声を漏らす。

アルフはアルフで先ほどのことを再び謝ってくる。

ミルアは「かまわない」と手を振ると、二人はぺこりとお辞儀をして、今度こそ、その場を後にした。

フェイトとアルフがその場を後にすると、まあ、こんなところかとミルアは仮面を消し、服装、バリアジャケットを解除した。

手元にあるジュエルシードはなくなったが、プレシアの手に渡るならば問題はない。

フェイトが自分の事をプレシアに話すのか、また話した場合どのように説明するかは不安はあったが、今更どうしようもないしフェイトに任せるしかない。

仮にプレシアが自分を知ったところで敵対意思がない相手をわざわざ敵視することもあるまい。

敵視し対処しようとするればそれだけ目的を達成するまでの時間がかかることになる。

プレシアがそんな面倒な選択をするとは考えていない。

まあなるようになるだろう。

ミルアはそんなことを考えながら帰路についた。

ふと目が覚める。

外が白み始めている。

時計を見ると日が完全に昇るまでまだしばらくある。

横を見るとはやてがいつものように眠っている。

ミルアが目を覚ましたのはわけがあった。

比較的近くで魔法戦が行われている、それを感じ取ったからだ。特に考えるまでもなく戦闘を行っているのはフェイトとなのはだろう。

理由は恐らくジュエルシードを巡っての事。

さて、どうしたものか。

数秒ベットの上で考えたが様子見ということでベットを抜け出しそのまま家を出る。

ミルアがたどり着いたのは数日前フェイトと初めて会った公園だった。

公園全域に結界が張られていて通常空間と切り離されていた。フルフェイスの仮面とバリアジャケットを展開するとミルアはためらうことなく結界内に飛びこんだ。

「——っ！」

飛びこんだところでフェイトが飛ばされてきてミルアはとっさに受け止めた。

アルフがフェイトの名を呼びながら駆け寄ってくる。

一見したところフェイトに怪我はないがバリアジャケットは損傷していた。

ミルアは駆け寄ってきたアルフにフェイトを預ける。

空を見上げると、そこには髪を頭の両脇で結った少女が飛んでいた。

白いバリアジャケットを身にまとった魔導師「白き砲王」「高町なのは」

なのははミルアという闖入者に困惑の表情を浮かべている。

突然の事というのもあるだろうが、異様な仮面姿というのが余計に困惑させているのだろう。

なのはの遥か下には、フェレットの様な生き物、なのはに魔法を教えた少年、ユーノ・スクライアの変身した姿があった。

ミルアはなのはを見上げたまま、

「アルフさん状況の説明をお願いします」

「フェイトと二人でジュエルシードを探してて、この公園に差し掛かったところであの魔導師に出くわしたんだ。以前にもジュエルシードを巡って戦ったこともあって、今回はその延長になるんだけど」

「だい、じょうぶ。ジュエルシードは奪われてないから」

アルフに抱えられたフェイトがバルディッシュを掲げて見せるとミルアは、

「フェイトさんとアルフさんは離脱してください。あの魔導師の相手は私がします」

ミルアの言葉に二人とも困惑するがミルアが「これをお願いします」と言って、この数日の間に手に入れた3つ目のジュエルシードを投げ渡すと、しぶしぶ結界内を後にした。

「フェイトちゃんっ！」

なのはが後を追おうとしたが、双頭を展開したミルアがなのはの前に飛んで行く手を遮る。

相変わらず困惑の表情を浮かべているのはだが、困惑しているのはミルアもだった。

魔導師になって間もないはずなのはにフェイトが後れをとったという事実がミルアを困惑させていた。

無論、並行世界故の差異の一つとかたづけることもできるが実際、現実を目の当たりにすると困惑せざるをえなかった。

「あの、あなたは？」

私はそう目の前の女の子に声をかける。

バリアジャケットの形状がスカートだしフェイトちゃんに話しかけていた時の声から女の子で合ってるはず。

仮面のせいで顔はわからないけど。

「ゼロです。機兵のゼロです」

目の前の子がそう答えた。
ゼロ。

それがこの子の名前。
でも機兵ってなんだろうか。

「あの、ゼロさん」

「ゼロでかまいません。貴方より年下ですので」

「じゃあゼロちゃん、あの、フェイトちゃんのお友達ですか？それと機兵って・・・」

「フェイトさんとはただの知り合いです。ジュエルシードの収集に協力しているだけです。それと機兵というのは自称で、機械仕掛けの兵士という意味です。兵器でもかまいませんが」

私のその言葉を聞いて嫌な気分になられた。

「機械仕掛けの兵士、機械仕掛けの兵器」

その言葉がこの子自身をとて蔑んだ言葉のように感じた。
私の勘違いかもしれないけれど、それでも嫌な気分になられたのは間違いなかった。

「あの、貴方のお名前を伺ってもよろしいですか？」

「あ、ごめんなさい。私の名前はなのは、高町なのはです」

自分の名前を名乗るのを忘れるなんて、失礼なことしてしまっただろうか。

そんなことを考えつつも今はフェイトちゃんと話がしたかった。
何処か悲しい目をしていたフェイトちゃんと。

「ゼロちゃん、そこを退いて、私フェイトちゃんと話したいの」

「それは聞けません。どうしても言うのなら私を退けてからにしてください。その時は私からも話をつけましょう」

「本当に？」

「ただし私が勝った場合はジュエルシードを一つもらいます」

最初の提案は嬉しい物だが次の提案に私はたじろいだ。

負けたらジュエルシード一つを渡す。

リスクとしては大きいけれど、そのリスクを負ってでも私はフェイトちゃんと話がしたかった。

だから私は覚悟を決めて「いいよ、わかった」と言い、愛機のデバイス、レイジングハートをかまえた。

なによりフェイトちゃんと話がしたい。

そんな思いが私を突き動かす。

「デイベインシューターっ！」

私の周りに桜色の光が五つ現れる。

ゼロちゃんは動かない。

それならそれでかまわない。

ゼロちゃんには悪いけど、負けたくはない。

「シュートっ！」

五つの魔力弾が弧を描きながらミルアちゃんに迫っていった。私はすぐにバスターをセットする。

「えっ!？」

私は思わず驚いた。

ミルアちゃんは魔力弾を、受けるわけでも避けるわけでもなく手に持った大きな剣のような物で全て叩きつぶしてしまった。

フェイトちゃんにも切り落とされたことはあったが私の魔力弾はそんなに軌道が読みやすいのだろうか？

少しへこみそうになったがすぐに気を取り直す。

牽制としては充分。

ミルアちゃんはまだ動かない。

「デイベインっ・・・バスターっ!」

私が得意とする砲撃魔法。

シューターを牽制として次いでバスター。

当たって、そう願わずにはいられなかった。

なのはバスターがミルアにせまる。

ミルアは手をかざすと魔法による円形の盾を形成する。

バスターを正面から受けるわけではなく若干斜めに受け強引にバスターの軌道を逸らした。

あっさりとバスターを捌かれたことになのはは驚いている。

ミルアは右手をなのはに向け、

「シャインシューター・・・シュートっ!」

ミルアの射撃魔法になのはは再び驚くことになる。

チャージタイムがほとんどなく次々と金色の魔力弾が弧を描いて自分に向かって飛んでくる。

なのは大きく回避運動をとる。

幸いそれほどの速度も誘導性能もなく、なのはの機動力でも充分回避できた。

しかし、ミルアのシューターは未だ放ち続けられている。

数が多すぎる、というか何処となくズルい。

なのはは回避しながらそんなことを思った。

しかし、足を止めれば強引に落とされかねない。

ほぼ無尽蔵に放たれるシューターには、そんな迫力があつた。

だがこのままというわけにもいかない。

ふと、なのははあることに気がついた。

先ほどまでミルアが手にしていた双頭が待機状態に戻され腰に下げられている。

そして空いた左手に、金色に光り輝く、魔力による大きな槍状のものが握られる。

ミルアがそれを水平に振る。

投げる気だ。

なのははその事に気がつき、意を決して足を止める。

「デイベインっバスターっ！」

ミルアのシューターが直撃する寸前になのはのバスターが間に合い、シューターを飲み込みミルアに向かって行った。

突然のバスターだったが、ミルアは体を横に倒すようにして、ぎりぎりで回避し、そのままの姿勢で槍状の物をなのは目がけて投擲した。

回避は間に合わないと判断したなのはは魔法による円形の盾、ラウ

ンドシールドで防ごうとする。

ミルアの投擲したそれは、なのはのラウンドシールドに一瞬食い込んだかと思うとそのまま爆発した。

爆発は元から槍状の物に設定されていたもので、なのははその爆風に飛ばされるがすぐに体勢をたてなおす。

怪我こそしていないが、バリアジャケットの所々には今の爆発のためか損傷が見られた。

そんななのはをユーノは心配するが、なのはは、大丈夫、と笑って見せた。

笑って見せたものの実際のところ、なのはは限界だった。

フェイトとの戦闘に次いででの戦闘で魔力が底をつきそうだった。

良くても全力でのディバインバスターが一発。

なのははミルアを見るが仮面のせいで表情がわからない。

あれだけのシューターを連射して先ほどの槍状のもの。どれだけ消耗しているかがまったくわからなかった。

なのはの心中をよそに、ミルアは左手をなのはに向け、右手を左手にそえる。

そんなミルアに答えるように、なのははレイジングハートをかまえる。

「シャイン・・・」

「ディバインっ！」

「バスターっ！！！！！」

未だフェレット姿のユーノは目の前の現実を目を疑う。

なのはのバスターは、ゼロと名乗る相手のバスターに飲み込まれ、そのままなのはをも飲み込んだ。

足を止めての全力バスター。

そんななのはのバスターがあっさりと飲み込まれたというのは正直驚きだった。

無論なのはが最強なんていうわけではないが、なのはより年下という子がああもあっさりとなのはを下した。

なのはの実力を認めていたユーノだからこそその事だった。

「なのはッ！なのはッ！」

ユーノはバスターの直撃を受け気を失い墜落してくるなのはに呼び掛けた。

墜落してくるなのはを受け止めるべく落下地点に先回りしようと駆ける。

しかしユーノよりも先にミルアがなのはを空中で抱き止めていた。

「前もって言っていた事ですのでジュエルシードを一ついただきましたのですけど・・・」

ミルアがそういうとレイジングハートがジュエルシードを一つ排出した。

それを受け取り懷にしまうと、なのはを地面に寝かせる。

これで完全になのはさんの敵ですね、とミルアは心の中で自嘲する。

「君はジュエルシードがどれだけ危険なものかわかってるのかい？」

ユーノの問いにミルアは「ええ」とだけ答えた。

「ならどうして・・・」

「例え分の悪い賭けでも、かなえたい事が、助けたい人たちがいるんです」

「そんな分の悪い賭けなんて」

「大丈夫ですよ、賭け賃は私自身ですから」

ミルアの言葉にユーノは驚いた。

その言葉の真意はわからないが、自身を危険に晒してまで助けたい人たちがいるということなのだろう。

もしなのはがこの事を知ったら、

「なのはなら君に協力したいと思うけど」

「それは駄目です」

「どうして？」

「理由はどうあれジュエルシード、ロストログアの使用は罪に問われます。ですからあなた方は私達からジュエルシードを奪い返すために動く、それでいいんですよ」

ミルアの言う事はもつともだった。

なのはなら協力したいと言うかもしれないが、罪とわかっていて協力させることはユーノとしてはできない。

ユーノとしても争わずにすむならいいと思っているが、先ほどの彼女の、自身を賭けるという意味合いの言葉からするに、争わずにすむ、ということは無理だろうと思った。

これからも戦うしかないのか。

いや実質戦うのはなのはだ。

自分に出来ることなど限られている。

「あの、フェレットのような喋る小動物さん」

酷い。

「いや、僕の名前はユーノ・スクライアで、人間です。この姿は治療のための変身で、フェレットのような、ではなくフェレットです」

思わず丁寧に説明するユーノだった。

「何やら悩んでいるようですが、もし今後の事でしたらなのはさんと、ちゃんと話し合ってください。友達なのでしょう?。」

ミルアの言葉にユーノは頷いた。

確かにそうだ。

もう自分一人の問題じゃない。

なのはとじっくり話し合おう。これからどうするかを。

彼女達と戦うかを。

「わかった、一度なのはと話し合っよ」

その言葉に頷くミルアにユーノは「ただし」と付け加える。

「たとえ僕は一人になってもあきらめないよ。いや、そもそも、なのはは諦めないと思うよ」

ユーノのその言葉にミルアは笑っているかのように肩をゆらした。
「なにか可笑しいかい?。」というユーノの問いにミルアは「いえ」

と答える。

そして「頼もしいと思っている」とユーノに答えると結界内を後にした。

ユーノは彼女の真意がますますわからなくなっていた。

第03話 白き咆哮（ほうこう）（後書き）

前回からえらい時間がたってしまいました。

なにやら徐々に一話分の字数が増えてますが、次回はわかりません。適当なところで切ってるつもりなんですが、その適当なところまでが長かったりするので。

話の内容ですが、

あっさりとなのはを落としてしまいました。

やっちまった。

第04話 新たな生の一つの結末（前書き）

なんかえらく長くなってしまいました。

第04話 新たなる生の一つの結末

「本当に申し訳ありませんでした」

八神家玄関にて土下座するミルア・ゼロ。

腕を組みミルアを見下ろすはやて。

いつたいなんのコントか。

理由としては実に簡単である。

はやてがいつものように目を覚ますとミルアがいない。

「私の抱き枕は何処行ったんや！」

といった具合に怒るはやて。

これははやてに無断で出かけたミルアの落ち度だった。

もつとも「今から魔法戦に行ってきます」などと言えるはずもなかったのだけでも。

はやてはミルアが帰ってこないのではないのか？という心配が大きかった。

なにぶん、ミルアは異世界の住人だから、ふつといなくなってしまうのではないか。

そんな不安がはやてにはあった。

無論、出ていく出ていかないはミルアの自由ではあるのだが、やはりはやては淋しいのだった。

「せめて出かける時は一言言つなり、メモでも残してくれへんかな？」

「次からは必ずそうします」

そう言って謝るミルアにはやてはズイっとなる物を突き出す。

「鞆ですね」

「鞆やね」

要するに買い物に行こうという事だった。

はやていわく食料が少々危ないらしい。

今まで一人暮らしだったために食料の減り具合を見誤ったらしかった。

タダ飯食らい状態のミルアとしては手伝わないわけにはいかなかった。

「で、どうするつもりですか？この福引券は」

そういつてミルアは福引券をひらひらとさせる。

先ほどのお店でもらった物だ。

はやてはその福引券を奪い取ると、

「無論使う。そして当てるっ！まかせときっ！」

その自信はいつたい何処からくるのか謎だったが、まあいいかと思うミルア。

福引を行っている場所にたどり着くと、係員に福引券をわたすと腕まくりをするはやて。

いったいなんの意味があるのか、とりあえず気合いを入れる。

そんなはやてを後ろから見るミルアは、気合いをいれてクジ運がな
んとかなるのだろうか？と余計なことを思っていた。

はやては深呼吸をすると、

「うおりやあああつ！」

という掛け声とは裏腹にゆっくりと福引の例のガラガラをまわした。
コロンと金〇が・・・いや金色の玉が転がり出てきた。
係員が「大当たりっ！」と叫ぶよりも先に、

「いよっしやあああつ！」

とはやては叫んだ。

さすがに係員が少しひいている。

ミルアが周りを見渡すと、案の定注目をあびている。
はやてはそんなことお構いなしにガッツポーズ。

いったい何があつたのかと当選の表を見るミルア。

「温泉旅行ペアご招待？」

何やら展開が予想できる。

「ちなみに誰と誰でペアでしょうか？」

そう聞くミルアにはやてはニヤリと笑い、

「私とミルア」

と答えた。

こいつは何の陰謀だ。

私とはやてをいっただうしたいのだ、と天を仰ぐミルア。
そんなミルアをよそに微笑む、いや、にやけるはやてであった。

結論から言えば温泉には行くことになった。

子供二人だけでどうしたものかと考えたが、はやての主治医である
神経内科の石田先生に旅館の方に連絡してもらおう、という事で話を
進めることになった。

週末には、はやてとちよつとした旅行。

ミルアは旅行など初めてだったため、表情には出さなかったが内心
楽しみにしていた。

福引を当てた翌日の夜、ミルアは、とある学校グラウンドで結界
内にてなのはと対峙していた。

学校にあったジュエルシードは既にミルアの懐にある。

「ゼロちゃん、私が勝ったらジュエルシード、渡してもらおうよ。そ
れとフェイトちゃんと話もさせてもらおうからね」

そういつてレイジングハートをかまえるなのは。

ミルアは双頭をかまえて頷く。

なのははレイジングハートを握る手に力をいれる。

魔力も全快した。

前回の様には落とされない。

なのはは強い思いを込めて魔法を放つ。

「デイベインシューター・・・シュートっ！」

なのはの周囲に桜色の魔力弾が五つ形成され、それぞれがミルアに向かってゆく。

ミルアはなのはのシューターを前回同様全て叩きつぶすが、しかし、

「デイベインっ！バスターっ！」

ミルアが最後のシューターを叩きつぶすのと、なのはのバスターはほぼ同時だった。

前回の戦闘の時よりもバスターの発射シークエンスが早い。

ミルアはそう思いつつ上体を反らして回避しようとするもバスターはわずかに仮面をかすめていった。

「この短期間でよくやりますね」

「ただ魔力の回復をまっけたわけじゃないからね」

ミルアの言葉に、なのはは自信に満ちた声で答えた。

フラッシュムーブ、ミルアがそう聞こえた時には、なのはは後ろにまわりこみレイジングハートを振り下ろそうとしていた。

振り下ろされるレイジングハートを、体をひねり双頭で受け止め、ガチンと金属同士がぶつかる音が響く。

「うそ？ふせがれた？」

「見えてますので」

驚くなのはにミルアはしれっと答えた。

なのはあわてて距離をとるが、

「ホーミングシューター・・・シュート」

ミルアの両側に一つずつ魔力弾が形成されそれぞれがなのはの後を追った。

「わっ、わわっ」

なのはは何度もシューターを回避するもそれらはしつこくなのはの後を追って来ていた。

「気をそらしちゃ駄目ですよ」

そう言ってミルアはなのはの後ろをとる。

なのはは驚きつつもフラッシュムーブで距離をとり、なおも追いつがるシューターをラウンドシールドで受け止める。

「ゼロちゃんもフェイトちゃんみたいにすごく速いね。それにあの誘導弾も凄くしつこかった。ねえレイジングハート」

そう言うなのはにレイジングハートがあることを告げる。

「え？自動追尾？ゼロちゃんはそんな便利な事ができるんだ・・・」

感心しつつも再び五つのシューターをセットするのは。

「私だってそう何度も叩きつぶされるわけにはいかないんだからね」

なのはがそう言っつとシューターは以前よりも大きく弧を描いてミル

アに迫る。

ミルアは先ほどと同じように双頭で叩きつぶしていくが4つ目を叩きつぶそうとした時、シューターの方が双頭を避けそのままミルアのわき腹に直撃する。

わき腹に直撃を受け息が漏れるミルアだったが、続けざまに背後から迫るシューターを、振り返ることなく蹴りつぶす。

「おしいっ！でも一発は当てれたね。前はまともに当てられなかったから」

なのはのその言葉に、レイジングハートなのはの成長を純粹に喜ぶ。

一方ミルアなのはの成長に感心していた。かなりわき腹が痛かったが・・・

バスターをセットすることなくシューターのコントロールに集中した結果だったが、それでもよくやる、とミルアは感心した。

「シャイン・・・」

「ディバインっ！」

「バスターっ！」

二人は同時にバスターを放ち、同時に回避する。

ミルアは瞬時になのはとの距離をつめ双頭を振り下ろすが、なのははラウンドシールドで双頭を受け止める。

「っ！」

なのはは思わず息をもらす。

双頭を受け止めたのはいいが、衝撃が強く、腕に強い痛みが走る。ミルアは双頭をなのはのラウンドシールドに押しつけたまま、右手拳でラウンドシールドを殴りつける。

「きゃあっ！」

なのはは強い衝撃に踏ん張りきれずに、吹っ飛ばされて墜落しかけた。

「シャインランス・・・」

ミルアの右手に金色に輝く大きな槍が握られ、それを下方にいるなのはに投擲する。

なのはは空中で体勢を立て直し、投擲されたランスをぎりぎりのところで回避する。

的を外れたランスは地面に突き刺さり爆発した。

よく見ると未だフェレット姿のユーノが青い顔をしている。

爆発はユーノの目前で起こっていた。

「ごめん、ユーノ君、大丈夫？」

心配するなのはにユーノは笑って「大丈夫」と答える。

前回の戦闘後、なのはと話し合ってこれからもジュエルシールドを集めるため一緒に戦おうと決めて、これくらいの事は覚悟はしていた。実際、このような状況に見舞われると驚かざるを得ないのだが。

私はユーノ君の無事を確認するとゼロちゃんの方を見上げる。

やっぱり。

前回の戦い以降疑問に思っていたことが核心に変わる。

ゼロちゃんは自分から仕掛けてくることはほとんどない。

カウンターを狙っての事かと考えるが、カウンターと呼べるほどシビアな反撃はしてこない。

同時、あるいは交互に攻撃し合っているような気がする。

考えようによつてはチャンスだ。

先ほどの様にユーノ君の身を案じることができたし、何より先手を取れる可能性が高い。

これを生かさない手はない。

必ず先手を取る分、攻撃が読まれやすくなるがその位のリスクは承知の上。

私はレイジングハートを握る手にいつそう力をこめた。

「デイベインシューターっ！」

なのはの周囲に桜色の魔力弾が形成される。数は五つ。

先ほどと何か様子が違う。

ミルアはそう感じ警戒する。

「シュートっ！」

桜色の魔力弾は軽く弧を描きつつも、ほぼ同時の速度でミルアに迫る。

最終的になのはのシューターはミルアの眼前、その一点を目指して飛翔する。

しかし、その分ミルアも対応しやすく双頭の一闪で全てを叩きつぶす。

結果から言えば、なのは読み勝ちだった。

五つの魔力弾を眼前で同時に叩きつぶしたことでミルアの視界は一瞬砕け散る桜色の魔力で覆われた。

なのはその一瞬について正面からフラッシュムーブで距離を詰め、ミルアの鳩尾目がけてレイジングハートを突き出した。

バスターのよる砲撃よりもこちらの方がほんのわずかに速いと判断しての事だった。

しかし、ここまでは読み勝っていたものの、なのはにとって予想外の事が起きた。

ミルアの反応が異常に速かった。

眼前で砕け散る桜色の魔力を突き抜けるようにして迫るレイジングハートを、ミルアは膝で蹴りあげた。

レイジングハートはミルアの仮面の横をかすめ、なのはとミルアは顔を突き合わせる形になる。

離れなきゃ。

なのはがそう思った瞬間、腹部に痛みが走り、視界がぐらつく。ミルアの拳がなのはの腹部にめり込んでいた。

なのは何か言おうとするが、全身から力が抜け意識を失った。

ミルアは意識を失ったなのはを抱え、ユーノの前に降り立つ。

「よかったですか？」

ミルアの言う意味はなのはに手を貸さなくてよかったのか？という意味だろう。

そんなミルアの言葉にユーノは首を振り、

「よくはないさ、なのはは僕の友達だ。けれどそのなのはにきつく言われてるんだよ。私一人で戦わせてって。どうも僕の体調を気にしてるみたいだね。現にまだ、体調も魔力も万全とは言い難いし、そう考えると、なのははつくづく凄いと思うよ」

そう言つて首を振るユーノ。
そんなユーノにミルアは、

「では、そんな優しいなのはさんと貴方においしいケーキを出してくれるお店を紹介します」

人差し指を立てるミルア。

ユーノはいきなり何？と首をかしげるが、ミルアはかまうことなく、

「この間、翠屋という喫茶店にいきました——」

「ちょっと待ったっ！」

慌てるユーノに「はい？」と答えるミルア。

ユーノはたらたらと汗を流しつつ、

「その喫茶店、なのはの家族が経営してるんだけど・・・」

ユーノのその言葉に動きが完全に止まるミルア。

その仮面の下ではユーノ以上に汗を流している。

あちらの世界で、なのはの実家の話は聞いてなかった。

それ故の失敗だったが、いくらなんでも狭すぎるだろ世間、と誰にでもなく心の中で文句をたれるミルアだった。

その後ミルアは、ユーノに軽く手を挙げ挨拶をし結界内を後にした。

残されたユーノはなのはが目を覚ますのを待ち、目が覚めたなのはにミルアが「翠屋」に来たらしいと告げた。

さすがになのはも驚いたが、ケーキの味をほめられたことには素直に喜んでいた。

その後二人とも結界を解き、その場を後にしたが、先に立ち去ったミルアも、後のなのは達も、自分たちを覗き見していた者には気がつかなかった。

「もう行つたな」

「行つたよ、この覗き魔」

「うるせえ、いきなり、やほー、なんて接触できるかヴオケ！」

校舎の隅でこそこそと言い争うひと組の男女。

なのは達とさほど背丈の変わらない黒髪の少年一人と、少年よりも頭一つ背が高い金髪セミロングの少女が一人。

よく見ると少女の背中には小さな白い羽が生えていた。

「にしても、あの特撮ヒーローみたいな仮面被ったガキンちょは誰だ？」

そう言つて少年は首をかしげる。

少女は、面倒くさい、という表情をして、

「リュウトが知らなきゃアタシが知ってるわけないじゃん」

「別にお前に聞いとらんわ」

「じゃあ何？独り言？うわキモっ！」

そう言つて引いて行く少女。

独り言ごときで、と頭にきた少年は少女に掴みかかる。

が、数分後地面に押さえつけられているのは少年の方だった。

「神様なめんなよ若造がっ」

少年を押さえつける少女の表情には邪悪な笑みが浮かんでいる。

少年はじたばたとしながら、

「うるせえ！あのガキンちよの正体も知らない癖に。ダメ神、略してダミがっ！」

「人の事ダニとかゴミみたいに言うな！わざわざ『リリカルなのは』の世界に転生させてやった恩を忘れるな！アンポンタン！」

「元々てめえが俺の落とした小銭拾うために道路に飛び出さなきゃ、俺も助けようとして飛びださなかったわっ！神様のくせに小銭ごときでせこすぎるわっ！」

「きいいいっ！」

「ぎゃあああ！締めるな締めるな！なんか切れる切れるっ！」

マジな悲鳴を上げる少年。

名前を越智^{おち}リュウト

少女の名前はラスナ。

彼等の発言からわかるとおり、リュウトは転生者で、ラスナはリュウトを転生させた神様である。

リュウトの死因は交通事故による失血死。

リュウトの発言通り、彼が小銭を道路に落とし、たまたま地上に降りていたラスナが「ラッキー！」と言わんばかりに道路に飛び出し、それに気がついたリュウトが彼女を止めようとして飛びだしたところにバスが突っ込んできた。

結果としてリュウトは死ぬこととなり、原因の一端になったラスナは一応の責任を感じてリュウトを、彼が望んだ『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生させることになった。

無論、無能力というわけではなく、ある程度は戦えるように自分の力を分け与えていた。

リュウトは小さな工場で働く人間であったがダメ神、略してダミのせいで死を経験し、この世界に転生していた。

元から『魔法少女リリカルなのは』のファンであり、中でもフェイトが一番のお気に入りで、

もし叶うならにやんにやんな関係になりたかった。

ダミにそれを告げた時、ゴミでも見るような目で見られたが。

フェイトが一番のお気に入りといっても他のキャラが嫌いなわけではない。

可能な限り皆が悲しまないような結末とやらに導きたかった。

基本お人よしなのである。

そして、そのための一歩として、各人物の観察と現状把握等の一環としてなのはストーリーキングを、あきれるダミを引き連れて行っていて、今いる学校にやってきたわけだった。

誰だったんだ、あの仮面のガキンちょは？

先ほどまで自分を締めあげていたラスナから解放されたリュウトは再び首をかしげる。

あんなキヤラは原作にはいない。知らない。聞いたことがない。

「なあ、あの仮面の奴、俺みたいに転生者の可能性は？」

「なくはないと思うけど、なんか違うんだよねえ」

「なんだよ頼りねえなあ。それでも神かよ」

「神つても『連合』の中じゃ中の下だし『下位領域』の広範囲を把握するような感覚は持ち合わせていないのよ」

ラスナは両手を広げて仕方ないじゃん、とアピールする。

リュウトは『連合』？『下位領域』？と疑問の声をあげるがラスナには「こっちの事情」とあしらわれた。

「とりあえず帰るか。腹も減ってきたし」

「そだね」

そう言つて二人は帰路に就いた。

翌日の朝、二人は街中の大きな交差点にいた。目的はフェイトとの接触だった。

正確に言えば接触のための、きっかけ探し。

「で、目的のフェイト嬢が住んでいるマンションは何処なわけ？」

ラスナが気だるそうに聞く。

背中から生えている羽は服で強引に隠している。

リュウトは「あれだよあれ」と大きなマンションを指差した。

リュウトがマンションを指差すとちょうど歩行者用信号が赤になり人の流れが止まる。

ふと、リュウトがラスナを見る。

横から見てもはつきりわかるほど、ラスナの顔が青くなってゆく。

リュウトは思わずラスナの肩をゆすり、

「おい、大丈夫かつ？」

ラスナはある一点を見つめ「なんで、どうして、まずい」と繰り返す口にした。

そして、はっと我に返ると困惑するリュウトの手を引っ張ってその場を後にする。

ラスナは、わけがわからず色々と問うてくるリュウトを無視し、その手を引っ張り、あるマンションの一室に駆け込む。

そこは現在二人が使用している部屋だった。

部屋に駆け込むとラスナは、リュウトを部屋に投げ入れ、周囲を警戒しながらドアを閉めた。

「いてて、おいダミ！説明しやがれ、どういうことだ！」

リュウトは当然のごとくラスナに抗議した。

仮にも神であるラスナがあんな青い顔をしていたというのがリュウトを大いに困惑させていた。

自分を死なせ転生させる時もへらへらしていたくせにだ。
そんなラスナがまだ青い顔をしていた。

明らかに異常な事態だ。

そう感じたリュウトは少し落ち着いた雰囲気で、

「とりあえず説明してくれないかラスナ。俺には何が何だかわからないんだよ」

ラスナはリュウトの顔を見て深呼吸をする。

少し落ち着いてきたのかリュウトに「ごめん」と一言謝ると、

「さっきね、交差点の反対側にね、いたんだよ」

リュウトは、何が？と聞きたいのを押さえて次の言葉を待つ。

「『人形』がいたんだ」

ラスナの言葉にリュウトは思わず首をかしげる。

ラスナは再び深呼吸をすると、

「『人形』っていうのはね、私達『連合』の敵である『イーター』
が戦力として使っている人型のロボットのことなの」

「お前たちの敵ってことは悪魔みたいなもんか？」

「違うよ。『連合』っていうのはね、神とか悪魔とかいろいろごっちゃになってるものなんだよ。『イーター』って連中がいつたい何なのか、はつきりとした事はわかってはいないんだけど、私達『連合』と張り合えるぐらいやばい連中なんだよ。そもそも『連合』自体が奴ら『イーター』に対抗するために作られたものだから」

リュウトはそこまで聞いて頭が混乱していた。
なんかスケールが大きくなってやがる。

神や悪魔と張り合えるって何さ。

もうその時点でやばいのがわかる。

リュウトは恐る恐る、

「その『人形』ってのもやばいのか？」

リュウトの言葉にラスナは首を振って、

「『人形』自体は大したことないよ。この世界の武器でも倒せない
事はないくらいに」

ラスナの言葉にリュウトは安堵する。

しかしラスナは「けどね」と続けて、

「『人形』がいるってことは『イーター』もいるってことなんだよ。
『人形』だけで行動してても絶対何処かでモニタリングしてるはず
だから」

リュウトはそこまで聞いて改めてやばい事態と理解した。

何故その『イーター』がこの世界にいるのかはわからないが、のん
きに、原作介入とかやってる場合じゃないのかな、と感じた。

リュウトはふと、あることに気がついた。

「あの仮面の奴と何か関係あるのかな？」

「『イーター』ではないと思う。何かしらの関係がないとは言いき
れないけど」

リュウトはもし、関係があるのなら早めに手を打った方がいいと思
った。

なのはやフェイトがもし巻き込まれたらたまったもんじゃない。
リュウトはそう思い、

「ラスナは『連合』の所属なんだろう？ だったら『連合』に連絡した
らいいんじゃないのか？」

「さつきから連絡は取ろうとしてるんだけど、神族用のジャミング
がかけられてるみたいで連絡が取れないんだよ」

そういうラスナは青い顔したままかなり焦っていた。

相手の目的が分からないが、応援が呼べないとなるとこちらの戦力
は『連合』内で中の下の自分と、自分が力を分け与えた転生者一人
相手の戦力にもよるが、あまりにも心もとない。

クソっ！ こんなはずじゃなかったのにつ！

ほんとならリュウトの転生後の人生をのほんと眺めているはずだ
った。

どういうわけか死ぬ間際に笑っていたリュウトに興味を抱いてここ
まで付いてきたのに・・・
どうする。どうすればいい。

こちらからも相手を調査してあわよくば先手をとるか？

いや、下手をすればこちらに気がつく可能性もある。

それで相手の戦力の方が上回っていたら元も子もない。

私だけどころかリュウトもやられるのは必至だ。

ああもっつ！ ジャミングさえかけられてなけりや応援を呼べるのに
チクショーっ！

顔色は戻ったものの深刻な表情でなにやらぶつぶつと言っている

ラスナにリュウトが声をかける。

「あのさラスナ」

「なにっ？」

ラスナは考えているところに声をかけられて不機嫌そうに答えた。
内心、あんたの事も心配してんだぞ、と思いながら。
そんなラスナをよそにリュウトは、

「さっきお前、神族用のジャミングがかけられているって言ったよな」

リュウトの言葉にラスナはイライラしながらも、

「言ったよ、それがなにさっ？」

「なんで、わざわざ神族用のジャミングなわけ？」

「はあ？そんなの決まってるでしょ！神族が連絡とかできないように決まっ——」

ラスナはそこまで言って固まった。

ちよつと待って、どうして神族限定なわけ？奴らの敵である『連合』には魔族やら精霊やらなんやらと多種多様なのに神族限定。

ちよつと待ってちよつと待ってちよつと待って——

再びどんどん青ざめていき、その場にへたり込むラスナ。
すると突然部屋の中に多数の魔法陣が現れる。

床や壁、そして天井。

いたるところに現れた魔法陣が一斉に光り始める。

突然の事で当然のようにリュウトは慌てる。

へたり込むラスナをゆすつて、

「おいっ！ラスナこれって——」

「まずい、まずいよ。どうしよう」

ラスナがそうつぶやいた瞬間二人は光に包まれその場から転移した。

その世界は直径一メートルほどの岩がごろごろしていて草木がまばらに生えている大地だった。

リュウトとラスナはそんな世界に強制転移させられていた。

「ようこそ、神族と転生者」

そんな声に二人は振り返った。

そこには白衣を着たショートカットの少女がいた。

リュウトは未だ青ざめているラスナをかばうようにラスナの前に立ち、白衣を着た少女を睨みつけて、

「あんたが『イーター』か？俺たちに何の用だ？」

リュウトの問いに少女は微笑して、

「まずは自己紹介をしておきましょうか。私は『イーター』第14艦隊所属、名前をリアと言います」

リアの自己紹介にラスナがビクツと反応した。
リュウトはラスナの反応に気がついて、

「おい、ラスナ、あいつのこと知ってるのか？」

リュウトの問いにラスナは軽く首を振り、

「あいつ自体は知らないけど、あいつの言った第14艦隊っていうのは知ってる……」

ラスナはそう言ってリアの方を見る。

リアはラスナの方に、どうぞ、といった具合のリアクションを取り、それを見たラスナはリアの方をちらちらと見ながらリュウトに、

「第14艦隊の主な任務は様々な世界に赴いて、資源、技術、人材等を確保し、兵器の開発やら実験をする事。艦隊の構成は、そのほとんどが、戦闘と、その他作業を兼用する『人形』と、様々な世界から拉致してきた人間。なにより厄介なのが、少数配属されている『イーター』で、少数故にその実力はかなりのものって聞いている」

ラスナの説明を聞いて、リュウトはラスナの先ほどのラスナの反応を理解した。

中の下を自称するラスナにとって目の前にいるリアという『イーター』は相当脅威なのだろう。

誰が見てもわかるくらいおびえてやがる。

リュウトはそう思って苦笑する。

この極めて厄介な状況、笑うしかなかった。

「で、リアとやら、あんたの目的は何なわけ？」

リュウトがそう問うと、

「私達は今、ある人物を観測しているんですよ。あなた方も見たと思いますけど仮面を纏った少女なんですけど、ああ安心してください。私達の目的はあくまで観測なので当該世界の人物に対しては手を出すつもりも接触する気もありませんから」

リアはそう言つてニコリとほほ笑んだ。

リュウトはその笑みが余裕の表れと感じて体を強張らせて、

「だったら俺たちに何の用があるんだよ」

「邪魔なんですよ」

リアの答えに、邪魔だと？ふざけんな！とリュウトは内心毒づく。恐らく余所者で介入してくるであろうと判断して自分達を邪魔者扱いしているんだろうが、そんなこと知ったこっちゃない。

むしろ、あんたが邪魔だ、とリュウトは言いたかったが、ぐっと堪えた。

ラスナがおびえる相手を、ラスナに転生させてもらった自分が倒せる可能性は極めて低い。

どうする、どうすればいい。

リュウトは思案しながら、ちらりとラスナを見るが未だ青ざめおびえていた。

そこで、ふとある事を思いつき、ラスナに念話で、

（おい、ラスナっ！ここから逃げて、なんとか『連合』と連絡取れ

るか？)

(ジャミング外に逃げる事ができれば連絡は取れると思うけど、
そう簡単には・・・)

(OK! だったら俺が時間を稼いでやる! 何が何でも時間を稼いで
やる! だからお前は逃げて連絡を取れ!)

リュウトの提案にラスナは驚いて、

(まって、いくらなんでも無理すぎるよ! リュウトの実力じゃリア
に殺されちゃうよ!)

(そんな事はわかってるよ。大丈夫、適当なところで命乞いするな
り逃げるなりするさ。とりあえずお前が逃げればいい。俺も一応
男でね、かっこつけさせるやダミ)

リュウトはラスナにそう伝えようと、短距離の強制転移でラスナを転
移させた。

かっこつけさせろ、とは言ったものの体の震えを押さえるので精い
っぱいだった。

リュウトは強がって、リアを睨みつける。

「ああ、そういう手段に出るわけですか。ですが、転生者、あなた
一人でどうにかなるとでも?」

リアはそう言って軽く首をかしげる。

リュウトはそんなリアを鼻で笑って、

「さあてね。でもよ、あんなにおびえてる奴にてめえをどうこうさ

せるわけにはいかないだろうよ」

そう言つてリュウトは自嘲する。

以前の自分は何もできなかった。

ただひたすら何の変哲もない日々をダラダラとすごしてきた。

それがあの日。自分が一度死んだ日。

他人の為に命を張れた。

自分が死んじゃ世話ないが、それでも、やればできるじゃないか俺、とバスに激突され激痛の中思ったのだ。

例え、そもその原因を作ったとはいえ、再びチャンスくれたラスナにはなんだかんだ言つて感謝してるのだ。

ここで踏ん張らなきゃ、力を与えられ転生した意味がない。

恩返しなんて事は言わない、これは俺の二回目の見せ場だっ！

リュウトの右手に一本の剣が現れ、その剣を強く握る。

その剣を振りかぶり、勢いよく駆けリアに斬りかかる。

しかしリアはリュウトの一撃をなんの苦もなく避ける。

リュウトは二度三度と剣をふるうも、それら全てはリアをかすめることもなく空を切る。

再び剣を振るおうとした時、リアの拳がリュウトの顎を捉えた。

リュウトは転がるように後方にとばされるが、剣を地面に突き立て踏みとどまった。

「くっそ、おかしいな、俺の動きつてそうそう捉えられるものじゃないんだけどな・・・」

ばやいたところで現実には全ての攻撃は避けられ、なおかつ一撃もらっている。

時間を稼ぐため、なんとかして踏みとどまらないとな。

リュウトはそう思い、剣を後ろにかまえる。

そして頭上に振りあげ、

「エクスカリバー約束された勝利の剣っ！」

振り下ろされた剣から強大な魔力が放たれ、その奔流は一直線にリアに向かってゆく。

しかし、向かってくる奔流に対してリアは、まるで風でも遮るように右手をかざして全てを受け流してしまう。

「なるほど、やはりそれは宝具でしたか。もしかして、その宝具を出現させたのは投影ですかね。しかし、所詮、人が扱う宝具など限度が知れてますね」

リアは水滴でも払うように右手をふった。

渾身の一撃をあっさりと流されたリュウトは、そんなリアを見て苦笑する。

いくらなんでも今の対応は酷すぎるだろ。

桁違いっていうのにも程がある。

リュウトは思わず声に出して抗議しなくなった。

リアはそんなリュウトに、

「もし、あなたのレベルが無限の剣製を扱える程ならもう少し時間を稼げたのでしょうけど」
アンリミテッドブレードワークス

リュウトが「何故それを」と口にした時、リアは既に目の前に迫っていた。

剣を押さえられ振ることも盾にすることもできない。

一瞬時間が止まったような感覚に襲われる。

ラスナ、悪い、どうも俺は逃げれそうにない。
せめてお前だけでも――

そこでリュウトの意識はいったん途絶えた。

ふと眼を覚ますと全身を激しい痛みが襲う。
いったい何をされたのか分からない。
いや、なんとなく思い出せる。

さっきまで一方的に殴られたり魔法でブッ飛ばされたりしてた気がする。

体は動かないのに何故か浮遊感を感じる。

ああそうか首をつかまれて持ち上げられてるんだ。

リアと目が合う。

どうして、

どうしてそんな同情するような目で俺を見るんだ？

お前はいったい何を思っているんだ？

「・・・さようなら、あわれな転生者」

それがリュウトが最後に聞いたリアの声だった。

第04話 新たなる生の一つの結末（後書き）

観測者であるリアの優位的な立場を、原作と絡ませることなく示すために、転生者としてリュウトという人物を考え出したのですが、たった一話で退場させることを、おしいと思っています。

でも都合上退場なんです。

第05話 それは運命というものか（前書き）

第04話の半分ほどの文章量。

前回が多すぎただけです。はい。

第05話 それは運命というものか

神族であるラスナはリュウトに強制転移させられ、先ほどまでいた場所からかなり離れた場所にいた。

今は逃げなきゃ、連中がかけているジャミングの外に出て『連合』に連絡を取らないと。

ラスナは転移の為の魔法を展開する。

ジャミングの影響が出ているのか長距離の転移はできない。なら小刻みに跳ぶしかない。

転移魔法を発動させラスナはその場から消えた。

リュウトは大丈夫だろうか？

ラスナはそれが気になって仕方なかった。

あいつは馬鹿だ。

たかが転生者が『イーター』にかなうはずなのに私の為に殿なんかして。

本来なら逆だ。

私が残らなきゃいけなかったんだ。

なのに今も足の震えが止まらない。

私が怯えてさえないなければ、あいつが私を逃がすようなことはしなかったはずだ。

くそっ！くそっ！これじゃ、あいつの言うとおりダメじゃないかっ！

まだか、まだジャミングの外に出られないのか。

早く、早くしないとあいつが、あいつが死んじゃう。

死なせるために転生させたんじゃないっ！

見たいんだ。あいつの歩む道というやつを。

何故かはわからないけど見ていたいんだ・・・

くそっ！こんな――

「こんなはずじゃっ！」

何度目かの転移の後、ラスナは吐き捨てた。
未だジャミングの外には出れていない。
思わず地面を殴りつける。

長距離転移ならジャミング外に出るのはそう難しくないが、やはり
短距離となるとかなりの回数が必要になる。
あと何度の転移が必要なのだろうか。
ラスナは転移魔法を展開する。

「——っ！」

転移魔法を発動させようとした瞬間、背中に激しい痛みと衝撃を感じ、前のめりに吹っ飛ばされてうつ伏せに倒れる。
服の背中部分が破け、服の下の押し詰めていた純白の羽が露出する。
ラスナは両手について上体を起こし、

「な、なに？」

振り向くと遙か後方にリアが立っていた。
う、うそ？

なんで、そこにいる。

あいつは？リュウトはどうしたの？

嫌だっ！嫌だっ！

違っっ！違っっ！

ラスナはふらふらと立ちあがり、

「リュウトは？リュウトは？」

「なんですか？その顔は？神族がまるで、怯える人のようではない

ですか」

リアは左手をラスナに向けると、その手から電気を帯びたような赤く光る球体が現れ、ラスナに向かって一直線に飛び、足元に着弾する。

しかしラスナはそんなことは気にも留めていない。

「リュウトは？リュウトは？」

「転生者ですか？私がそれを教える必要性があるのですか？」

リアはやれやれといった具合に再び赤い球体を放つが、ラスナは今度は一歩踏み出し、右手を横に振って、赤い球体をはじきとばす。はじきとばされたそれはリアの足元に着弾するも、リアは視線をそこに移すのみ。

リアがラスナに視線を戻すと、ラスナは下を向き、

「よくもリュウトを、よくもリュウトをつ！おまえはあつ！」

顔をあげたラスナに怯えはなく、その表情は怒りに満ちていた。

「もう少し早くその気になっていれば、このような事にはならなかったのじゃないね」

「うるさいっ！うるさいっ！」

ラスナの手にリュウトが使っていたのと同じ剣が握られ、いつきにリアとの距離を詰め、その剣をたてつづけに振るう。

一振り目はなんなくかわされるが、二振り目はリアの顔をかすめ血をにじませる。

三振り目はリアの首を斬り落とすように振るわれたが、その首に届く前に素手で刃を掴まれる。

ラスナは「化け物がっ！」と吐き捨てるがリアは「お互いに」と失笑する。その顔に三振り目で刻まれた傷は既にふさがっている。

ラスナはリアを引き離そうとその腹部を蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたリアは掴んでいた刃を離し、後方にとばされつつも赤い球体を三発連射する。

一発目と二発目はかわされるも三発目はラスナの左肩に直撃し、ラスナは苦痛の声をもらした。

「このおおおっ！」

ラスナの羽が大きく広がり、風の刃がいくつも地面や周囲の岩などを傷つけながらもリアに向かってゆく。その範囲は広く紙一重でかわせる、といったような物ではなかった。

リアはすぐさま自身の前面に防御結界を張るが風の刃のいくつかは防御結界を抜け、リアの体を切り刻んでいき周囲に血が飛び散る。

「この程度で」

風の刃がやむとリアの前に、その体とは不釣り合いな、強大な銃のような物が現れ、リアはそれを左脇に抱えるようにして持つ。

銃の側面にある、棒のようなメーターが満たされるとリアは銃口をラスナに向け、その引き金を引く。

その銃口から赤い水柱の様なものが放たれ、一直線にラスナに向かってゆく。

ラスナはその赤い水柱の様なものを横に大きくかわし、リアとの距離を詰め、その胴を薙ぐように剣を振った。

しかしリアは後方に下がるようにして、その剣をかわすと、大きく

ラスナの上方へ跳び、そのままラスナとの距離を離すようにさらに上へ上へと飛んで、ある程度飛んだところでラスナに銃口を向け、その引き金を引く。

赤い光が銃口の先端に集束され、赤い水柱の様なものとなって再びラスナを襲う。

ラスナはそれを先ほどの様に大きくかわすが、その顔面に、リアが持っていた銃そのものが直撃する。

リアはラスナが回避することをみこんで、その回避先に銃そのものを投げつけたのだった。

「がつ！」

突然の事にラスナの視界が一瞬奪われる。

銃自体は凄まじく重くラスナを怯ませるには充分だった。

一瞬ラスナに隙が生じ、そこをついてリアは地面に降り立つと一瞬でラスナとの距離を詰め、その勢いのままラスナの腹部を蹴り飛ばす。

腹部を蹴り飛ばされたラスナは、かなりの距離を飛ばされるが途中で剣を地面に刺し踏みとどまる。

しかしラスナの視界にリアはおらず、わずかにその気配を感じて振り返ろうとした。

次の瞬間、わき腹に激しい痛みが走り、ラスナはわけがわからないまま吹っ飛ばされ地面を転がっていく。

ラスナは剣を杖のようにして立ち上がり正面を睨みつける。

そこにはいつの間にか銃を拾い、脇に抱えるリアがいた。

動きの速さにむらがある。

それがラスナが抱いた感想だった。

異様に速い時もあればそうでない時もある。

もしかしたら先ほどの様な速さはそう頻繁に出せないかもしれない。

何かしらの制限があれば助かるのだけど。

ラスナは地面から剣を抜き、その柄を握る手に力をこめる。地を踏み切り、羽を軽く広げリアの元まで瞬時に加速、剣をいつきに振り下ろす。

その速さに、リアは銃を盾の様にして剣を受け止める。

ぱきり、と音がしてわずかに銃にひびが入る。

リアは軽く舌打ちをして、ラスナのわき腹を薙ぐように蹴り飛ばそうとした。

しかしラスナはその蹴りを膝で受け止め、瞬時に剣を振り上げ再び振り下ろす。

銃で防がずとつさに体をそらし直撃は免れたが、リアの胸元を剣は裂いていた。

鮮血が舞いリアの白衣をじわじわと赤く染めていく。

ラスナは後方に飛んでリアとの距離をとる。

追撃しようとリアがラスナに銃口を向けようとする。

「なにっ？」

思わずリアは声をもらす。

銃や胴体、手足が光の輪で拘束される。

バインド。

体中のバインドに視線を移しそれを理解するとラスナに視線を戻す。

ラスナは剣を振りかぶり、その剣は光り輝いていた。

「約束された勝利の剣ああああああっ！」
エクスカリバー

リュウトのそれとは比べ物にならないほどの強力な魔力の波が振り下ろされた剣から放たれ、それはリアを飲み込もうと、その身に迫

る。

リアはなんとか両手のバインドを破壊し銃を投げ捨て、自分を飲み込もうと迫りくる魔力の波を防御結界を展開し、正面から受ける。強力かつ巨大な魔力の波はリアの防御結界で止まることなく、防御結界の上から体を、魔力を削り取っていく。

しかし傍から見ると不利な状況にあるであろうリアは自身の体や魔力が削られていく状況にもかかわらず、その顔には、

笑みが浮かんでいた。

「あれだけ怯えていたのにもかかわらず存外やるじゃないですか。私もむきにならざるをえないですよね」

魔力の波によつて、防御結界越しにその身を削られつつも、笑みを浮かべながら言うリアの態度は現状を「余裕」と物語っていた。

あたりは先ほどまでの喧騒が嘘のように静まり返っていた。

地面はいたるところがえぐれ、あちらこちらに転がっていた岩の多くはくだけ、わずかにあつた草木は見る影もなくなっていた。

先ほどの戦闘からどれほどの時間が経ったのか定かではないが、そこには少女が一人立っていた。

「いたた、さすがに久しぶりの戦闘はこたえますね」

そう言つてリアは左腕をぐるぐると大きく回す。時折、ごきつと音が鳴り、リアは顔をゆがめる。

髪の毛は乱れ、白衣も見るも無残な事になっていた。

リアは白衣の残骸を脱ぎ棄てると、地面に横たわりピクリとも動かなくなつたラスナを右肩に抱えあげる。

「転生者は単なる神族の戦力で手駒だと思っていたし、今まで神族はそのように扱っていたように感じますが、どうもあなたは違つたのですかね？」

リアはそう問うがラスナは答えることもない。

「まああなたが転生者をどう思つていようが、転生者の存在が世界を圧迫している事に違いはないんですけどね」

リアは誰に聞かせるわけでもなく愚痴るとラスナを抱えたまま転移魔法でその世界を後にした。

こっちも現地も天気はばつちり、用意も昨日のうちに済ませておいたし完璧やつ！

そう思いながら、はやてはガッツポーズをする。

自分のしらないところで、色々と起こっていたのだが、そんなことを知る由もなく。

それはミルアも同じだった。

「いざ行かん温泉旅行っ！おーっ！」

「おー」

はやてはともかく、ミルアの「おー」はどう聞いても棒読みだった。なんか先が思いやられる。

ミルアは一抹の不安を感じつつ自分とはやての荷物を詰めたバッグを背負う。

荷物は着替え程度の物しかないが二人分となるとバッグも小さい物とはいかず、それを背負うミルアを背後からみるとバッグから手足が生えているようであった。

現地までは、まず最寄り駅まで徒歩で行き、電車を乗り継いで、その後は、石田医師が旅館に連絡していたため、旅館の方から迎えが駅まで来ることになっていた。

戸締りを確認し家を後にする二人。

ミルアは今日までに旅行なんてしていいのだろうか、何度か思っていたのだが、楽しみにしていたはやてをむげにもできず、結局旅行に行くことになった。

「ミルアは旅行は初めてか？」

「旅行と呼べるものは初めてです。あっちへふらふら、こっちへふらふらと放浪の旅はしてましたがサバイバルに近かったですし、現地の巨大な生物に襲われたり」

「そ、そうか、初めてか。じゃあ楽しまなな♪」

そう言うてはやてはほほ笑む。

こっというのも悪くない。

ミルアはそう思った。

過去の放浪の旅は思い出たくないものが多かった。

あまり大きな声では言えないが管理外世界を無断で旅していたりしたし、未だ管理局が把握していない世界もいくつか立ち寄っていた。

いくつかの世界では多くの人が死んでゆくのを直に見た。
そして人を手にかけた事も。

人が見ればそれは仕方ないと言える事かもしれない、あまり思い出したくない事に変わりはない。

「ミルアどうかしたんか？」

はやてに声をかけられ「え？」と答えるミルア。

少し考え事をしていた、と答え再び駅に向かって歩き出した。

「なあミルア、聞いてもいいかな？」

「・・・はい」

「なんで電車で酔うてんの？」

「さ、さあ・・・気持ち悪い・・・」

旅館の最寄り駅に着くとそこには旅館からの迎えの車が来ている。
旅館の人が車椅子に座るはやてを抱え上げようとしたが、既にミルアが抱え上げていた。

はやてを迎えの車に乗せ車椅子をたたむと、ミルアも車に乗り込む。

「ミルアは力持ちだねえ」

「はやてぐらいなら片手でいけますよ」

ミルアはそう言って拳を握って見せる。

はやてはミルアの手をぺたぺたと触っていたが、しだいに袖口から手をすべり込ませていく。

「なにをしてるんですか」

ミルアはやての手をつねりあげる。

はやての扱いにずいぶん慣れ始めていた。

これも毒されているうちに入るのだろうか、とミルアは内心考えていた。

車が旅館に着きミルアは車椅子を広げはやてを抱え座らせる。

ミルアの動きは素早く旅館の人が手を出す暇もない。

はやてを乗せた車椅子を押し、いざ旅館に入ろうとしたミルアは唐突にその足を止める。

「どうしたんミルア？」

当然のごとく、振り返り疑問の声をあげるはやて。

ミルアは「いえ」と答え前を見つめる。

ミルアの視線の先には、

「高町なのは」と、その一行がずらりとした。

第05話 それは運命というものか（後書き）

次回は温泉回。

別段どたばたしないと思うけど。

第06話 遭遇に遭遇を重ねて

『機兵』を自称するミルア・ゼロは、汗が背中を伝うのを感じていた。

原因は目の前の一行にある。

以前立ち寄った翠屋で見かけた店長などが計三人いるが、おそらくあれが、なのはの家族なのだろう。

他の数人は見たことがないが、なのはの友人か何かだろうか？

とにかくにも、こんな所ではと出くわすのはあまりにも予想外だった。

ミルアは戦闘時は仮面を被っていたので、顔はわからないだろうし、声も仮面のせいでもって聞こえていたはずだから、そう簡単には正体がばれることはないだろうが、それでも警戒するに超したことはなかった。

「どうも、こんにちは」

ミルアが内心、焦っているのを解るはずもなく、はやてが気さくにあいさつをする。

なのは一行も「こんにちは」と笑顔で返してくる。

ミルアは、はやての後ろで縮こまっていた。

普段と様子の違うミルアに、はやては首をかしげ、

「もしかして、まだ酔ってるんか？」

はやての言葉にミルアが「いえ大丈夫です」と答えると、なのはの父親である高町士郎は、

「気分でも悪いのかい？君達の親御さんは？」

「ありがとうございます。この子は大丈夫です。それに私達、商店街の福引でペアの招待券を当てたんで旅館の方には保護者から連絡してもらって子供等二人で来ました」

士郎は、はやての「商店街」という単語に反応して、もしかしてわりとご近所さんかとも思い、はやてに自宅の大まかな住所を教えるとはやてもそれに答え、互いにご近所である事がわかった。ついでに自己紹介までしはじめる。

ミルアはそこで、ふと、あることに気がついて、自己紹介を終えミルアのことまで紹介しようとするはやての口を後ろからあわてて塞ぎ、

「ミルアです…八神ミルア」

と伏目がちに名乗った。

なのはには迂闊にもゼロと名乗ってしまったる故の苦肉の策だった。口を塞がれ困惑するはやてだったが、ミルアから「何も聞かないでください」と耳打ちされ、まあいつかと返す。

はやての口から手を離れたミルアは士郎に向かってぺこりと頭を下げ改めて挨拶をした。

そして各人がそれぞれ自己紹介をしていた。

それぞれが自己紹介を終えると、なのはの友人で茶色がかった金髪のロングヘアが特徴のアリサ・バニングスが、

「貴方達姉妹？それにしちや全然似てないけど」

と至極最もな疑問を口にする。

すると、同じくなのはの友人で長い黒髪をヘアバンドでまとめた月村すずかが「アリサちゃん」とたしなめる。

あまり無遠慮に他人の家庭のことを聞くべきではないという意味なのだろうが、はやてはまったく気にすることなく、

「いやぁミルアは私の腹違いの妹でして。昔、お父さんがそのことでお母さんにボコボコにされて」

と、かなりとんでもない設定を口にした。

はやての言葉に苦笑いするしかない高町家ご一行。

ミルアはミルアで内心、

（よりもよって、なんて罪をお父様にきせてるんですか）

と、つつこんでいた。

その後、高町家ご一行とはやて達は立ち話もそこそこにして旅館に入り、それぞれが部屋に案内されていた。

なのは達やはやてと一緒に温泉に入ろうと約束して。

おかしい。

まだ旅館に着いただけだ。

なのに、どうして私はこんなに疲れているんだろうか。

ミルアは部屋についてからも自問自答していた。

無論答えは思いがけない形でなのはと遭遇して変に緊張していたからなのだが。

はやてと言えば目に見えて楽しそうだった。

ミルアとしては、はやてが楽しそうなのはいいことではあるし、それ自体がミルアにとって楽しい事にもなりえるが、なのはの目があ

るところでは完全にリラックスというわけにはいきそうになかった。

「はやて、温泉に行くのでしょうか?」

「ん、そうやで。ミルアは?」

「無論一緒に行きますよ」

そのミルアの答えに、はやてはとても嬉しそうに笑顔をみせる。

この笑顔を少しでも維持できるなら多少精神的にきつてもいいかな、とミルアは思った。

温泉へと車椅子を押すミルアは、はやてに、

「お星様になったお父様に謝つといてくださいね」

と、一言釘を刺しておいた。

温泉の脱衣場にて、脱いだ服を入れるかごが置かれた棚の中でユーノ・スクライアは一人(一匹)悶絶していた。

見た目がフェレット故、半ば強引になのはに連れられて、女性用の脱衣場にいたのだった。

そんな、それなりに羨ましくも、けしからん状態のユーノを他所に一系まとわぬ状態のミルアは、どうしたものか、と感想を抱いていた。

と、いうのもミルアは現在、なのは、アリサ、すずか、なのはの姉の美由希、すずかの姉の忍の計五名から注目を浴びていた。

そして上半身裸のまま車椅子に座っているはやては無駄に得意気。
なんのことはない。

単にこの場にいる誰よりも白い肌を持つミルアが注目されているだけだった。

アリサにいたってはペタペタと触ってはいるが。

（はやて、何故貴方が得意気なのですか）

と、内心思うミルア。

アリサは一通り触り終わると、一言「病的に白い」と、つぶやいた。最もな意見ではある。

部位によつては血管がこれでもかという具合にはつきりと透けて見えた。

恐らく人によつては気味悪がるのではないだろうか。

「私は凄くきれいだと思うよ」

と、さすがに感想を述べるとアリサは、

「髪の毛も真っ白で瞳は赤。まるで雪ウサギね。素敵じゃない」

そういつてニツと笑った。

アリサの感想になのはや、はやても同意の声をあげる。

美由希と忍がどこか羨ましそうにこちらを見ているような気がするのは気のせいだろうか。

ミルアはそう思いながら、はやての脱衣に手を貸していた。

その後ミルアがはやてを軽々と抱え上げる光景に一同驚いたり、ユ

ーノがアリサに体を洗われたりと、賑やかで楽しい温泉タイムは過ぎていった。

旅館の廊下というものは実に広い。

廊下は木の板を並べたシンプルな作りで、窓などではなく庭と直接つながっている作りだ。

だがそれ故に実際よりもさらに広く感じる。

外が晴れているせいもあってか、とても心地よかった。

ミルアは、はやての乗った車椅子を押し、その左側にすずかが、右側になのはとアリサがいた。

温泉を後にした五人は今からどう過ごそうかと会話しながら歩いていた。

卓球をしようか、とか、お土産を見に行こうか、と話をしていた。

ミルアは会話には参加していなかったが、ふと前方に立っている人物に気がついて、表情に出すことなく驚いた。

特徴であるイヌ科の耳と尻尾こそないものの、紅葉を連想できそうな茜色の長髪の女性。

フェイトの使い魔であるアルフだった。

ミルアやなのは達同様、浴衣を着ているところを見ると彼女も客であるうか。

ミルアに続いてなのはもアルフに気がついて驚いた表情をして動きを止める。

アリサやすずかは、そんななのはに気がついて「どうしたの?」と声をかけるが、なのはは慌てて笑顔を見せて「なんでもない」と答えた。

アルフもこちらに気がついてはいたが普通の客のように互いに「こ

んにちは」と挨拶だけしてすれ違った。

ただ、すれ違う時アルフは何処かで嗅いだことがあるような匂いに気がついたが、温泉上がりという事もあってか、何よりなのはの存在があったため深くは気には止めなかった。

最もミルアにとっては助かった、ということになるのだったが。

なんの他愛もないくつろぎの時間が過ぎていった。

ミルアは、はやてと一緒に今回協力してくれた石田先生へのお土産を買った。

旅館の食事もいつも口にするはやての手料理とはまた違った美味しさがあった。いつもと違う環境というのも一つの調味料だろうか、とミルアは真面目に考えていた。

そうして夜もふけ、いつものようにミルアは、はやてと一緒に布団に入っていたが、はやてが眠るのを確認すると、音を立てないように部屋を出て、そのまま外に出た。

とても明るい月明りの中、少し歩いていると小川があり、そのそばには、なのはの父である高町士郎がいた。

士郎はミルアに気がつくと、

「どうしたんだいこんな時間に。はやてちゃんは？」

「はやてならもう眠っています。私は、そうですね、散歩です」

ミルアはそう言って士郎のそばに立った。

士郎は「そうかい」と笑顔で答えると、月を見上げた。

そんな士郎をミルアはなんとなくじっと見ていたが、しばらくして

少し首をかしげながら、

「何か考え事ですか？」

「わかってしまうかい？」

「勘で聞いただけです。特になにかあるわけでは」

士郎は月を見上げたまま、

「ちょっと、なのはの事でね」

「なのはさんの？」

「最近あの子が何かを隠してる、いや、悩んでるような気がしてね。父親としてどうしたものかな、と。以前、僕の事情でなのはにさびしい思いをさせたことがあってね。その事で負い目を感じてるせいかな。つい考え込んでちゃってね」

そう言つて士郎は少し自嘲気味に笑った。

父親としては、まあ、こんなものなのだろう、とミルアは思った。

なのはが恵まれているかどうかと聞かれれば恵まれているのだろう。どうにも自分は今まで色々見すぎている。

素直に羨ましいとか素敵とか感想を抱けないものだろうか、とミルアも内心、自嘲していた。

「ミルアちゃんはお父さんの事どう思っているんだい？」

そんな士郎の不意の質問にミルアは何も答えずにいた。

一応はやての急な設定でいけば父親はいることにはなっているが、

正直、子供という立ち位置から見た父親というものがよくわからなかった。

所詮ミルアは外野からしか父親という物を見た事がないのだった。そんなこんなで、ミルアが答えないとすると士郎は、

「ごめんね。答えづらい事聞いちゃったかな」

そんな士郎にミルアは「いえ」とだけ答えた。

そして、その場にしゃがみこんで小川に指先をつけるようにしながら、

「なのはさんの事ですけど。大丈夫だと思いますよ」

「どうしてだい？」

「少し会話したのですが、とても優しい人だと感じましたし、それは貴方に対しても同じです。貴方がなのはさんのことを信用していると、なのはさんにそれとなく伝えれるのでしたら、貴方はしっかりとかまえていればいいと思います。それ自体がなのはさんにとって安心とを感じるんじゃないんでしょうか。そうすればいずれ色々と話してくれる、かもしれません」

ミルアはそこまでいうと立ち上がって士郎の顔を見上げると、

「すみません。えらそうな事をいって、しかもこれも勘ですし」

そう言うミルアに士郎は笑顔で首を振ると、

「そんなことはないよ。ありがとう、すこし元気と自信が出てきたよ」

そう言つてミルアの頭を軽くなでた。
悪い気はしない。

いや、むしろ心地よかった。

ミルアはそう思った。

「君は不思議な子だね」

士郎の言葉にミルアは、

「変な子です」

そう答えるミルアの表情は、士郎には微笑んでいるように見えた。

しばらくして、ふと、ミルアは遠くの異変に気がついた。

ジュエルシード。

その気配をミルアは感じ取った。

すぐにでも駆けつけようと思ったが、そばに士郎がいる。

ここからの位置では旅館とは反対の方向にある。

どうしたものかと考えた末、ミルアは士郎に「先に戻ります」とだけ言い、旅館のほうに戻りつつ、すぐ

脇に逸れジュエルシードの気配がするほうに駆けていった。

ジュエルシードがある方向に、なのはとフェイトの魔力も感じる。

急がないと、そう思った瞬間、はるか前方に誰かが転移してきた。

アルフとユーノだった。

ミルアは二人に気づかれる前に近くの茂みに隠れた。

素顔を隠さず浴衣姿のまま二人の前に飛び出したら、いくらなんでも後々やばい。

ミルアはすぐさま仮面とバリアジャケットを装着すると茂みから飛

び出した。

「っ！ゼロっ？」

アルフが真っ先に気がついて驚きの声を上げる。
ユーノも驚きの声をあげるがミルアはそんな二人に足を止めることなく、

「アルフさんここは任せます。私はフェイトさんの元へ」

そう言つて二人の前を駆けていった。
あまり時間をかけて、はやてが起きてしまえばやっかいだ。
ミルアは、そうあせる気持ちを抑えつつ加速した。

アルフとユーノの前を駆け抜けたミルアはフェイトとなのはを視界に捕らえた。

ミルアはそこで意外な光景を目にする。
フェイトとなのはの二人は肩で息をしていた。
魔力の消耗が激しいのか空中での姿勢制御がやっとのようで、フェイトにいたってはバルディッシュの魔力刃すら消えかけていた。
だが、そこまではいい。

二人は向き合つた状態ではなかった。

二人の視線の先、二人が対峙しているしていたのは、

「どうしてここに…」

ミルアはつぶやいた。

この世界とは関わりあいのないはずの『人形』がそこにはいた。

第07話 少女円舞

月明かりが周囲を照らす林の中、その木々の間をフェイト・テストロッサは駆け抜けていた。

反応からしてジュエルシードはこの辺りにあるはず。

私は足を止めて周囲を見渡す。

木々の間は手入れはされているがやはり落ち葉などで地面の多くは隠されてしまっている。

落ち葉の下にでも入り込んでいたら少々厄介だ。

「あの子が気づく前に見つけて撤収したいんだけどな」

私は誰に聞かせるわけでもなくつぶやいた。

アルフから、あの白い魔導師が近くの温泉に来ているのは聞いている。

急いで見つけたいが焦って見落としがあつては意味がない。

軽く深呼吸をしてから周囲の搜索を再開する。

数分間搜索したところで、ふと、アルフの報告を思い出した。

あの子は家族や友人たちと温泉に来ているらしい。

家族。

家族。

家族・・・

色んな光景や思い出が頭の中を駆け巡る。

ダメだダメだダメだ。

今はそんなことを考えている余裕はないはず。

私は頭の中の物を振り払うように慌てて首を振る。

その時、木々の間で何か光るものに気がついた。
もしかしてっ！

私は期待を胸にそれに近づいた。
それに少し近づいたところで私は息をのんだ。
そこにあつたのは確かにジュエルシールドだ。

問題はそこじゃない。
問題はジュエルシールドの隣に横たわっているものだった。

「…女の子？」

ジュエルシールドの隣に横たわっているのは確かに女の子の様に見える。背丈からして私より年上だろうか。
さらに近づいた時、思わず私はバルディッシュを握る手に力をこめた。

胸が真つ二つに、つまりは上半身と下半身が完全に離れていた。
月明かりは木々の枝葉に遮られてあまり届いてはいなかったが、それだけは、はつきりと見えた。

単なる私の見間違いで、胸長の女の子だったらどれほどよかっただろうか。

あんなことになって、とても生きているとは思えない。目も見開かれたままだ。

ジュエルシールドに絡んで人が死んだ。

こんな事態は初めてだ。

どうする、どうすればいい。

アルフに連絡を取ろうか。いや、なんにしたところで女の子が生き返るわけではない。ここはジュエルシールドを回収して早々に立ち去るべきだ。

混乱しそうになるのを何とかして押さえて私はさらに近付いた。
その時風が吹いて木々の枝葉を揺らして、月明かりが先ほどよりも女の子を照らした。

「っ！」

この短時間で私は何度驚けばいいのだろうか。

月明かりに照らされた女の子は人間じゃなかった。

いや生物であるかどうかすら怪しい。

月明かりは女の子の真っ二つにされた上半身と下半身の断面を照らしだしていた。そこには血も肉も内臓もなく、多くの金属や機械が顔をのぞかせていた。

ちゃんと調べてみないと詳しくはわからないが、恐らくこの女の子は機械仕掛け、つまりはロボットだ。

真っ二つにされているということは誰かに壊されたのだろうか。

でも誰に？それにこの世界にこんなロボットを作る技術があるのだろうか。

何にせよ人でないだろうという事が私を少し安心させた。できれば人の死など見たくはない。

とにかくジュエルシードを回収して撤収しよう。

そう思った時、後ろに気配を感じて私は慌てて振り返った。

「フエイトちゃん？」

枝葉から漏れる月明かりに下、そこにはバリアジャケットに身を包んだあの白魔導師がいた。

失態だ。

私は思わず声に出しそうになる。

ジュエルシードとロボットの女の子に気を取られて周囲の警戒を怠ってしまった。

なんてお粗末な。

私は自分を責めた。

「フエイトちゃん、その子は？」

あの子は私の後ろにあるロボットの事を言っているのだろう。
当然と言えば当然の疑問だ。

私はバルディッシュをかまえて、

「見た目は女の子だけど、これはロボット。詳しくはわからないけど壊れてる」

私の言葉に反応する目の前の彼女の顔からは困惑が見て取れる。

私も困惑しているのだから今来たばかりの彼女が困惑するのも無理はない。

彼女の反応を見るに、やはりこのロボットはこの世界の物ではないのだろうか？

だとしたらどうということだろうか？

私の知らないところでやっかいな事態になっている。そんな不安に襲われた私は視線は彼女に向けたまま、背後にあるジュエルシードに手を伸ばした。

瞬間、背後で何かが弾けるような音がした。

聞きおぼえがある音。そう、あれは電気が走る音だ。

私は思わず後ろを振り向いた。

物言わぬ少女を模したソレの瞳に光が灯り、その横でジュエルシードは輝き、その輝きは徐々に増していった。

「フエイトちゃんっ！」

ジュエルシールドの魔力が解放され、その勢いに飛ばされたフェイトをなのはは受け止める。

フェイトを受け止めたのはだったが力及ばず、そのままフェイトと一緒に地面を転がって行った。転がる途中でフェイトは地面に手をつき踏みとどまる。

「そんなっ！ロボットがジュエルシールドを取り込むなんてっ！」

そう吐き捨てたフェイトは正面を睨みつける。

フェイトの視線の先には破壊されていた事実などなかったかのように少女を模したソレが立っていた。緑色に光る瞳に、放出される魔力にゆれる長い黒髪、先ほど見たときとは違い胸部は鎧の様なもので覆われ、額にはジュエルシールドが埋め込まれていた。

ジュエルシールドを確認したフェイトはバルデッシュをソレに向けて魔力弾のフォトンランサーを立て続けに三発放った。

フェイトの魔力弾はなのはとは違い直線的に飛ぶ。誘導性はないが、その分、速度に優れている。現にフォトンランサーは発射後、すぐにソレに直撃していた。

「
——っ！」

フェイトは眉をひそめた。

ソレにフォトンランサーは直撃したはずなのに、その体には傷らしき傷が一切なかった。

すぐさまフェイトはバルデッシュをかまえる。バルデッシュから魔力刃が展開し鎌状になる。

「はあぁっ！」

フェイトが地を蹴りソレに斬りかかる。

魔力刃は確かにソレに触れているはず。

しかし、ソレの体に傷がつかない。正確に言えば魔力刃がソレの体の表面を撫でていつてしまう。

フェイトはすぐさま距離を取ろうとする。

しかしフェイトの動きより早く、ソレの手がフェイトの首を掴む。ソレの指が徐々に首に食い込んでいき、フェイトの口から声にならない声があがる。

次の瞬間ソレの顔面に桜色の魔力弾が数発直撃した。

そして続けざまに、なのはがレイジングハートを、フェイトの首を掴むソレの腕に叩きつける。

解放されたフェイトはバルデッシュでソレを思い切り突き飛ばし、自分も後退する。

なのはもフェイトに続き後退し、

「デイベインっバスターっ！」

桜色の直射砲がソレを飲み込む。

だが撃ち終わって、なのはは「そんな…」と声をもらす。

なのはの視線の先、ソレはバスターの勢いに押され多少後退しているものの、やはり体に傷らしきものがついていなかった。

状況に困惑しているなのはにフェイトは、

「恐らく体表面に魔力を弾くコーティングが何かがしてある。何か物理的な攻撃を加えるか、想定されている以上の魔力を叩きこむか、コーティングが劣化すると仮定して攻撃を加え続けるか」

「と、とりあえず攻撃を加え続けるという方向で…」

フェイトは、なのはの言葉に軽くうなづくとソレとの距離を保ちつつフォトンランサーを放っていく。

なのはもフェイトにならってディバインシューターをソレに放った。最初こそなのはとフェイトの攻撃をおとなく受けていたソレだったが、標的をなのはと定めたのか、一気に駆けなのはとの距離をつめる。

次の瞬間、ソレの右腕から刃が突出して、なのはの首目がけ振る。

「わわっ！」

なのははソレの刃を仰け反るようにして避けると二、三步下がりそのまま空中に飛びあがる。

そして、なのはは自分を見上げるソレに対して数発、シューターを放つ。

ソレはなのはのシューターを後ろに数歩下がるかたちで避けシューターは地面に直撃した。

しかし次の瞬間、ソレの背中および足元にフェイトのランサーが次々と直撃しソレをよろけさせた。

なのははそのチャンスを見逃さずバスターをソレに浴びせた。

なのはがソレにバスターを浴びせる中、フェイトはバルデッシュを大きく振りかぶり、アンダースローの形でバルデッシュを展開された魔力刃をソレに向かって飛ばした。

飛ばされた魔力刃はバスターを浴びているソレに直撃すると思われる。

しかしソレは、なのはのバスターから逃れるとそのまま空中に飛びあがって、自分に向かってくる魔力刃を回避した。

「まだっ！」

ソレを追うようにフェイトは飛びあがり持ち前のスピードで距離を詰め、バルデッシュをソレに叩きつける。

ソレはバルデッシュを左腕で受け、金属同士がぶつかる音が周囲に

響いた。

ソレの右腕の刃がフェイトに向かって振られるが、フェイトはその刃をなんなく回避して距離をとるため後退した。

後退したフェイトは再びバルデツシュの魔力刃を展開したが、

「えっ？」

フェイトの右足にワイヤーの様なものが巻きついていていた。

ワイヤーはソレの左腕から伸びている。

しまった！いつのまにっ！

フェイトがそう思った瞬間、全身から力が抜けていった。

何かされた…魔力行使がスムーズにいかない。

フェイトはそう判断するも、どうにもできず空中でふらつく。

バルデツシュの魔力刃も今にも消えそうになっている。

「フェイトちゃんっ！」

なのははフェイトの元に行こうとするが、ソレはなのはに向かって今しがたフェイトから回収したワイヤーを放つ。

なのははワイヤーをレイジングハートではじき返し、ソレを大きく迂回する形で再びフェイトの元へ行こうとした。

なのはの視界の端でソレの胸部の鎧が上下に開いた。

そこには丸い水晶の様なものが埋め込まれていて、水晶が光った次の瞬間そこから金色の魔力砲がなのはに向かって放たれた。

「くっ！」

間一髪気がついたなのはは右手でシールドを張り魔力砲を正面から受け止めた。

魔力砲が途絶え、シールドを解除した瞬間、右手にソレのワイヤー

が絡みつく。

まずいつ！

なのはがそう思った次の瞬間にはガクツと体中から力が抜けた。空中でふらつくなのはと早々に地面に降りたフェイトを余所にソレは悠々とワイヤーを左腕に回収する。

そして右手の刃をフェイトに向けた。

耳を澄ませてみれば何か空気を震わす音が聞こえた。その音はソレの右手の刃から聞こえているようだった。

高速で振動しているのかな？あれを食らったら、いくらなんでもまずいかな…

フェイトが冷静に考えていると、ソレはフェイトに向かって突っ込んできた。

「こいつ！」

フェイトはバルデッシュを握る手に力をこめ突っ込んでくるソレを睨みつけた。

ソレはもう目前に迫っていた。

金属同士がぶつかるような大きな音がした。

フェイトの目前まで迫っていたソレは何かに弾かれ大きく後ろへ吹っ飛ばされている。

ソレを弾きとばした人物がフェイトに背を向け立っていた。

「選手交代です」

ミルアはフェイトに背を向けたまま、そう言葉にした。

私は視線の先にいるソレを注意深く観察する。 姿かたちに若干の違いはあるが、ソレは間違いなく『人形』のMAIDENシリーズと呼ばれる物。私がこの世界に来る前にぶっ壊してた物だ。それがどうしてここにいる。しかも額にはジュエルシードが埋まっている。悪い冗談だ。

「フエイトさん、なのはさん、ここは私が引き受けますので二人とも離脱してください」

「あ、あのゼロちゃん」

「なのはさん、反論はなしです。今すぐ離脱を。直ちに。刹那に」

「う、うん。それじゃあ気をつけてね」

「ゼロ、気をつけて。あのロボット、妙なワイヤーを使ってきた」

「了解です」

それぞれ私に声をかけた後二人ともその場を離脱していく。フエイトさんのいうワイヤーとは恐らく対魔導師用・・・なんだっけ？略称は『AMCW』だったはず。効果は確か数分だったはず。フエイトさんとなのはさんはAMCWを食らったのだろう。だからあそこまでふらついていたのだろう。納得がいった。

「警戒エリアヲロスト Nemesisシリーズ00ヲ再び確認
戦闘ヲ続行シマス」

どうやらあの人形は言語機能がイカレっぱなしのようである。以前はもつと流暢に喋っていた。それにしても「再ビ確認」とはどういうことだ？こんな固体とは会った覚えがないのだけど。

私にの疑問を他所に『人形』は右手から突出した刃、ハイバイブレーションブレード H i V B を振りかざして突っ込んできた。

『人形』の攻撃を空に飛んでかわす。直後、振り向こうとする『人形』に魔力弾を乱射する。『人形』と周囲の地面に着弾し土埃を舞い上げる。私はそのまま『人形』と距離をとって様子を見る。

土埃がおさまり姿を見せた『人形』はまったくの無傷だった。

はて？『人形』の標準装備である A E C (対エナジーコーティング) はあそこまで高性能だっただろうか？せいぜい焼け石に水程度のお粗末なものだったはずだが。そう疑問に思ったがすぐに答えに行き着いた。あの額のジュエルシードだ、おそらく。もうここまで来ると何でもアリですねジュエルシード。まあもつとも私もその「何でもアリ」に賭けているですけど。

「っ！」

私を見上げていた『人形』が空を飛びこちらに突っ込んできた。それを寸でのところで回避する。

すれ違い、互いに振り向きざまに己の得物を振り、得物同士がぶつかり激しく火花を散らす。

高機動ユニット無しで飛行までやってのけるなんて悪い冗談だ。私は罅迫り合いの状態から力いっぱい『人形』を押しつけ距離をとる。

「シャインっ！バスターっ！」

金色の魔力の流れが『人形』を飲み込む。

だがどうせ性能が飛躍的にあがった A E C のせいで大したダメージにはならない。

そら見たことか。案の定、私の攻撃は『人形』の表面の一部を焦がしただけ。予想どおりではあるが正直残念だ。ここまで魔法が通用しないとなると手段は限られる。

私は双頭を構え『人形』との距離を一気に詰め、そのまま双頭を振り下ろす。

『人形』はH i v Bで双頭を受け止めるが、私はそんなことは、お構い無しにそのまま全力で双頭を振りぬいた。

双頭を全力で振りぬかれ『人形』は勢いよく地面に叩きつけられる。

「そこおっ！」

地面に倒れる『人形』に双頭を突き立てようと急降下する。

しかし『人形』は地面を転がるように避け、双頭が地面に突き刺さる。

双頭を引き抜こうとする隙を利用して『人形』が立ち上がったが、私は地面に刺さった双頭から手を離し立ち上がったばかりの『人形』の腹をおもいきり蹴飛ばす。再び地面を転がる『人形』を無視し、地面に刺さったままの双頭を引き抜き、そのまま『人形』に殴りかかる。

月明かりの下で森の中からは金属が金属を打ち付ける音が幾度となく響き渡る。

一方的な何度目かの双頭による殴打で『人形』を吹っ飛ばした。

「悪い冗談ですね…物理防御力まで上がってるんですか…」

『人形』は未だ健在。普通の人間ならばダメージはともかく殴打の衝撃で脳が揺れるなどして多少はふらつくが『人形』はそんなものとは無縁。バカ正直にばこすか殴ったところでどこまでダメージが期待できるか…

そんなことを考えつつも再び突っ込むべく私は腰を落として、その

まま『人形』めがけて地を駆けた。
しかし『人形』との距離を詰め双頭で薙ごうとした瞬間『人形』の胸部の鎧が上下に開き、そこに埋め込まれていた水晶から金色の魔力砲が放たれ、私は回避も防御も出来ずに直撃をもらう事になった。よりにもよって顔面に。

「あグッ！」

魔力砲の直撃を受け吹っ飛ばされた私は数本の木をなぎ倒したところで止まった。

拳句に途中で双頭を落としてしまった。魔力砲が顔面に直撃したため視界がまだはつきりしていない。

視界がはつきりした時には『人形』のH i V Bが目の前に迫っていた。

「っ！」

私はとつさに振り下ろされるH i V Bを右腕で受け止めた。

血が舞い、続けて火花が周囲に散る。金属が削れる音が耳をつんざく中、私はH i V Bを右腕でそのまま押しつけ『人形』のあごを左手で下から殴りつけた。

一歩二歩と後ろに下がる『人形』に対してさらに蹴りを見舞う。

『人形』は私に蹴られ、吹っ飛ばされつつも左手からワイヤーを伸ばしたきた。

伸ばされたワイヤーは私の右腕に巻きつき、同時に私の体を違和感が走る。

どうってことない、多少魔力行使が阻害され魔法が発動しづらくなったところで魔力自体はなくなる、なれてしまえば魔法を完全に発動できずとも魔力行使ぐらいなら強引に出来る。それに私はさつきから殴ってるだけだからワイヤーでつながれた現状は逃げられ

ない分殴りやすい。まあ同時に攻撃もされやすいが。そう思い私は右腕に巻きついたワイヤーをそのまま右手でつかむと、同時に『人形』の鎧の胸部が再び上下に開いた。

その手で来ますか…それならっ！

私は歯を食いしばって空いている左手に魔力を流し手のひらを魔力で包み込む。

『人形』から魔力砲が放たれたが、私はかまうことなく『人形』に向かって駆け迫ってきた魔力砲を、魔力で包み込んだ左手で受け止める。

「あああああああつ！」

魔力砲を左手で強引に受け止め何とかしてその場に踏みとどまる。

一秒、二秒と耐え、私はそのまま強引に『人形』に迫る。

『人形』の目の前までたどり着いた私は、

「ブレイクつインパクトっ！」

左手を『人形』の胸に叩き付けた。

その瞬間大きな爆発が起き、『人形』の胸に大きな風穴を空ける。

しばらくの沈黙の後『人形』はまるで操り糸が切れたようにその場に崩れ落ちた。

第08話 二つの想いと一つの思惑

「はぁ・・・はぁ・・・」

周囲にフェイトとなのはの気配、そして監視の有無を確認しミルアは仮面を脱ぎ捨てた。近くの木にもたれかかり自身のダメージを確認する。右腕にはH i V Bを受け止めた際に出来た大きな傷があった。出血は止まっているが傷は相当深い。出血が止まっている分傷口が丸見えになっていてちょうど骨にあたる部分まで見えていた。左手も手のひらをはじめとして、かなりぼろぼろになっていた。こちらにも出血は止まっているが指、手の甲、手のひら、腕、いたるところに裂けたような傷が出来ていた。

ブレイク・インパクト

これはミルアにとって魔法というより魔力を使用した技という認識だ。

手に魔力を集中させ、敵の魔法など、形に変化をもたせられるエネルギー系統の攻撃を受け流す事も消耗させる事もなく受け止め、そこに自身の魔力をおりませ、そして包み込み、相手に叩きつけるようにして前方に指向性を持たせた爆発を浴びせる。爆発に指向性を持たせる事によって爆発による自身へのダメージは極力減らせるが、まったくのノーダメージとはいかない上に、そもそもそこに至るまでにかなりの無理が受け止めた腕にかかる。

しかも、相手の攻撃が激しければ激しいほど技自体の威力も上がるが負担も大きく、そもそも受け止めきれない可能性もある。余談になるが、ミルアは一度しくじって左手の手首から先が吹っ飛んだ経験があったりする。

根本的な話になるがミルアはその魔法の出力などに対して体そのものが耐え切れない事が多々ある。余談をもう一つ言えば左足の膝か

ら先が崩壊した事もあったり。
自己再生能力が異常に高い分ミルアは無茶しいなのだ。
本人に言わせれば、

「無茶はしても無理はしない」

ということらしいが・・・

「そろそろ旅館に戻らないとまずいですね」

ミルアはそう言うつと残骸と化した『人形』からジュエルシードを回収した。

この『人形』はどうしようか？

ミルアはそんなことをしばらく考えてから、ふとあることを思いついて転移魔法を組み上げ、そのまま『人形』のみを転移させた。

「さて、とりあえず戻りますか」

回収したジュエルシードを懐にしまつとミルアはその場を後にした。

「ソロモンよ私は帰ってきた」

「いったいいつから自宅がソロモンになったんですか」

「カウンペイトウでも可」

「今、鍵をあけますから」

ミルアはボケるはやての相手もそこに玄関の鍵を開けた。
あの『人形』との戦闘後、はやてに特に気づかれる事もなく、無事
旅行から帰還することができた。もっともたかが旅行でそう何度も
トラブルに遭遇する事なんて普通はないが。

玄関をあけ、ミルアははやての車椅子を押して家の中に入った。

「な、なんじゃこりやあつ！」

玄関に入るなりはやての第一声。かなりおかしい第一声だが目の前
の光景では仕方のない事だった。

はやての目の前玄関内に横たわっているのは胸に風穴をあけた『人
形』の残骸。そう、ミルアは八神家の玄関に破壊した『人形』を転
移させていたのだ。

転移させた当の本人はしれっとして、

「私に関係ある代物なので人目に触れる前に玄関に転移させておき
ました。ああご安心を、死体とかそんなものではなく、ロボットで
す、ロボット。動力部が消し飛んでるので動きませんが」

「なんや、そうか、危うく119番するところやった」

そう言っ額汗をぬぐうはやて。ちなみに胸に風穴があいてるの
で119番では遅くさい。

「で、これどうするつもりなん？等身大の着せ替え人形とかには使
えそうやけど」

「生憎そんな趣味はありません」

はやての提案をきっぱりと否定するミルア。そんなミルアに「えー」とはやては不満をもらす。ミルアはそんなはやてを他所に『人形』の首根っこをつかみ、そのまま担ぎ上げると、

「ちょっと庭でばらしてきますね。素材自体は使い道があるので」

「えと、とりあえずご近所さんには見つからんように」

「了解です」

ミルアはそう答えると『人形』を担いで庭にむかっていった。はやてはミルアを見送りながら、

「ところでアレ何処で拾たんやろか」

そんな疑問を口にしていた。

私は八神家の庭で黙々と『人形』を解体していた。

いい加減そろそろ彼女との接触を図らないとまずいかもしれない。管理局の動きもそうだが、何より彼女自身の体力の問題もある。必要な物自体は以前から所有している資料でなんとかなるはず。やはりネックは時間とジュエルシードの数か・・・できるか？ではなく、やるしかない。もとよりそれがこの世界にとどまった理由の一つ。そう考えながらも『人形』の解体を終えた私は、解体した『人形』を一まとめにして家の中に運び始めた。

すっかり日の沈んだ海鳴市内、フェイトはビルの縁に立ち眼下で
きらめく町の明かりを眺めていた。

今回のジュエルシードの回収がすんだら母さんの所に報告に行こう。
ジュエルシードとは別にお土産を持って。

フェイトはそう考えながらバルデッシュを胸に抱く。

この街にいと、なんだか自分がとても浮いているように感じる。
異世界の住人なのだから浮いていても不思議ではないのかもしれない
いが、それでも何か疎外感を感じずにはいられなかった。母さんの
為、これが終わり、母さんの研究がうまくいけば、すべてが以前の
ようになる。

その思いが今のフェイトを強く支えていた。

「ジュエルシード、この辺りだと思っただけど、大まかな位置しか
わからないんだ・・・」

「確かにこれだけごみごみしてるとねえ・・・ものが小さいだけに
厄介だよな」

フェイトの言葉にアルフも同意する。

人が多い街中で小さい物を探すというのは、傍から見れば相当に怪
しい。人目に触れないようにするに越した事はない。人目に触れれ
ばそれだけ封印にリスクが伴う。フェイトとしてはそれは避けたい
事態だった。

「ちょっと乱暴だけど周辺に魔力流を撃ち込んで強制発動させるよ」
フェイトが自覚している通りかなり乱暴な方法ではあるが短時間で

他に探しようがないのだから仕方ない。発動後、即封印してしまえば周辺をまきこむリスクも最小限ですむ。フェイトはそう判断した。フェイトが魔力流を撃ち込もうとバルデッシュを掲げるとアルフがそれを制して、自分がやると言い出した。その申し出に最初は渋ったフェイトだったが、結局アルフに説得され、アルフが魔力流を撃ちこむ事になった。

日も完全に沈みデジタル時計の数字が19時を告げる頃、なのはは街中を早足で家路を急いでいた。今の今までジュエルシードの搜索をしていたが時間が時間なので後をユーノに任せていた。

ふと、なのはは立ち止まって携帯を取り出してメールを確認する。新着メールはない。なのはは少し沈んだ表情で携帯をしまいこんだ。昼間なのはは学校で友人のアリサに怒鳴られた。理由は数日前からなのはが何を話しても上の空だったため。おそらくなのはを心配してるからこそその事なのだろう、と、なのは自身理解はしていた。悩みがあるなら自分達に相談してほしい。アリサやすずかの言葉にしない思いは、なのはも理解はしている。けれど、自分の事、フェイトちゃんのこと、ゼロちゃんのこと、どれをとっても無関係のアリサたちに話すわけにはいかなかった。

友人、いや親友と呼べる存在だからこそ巻き込むようなことはしたくなかった。

親友達の気持ちは嬉しい、けれど話すわけにはいかない。そんなジレンマがただでさえ多くの事に悩むなのはの心を一掃締め付けていた。

「帰ろう・・・」

なのははそう呟き再び歩き出そうとした、

「えっ？」

何かを感じ取りなのはは足を止めビルの森を見上げた。

黒い雲が月を覆い隠し、街中の明かりが波のように消えてゆく。しかしそれと同時に何処かにいるユーノの広域結界が街全体を多い通常空間から切り離す。

「レイジングハート、お願い」

なのはは赤い宝石のような待機状態のレイジングハートを掲げ、その身に白いバリアジャケットをまとい、杖状に形を変えたレイジングハートをその手に掴む。

アルフによって撃ち込まれた魔力流は街中にあつたジュエルシールドを刺激しその発動を促した。

天を突くジュエルシールドの光を、なのは、フェイト、アルフ、ユーノの四名が捕捉した。

「見つけた！」

ジュエルシールドの光を捕捉したフェイトが声をあげた。

しかしアルフが、なのは達も近くにいることを告げると、フェイトはすぐさまジュエルシールドを封印するためバルデッシュを、その為のシーリングフォームへと変えかまえる。そしてそれは、なのはも同様だった。

「なのは！発動したジュエルシールドが見える？あの子達も近くにいます、あの子達よりも先に封印を！」

あせるユーノの念話になのはは力強く「わかった」と答える。
レジングハートを構えて深呼吸を一度。
バルディツシュとレijingグハートから封印の光が放たれ、二つの
光はジュエルシードを正確に捉えた。

ミルアは所々明かりの消えたビルが並ぶ中、その屋上から屋上へと移動を繰り返していた。

街中に魔力流を撃ち込むなんて無茶をしてくれる。
そう思っていたミルアの視界に広域結界の境目が入る。加速しようとミルアが足をビルの屋上につけた。

「なっ？」

ミルアはその体に、確かに世界がゆれるのを感じた。

「次元震っ？なんて事をつ！」

ミルアは急いで結界内に飛びこみ、そのまま現場に急行した。

結界内にてフェイトとなのははジュエルシードを挟んで対峙していた。

次元震の影響か、二人のデバイスにはいたるところにひびが入って

いる。

そして、一時的にその活動を静めていたジュエルシードが再び暴走を開始しようとした時、フェイトとなのはの間に割って入るようにミルアが飛び込んできて、半暴走状態のジュエルシードを両手で掴む。

「くっ！止まれっ！止まれっ！」

ジュエルシードを掴むミルアの手からは強い光が漏れ、同時に少量の血が飛び散る。

ガタガタと世界が揺れる様な感覚に襲われるミルア。

まずいっ！以前、記録で見たときよりも暴走の仕方が酷い。このままじゃ――

ミルアがそう思ったとき左手の手首が裂け大量の血が噴出す。

「ゼロっ！」

「ゼロちゃんっ！」

フェイトとなのははデバイスを待機状態にしながら、慌ててミルアの元へ駆けつけ、ミルアの両手に自分達の両手を添える。

「くっ止まれええっ！」「くっ」

示し合わせたわけでもないのに三人の声が重なる。

ミルアの手首から、当初こそ勢いよく噴出した血液だったが、その勢いはすぐに収まってゆく。そして、それと同じくジュエルシードの暴走も収まっていった。ジュエルシードの暴走が収まるとフェイトとなのはは、疲れたようにふらふらと後ずさる。ミルアはジュエルシードを懷にしまうと二人に背を向け歩き出した。

フェイトとなのはが、それぞれミルアを呼び止めようとしたが、ミルアはそれにかまうことなく飛び上がると二人から離れていった。

「さすがに今回ののはあせりましたね・・・」

八神家の玄関でへたり込むとミルアは呟いた。

左手首の乾いた血をぬぐうと傷口は既に塞がっている。とは言っても血液の消耗はさすがのミルアも負担になる。正直今回見たいなのは、もう勘弁願いたい。

ミルアはそう思いながら、へたり込んだ状態からそのまま後ろに倒れ、天井を見上げた。

「なにしてるんや？」

倒れこみ天井を見上げるミルアの顔をはやてが覗き込む。そんなはやてにミルアは、

「いえ、少し疲れただけです。問題ありません」

そう言って立ち上がる。

「もう晩御飯もできるし手あらってき」

はやてにそう言われたミルアは血にまみれた左手を隠すようにして洗面所に向かった。

そろそろ日付が変わろうとしている。

はやての部屋の、はやてのベットの中。当のはやては既に寝息をたてている。未だ眠っていなかった私は特に意味もなく天井を見つめていた。

今回の小規模な次元震で完全に猶予はなくなった。恐らく管理局は本格的に動き出す。これ以上、時間はかけれない。ここまでは下準備、本当に分の悪い賭けはまだ先だ。管理局を敵に回しつつ、というのがより一層難易度をあげてくれる。ほぼ間違いなく彼、クロノ執務官と相對することになる。正直な感想を言えば、実に勘弁願いたい。できれば彼等とは対立したくないが、私のやろうとしていることを彼等が認めるわけがない。何だかんだ言って彼等も甘いところがあるから、心情的には理解してくれるだろうが立場の上認めることはないだろう。だからこそ心苦しくもあるが、背に腹は変えられないという事だ。

そんなことを考えているうちに私はいつの間にか眠りに落ちていた。

第08話 二つの想いと一つの思惑（後書き）

ミルア「ミルアと」

はやて「はやての」

ミルア&はやて「お助け座談会ーっ！」

ミルア「ぶっちゃけ帰りたいです」

はやて「初っ端から何言っちゃってるかなこの子はっ！」

ミルア「はぁ・・・大体なんですかこのコーナー名」

はやて「そもそもこの作品のタイトル読めや、ということや」

ミルア「この作品のタイトル、誰かを指してるんですか？」

はやて「・・・（無言でミルアを指差す）」

ミルア「ああ、やつぱりそうなるんですか、まあ一応主人公ですから・・・主人公ですよね？」

はやて「出番よこせーっ！」

ミルア「脈絡もなく叫ばないでください」

はやて「ごほん、さて、ぶっちゃけ、ミルアって何者ですか？」

ミルア「ぶっちゃけすぎです。一応別の『魔法少女リリカルなのは』の世界から来ました」

はやて「なるほど、だからある程度未来の事を知ってるわけやね？」

ミルア「知ってますが、なんかもう既になのはさんの実力が私が聞いていた以上なんです。あと時系列や出来事もばらばらで」

はやて「並行世界ゆえの差異って所か」

ミルア「まあそういうわけです」

はやて「ミルア自身もいろいろ普通とは違う見たいやね。どういう出自？」

ミルア「複数の世界での科学、魔法、それらを組み合わせで作られた人造魔導師のようで、気がついたときには『魔法少女リリカルなのは』の世界でした。それ以前にも外には出た事があるようですが生憎記憶がないので」

はやて「いろいろ大変やったんやねえ」

ミルア「現在進行形で大変なんです。非戦闘時にも関わらず、誰かさんのせいで」

はやて「あははーっ！（脱兎）」

ミルア「なんで車椅子であそこまで速度が出せるんですか、なんかもう豆粒程度なんです。ん？置手紙？H i V Bの説明をせよ？い

や、あれはハイ・バイブレーション・ブレードといって、そのまま高速で振動して切れ味を向上させた剣なんです。一応『人形』の標準装備になります・・・え、終わっていいんですか？ええと、では、またの機会があれば（ノシ）」

第09話 壊れた想い (前編) (前書き)

形式変更 一話を二部構成にします。

第09話 壊れた想い（前編）

次元間航行も可能な移動庭園、「時の庭園」

庭園内の建物の中の一室、そこにある椅子に私は座っていた。

現状、手に入ったジュエルシードは6個。時の庭園の一室にて何度数えても変わる事のないジュエルシードの数を確認する。先ほどフェイトが持ってきた物だ。

アレは私、を「母さん」と呼ぶ。

そう呼ばれるたびに虫唾が走るし、アレに私の言う事を聞かせるために自ら母を名乗る事すら虫唾が走る。

おまけに今回はお土産といってケーキを買ってきたらしい。そんな余裕を許した覚えはないし、まるで本当の娘のような行動をとられると腹が立つてしかたない。

足りない。まだまだ足りない。

ジュエルシードは、その総数は21個だ。現状は6個。

妨害してくる魔導師がいるようだ。私が動ける体なら何の問題もないのだが、病魔に侵されたこの体では簡単には動けない。

話を聞くに協力者もいるようだ、正直信用ならない。こちらの利になるなら何でもいいと思っている節はあるが、それでも警戒するにこしたことはない。

どうもアレは信用しているようだ。

ふと、扉のほうで音がしたような気がしてそちらに目線を向ける。そこには妙な仮面をかぶった小さな少女と思われる者がいた。

そうか、こいつが、

「あなたがゼロね？ フェイトから話は聞いているわ」

私がそういうと少女は優雅にスカートの端をつまみ上げ頭を下げ、

「はじめましてプレシア・テストロッサ。私は『機兵』のゼロです」

ゼロの挨拶を聞いていた私はあることに気がついた。

「そうフェイトはつけられたのね」

「ええまあそういうことになりますね。転移先を割り出すのはそう難しくなかったですよ。特に警戒してるようでもなかったのです」

「で、フェイトに協力してる貴方が何のようかしら？」

そう、そこだ。この少女は何をしに来たのか。この際、仮面の下
の素顔など、どうでもいい。いったい何が目的で、そしてそれが私
の目的の障害となりえるのか。

ゼロは私の問いに、

「単に協力しに」

その答えに私は思わず嘲笑する。

いったい何を言ってるのか。いったい私の何を知っているつもり
か。いや、そもそも、ゼロが私に協力する事にゼロ自身なんの利が
あるというのか。

だから私は、

「ふざけた事をいうのね貴方は。いったい私が何の目的でジュエル
シードを集めているか知っているの？　そして協力する事で貴方に
何の利があると？　私をからかわないでくれるかしら、貴方死ぬわ
よ？」

最後の方には殺気をこめた。

しかしゼロは臆する事なく、

「貴方の目的は知っているつもりです。それに私に何の利が？　とおっしゃいましたが、私はただ助けただけです」

ゼロは私の目的を言っているという、しかも、そもその理由が「助けただけ」ときた。

助ける？　いったい――

「いったい誰を助けたいというの？」

そんな私の問いにゼロは一呼吸置くと、

「フェイトさんを、プレシアさん貴方を、そして――」

アレと私の名を挙げるゼロ。あと誰の名を挙げるつもりなのか。そしてゼロは思いもよらない名を口にする。

「そして――貴方の最愛の娘、アリシア・テストロッサを」

時間が止まったような感覚に襲われた。

何故、何故ゼロは私のアリシアの事を知っている。

いや、冷静に考えればその答えはすぐ見つかる。今回のジュエルシードの一件に私が絡んでいると知り、私の経歴を調べたのならアリシアの事を知っていてもおかしくはない。

そして、アリシアを助けたいという事は、ゼロは本当に私の目的を知っている可能性が高い。だが、その方法まで知っているだろうか。未だソコが疑問になる。

「どうして赤の他人である貴方が私やアリシアを助けたいというの？」

「さあ、どうしてでしょうね。あえて理由というのを挙げれば、貴方やフェイトさんの知るところではありませんが、私自身がフェイトさんに多少の思い入れがあるので」

「思い入れ？ 何かしら？」

「それが必要で？ 今の貴方には私が、貴方にとって利用価値があるかないかでは？」

まるでこちらの心を読んでいるかのような事を言う。

「確かにそうね。今の私は利用できるものはなんでも利用したい心情だもの。それで、貴方は私にどんな利用価値を示してくれるのかしら？」

「まず一つ目、単なる貴方の雑用係として、二つ目はジュエルシードの収集、先の小規模な次元震によって管理局の介入は確実と思われるますのでフェイトさんとアルフさんだけではきついでしょうから」

確かに先の次元震の事を考えれば管理局の介入は免れない、収集の人手が増やせるのは悪い事ではない。

ゼロは続けて、

「三つ目、アルハザードへの道よりも可能性が高いと思われるプランを提案します」

やってくれる。まさか私がアルハザードを目指している事まで知っているとは。しかしいつたいてどうやって知ったのか。

だから私は当然のごとく、

「ゼロ、貴方どうして私がアルハザードを目指している事を知っているの？」

「先に述べたように、それが必要で？ 証拠を示すことは出来ませんが貴方にとって不利になるような事はないとだけ断言させていただきます」

「自分で証拠がないといいながら随分な物言いね」

「自覚はしています。しかし私の出自にも関わる事ですし、何より私には、あなた方を助けた後にもやらねばならない事があるので情報源をペラペラ喋るわけにはいかないんですよ」

「正直いい気はしないけど、今はいいわ。それで、あなたの示す利用価値は三つだけかしら？ だったら三つ目のアルハザードを目指す以外のプラントやらを教えてもらえないかしら？」

そう言つて私は肘掛に肘を置き、頬杖をつく。姿勢は崩しても視線はゼロからいつさい外さない。

ゼロはそんな私の動きに反応することなく、

「すべてのジュエルシードとはいかなくても多数のジュエルシードの同時使用による、指定対象の時間逆行、および、その保全です」

「言葉にすれば簡単だけど、多数のジュエルシードの使用なんて無茶もいいところよ。いったいどう制御するというの？そもそも何故

アルハザードを目指すのではダメだと？」

「先にも述べたように可能性の問題です。あと、仮にアルハザードに到達したとして貴方のその体で、アルハザードに眠る魔法を体得、使用ができますか？」

痛いところを突いてくる。ゼロの言葉に私は思わず眉をひそめる。ゼロは私の心情を知ってか知らずか、かまうことなく、

「私の示すプランがかなり無茶なのは承知しています。ですがアルハザードを目指すにしても充分無茶ですし、どちらもしくはれば危険なんてものじゃすみません。ただし私のプランならある程度の安全策はうてます。そして何よりジュエルシードの制御に役立つ装置の設計図およびその資料が私の手元にあります」

ゼロはそういうと近づいてきて、何処から取り出したのか一冊のファイルを私に手渡し、そのまま下がる。

私は姿勢をなおし、渡されたファイルに目をとおす。そのファイルの内容に驚きつつ、

「なるほど、確かにこれなら、多少の希望は見出せるわね、貴方、大したものね、こんな物を」

私がそういうと、笑ったのかゼロは少し肩をゆらして、

「ファイルに少し目を通しただけで、その内容をすぐに理解できる貴方の方がよほど凄いですよ。私はそのファイルを盗んだデータから出力しただけなので。それと装置の作成自体は私が貴方の指示で行います。貴方の体調を考慮したうえで」

「それはありがたい事ね。けどファイルを見る限りこの装置はかなりの魔力を必要とするし、魔力制御の補助として魔導師との接続が必要になるようだけど？」

「魔力に関してはここ『時の庭園』にある大型の魔力炉を、制御の補助は私がやります」

その言葉に私は苦笑して、

「随分無茶をするのね」

「無茶はしても無理はしませんよ」

そう言ったゼロが鼻で笑ったかのように私は感じた。

第09話 壊れた想い (前編) (後書き)

お助け座談会は次回の(B)の方に書きます。

壊れた想い（後編）

「それで貴方は私の協力を受け入れてくれるのでしょうか？」

ゼロが少し首をかしげて聞いてきた。

「貴方の言うことを全て信用すればありがたい話ではあるわ。あくまで信じればね」

私がそう言うのとゼロは懷から小さな袋を取り出して私に投げてよこした。袋を受け取りその中身を確認すると、中にはジュエルシードが3個入っていた。

ジュエルシードを確認した私は、

「これはダメ押しのつもりかしら？」

「そう捉えていただいて結構です」

実に用意周到だ。ジュエルシードの事といい、私やアリシアの事といい、ジュエルシードを制御する為の装置の事といい。むしろ用意周到すぎる。

いったい、この娘はいつから準備をしていたのか。

そして、肝心なこと、

「ゼロ、貴方本当にジュエルシードで指定対象の時間逆行ができると思ってるの？アルハザードにはその手の魔法が存在するはずだけど。貴方、時間逆行によってアリシアの時間を巻き戻すつもりなのでしょう？」

「ジュエルシードの『願望をかなえる』という面を利用します。願望をより正確に叶える為にも制御装置が重要になります。あと時間を巻き戻すのはアリシアさんだけでなく、プレシアさん、貴方も含まれていますよ?」

ゼロの意図することは理解できる。たしかにジュエルシードには願望をかなえる面がある。問題はその願望が正確に叶えられないことにある。

大抵はゆがんだ形で叶えられ、そのまま暴走する。

それらが思いのままに制御できるとすればこれほど都合のいいことはない。

けれど、

「どうして私も含まれているのかしら?」

「貴方を蝕む病魔、既にどうしようもない所まで来てますよね?」

ゼロの言うとおり、アリシアを取り戻すため、あるプロジェクトの合間に扱った薬品が私の呼吸器を侵していた。それに気がついた時には手遅れだった。

療養に専念すれば、あるいは可能性も見出せるかもしれない。

しかし私にとってはアリシアを取り戻すことのほうが重要だったのだ。

だからこそ私は今まで薬と気力でここまで繋いできた。

ゼロが言ったこと。私を助けるとは、この事なのだろう。

しかし、

「よくわかったわね私の体の事。誰かに話した覚えはないのだけど?」

いるとすれば診察した医師ぐらいなものか。あるいはカルテのデータを盗み出したのかもしれない。
私の問いにゼロは、

「さあて、ね」

そういつて再び首をかしげる。

元より話す気はないらしい。まったく大した秘密主義である。それでいて信用しろ言う事なのだから。

「いいわ、貴方の協力、受け入れさせてもらうわ。さっそくだけど、私は貴方が持ってきた設計図に手を加えて、よりジュエルシードに適したものにするから、それが終わったら声をかけるから貴方はそれまで好きに動いて頂戴。管理局の動きも気になることだし」

そう言うって私は椅子から立ち上がる。一瞬ふらつきそうになったが、なんとか堪える。

ここ最近、体力まで落ち始めている。いよいよもってタイムリミットが近づいてるようだ。

「プレシアさん、そこにあるのはケーキか何かですか？」

ゼロはアレが持ってきた箱を指差す。

あんなものは私には必要ない。だから、

「適当に処分しておいて頂戴」

「しかしこれはフェイトさんが貴方の為に買ってきたのでは？」

「どうせ貴方は知っているのでしょう？ 私にとってアレは所詮道

具なのよ。道具に気などつかわれたくないわ！」

私は思わず語気を強める。

けれどゼロはどこか悲しそうな声で、

「全てがうまくいった時、貴方はフェイトさんをどうするつもりなのですか？」

「私はアリシアがいればそれでいいのよ・・・アレの事など知った事ではないわ」

そうだ、アレに私から与えるものなど一切ない。私のすべてはアリシアの為にある。

忙しさにかまけてアリシアに優しくできなかった。生活の為というのがあるが研究ばかりに時間をかけて、あの子為に時間を割く事が少なかった。他の母親のようにそばにいる時間が少なかった。

そうだというのに、あの子は疲れて自宅に帰ってきた私に満面の笑顔を見せてくれた。駄目な母親の私に愛情を示してくれた。

なのに！ なのに私は！ あの子を守る事ができなかった！ 救う事が出来なかった！

だからこそ、だからこそ、今度こそ私はあの子の為に、私の全てをささげる。自分の命だって惜しくはない。なんだって利用する。全てはアリシアの為に。

「もっいいいわね？」

想いの全てを叫びそうになるのを堪え、私はゼロを残して部屋を後にした。

プレシアが部屋を出た後、ミルアはケーキの入った箱を手取る。小さく軽い。恐らくはプレシアの為だけに用意したものだろう。

今いる世界よりも時の進んだ世界から来た。その立場上、ミルアはプレシアの事情を大体は知っているし、その事情からプレシアとアリシアの親子関係がどのようなものであったかも想像は出来た。

そしてアリシアのクローンであるフェイトを見れば、アリシア自身がどれほどプレシアの事を想っていたかも想像は付いた。今のプレシアを見れば、彼女にとってアリシアがどれほどの存在であったかも。

だからこそミルアは、

「全てがうまくいきアリシアさんを取り戻した時、ようやく貴方の心は癒されるのでしょうか・・・しかし癒され、以前のような優しさを取り戻した時、貴方の目にフェイトさんはどう写るのでしょうか？　そしてフェイトさんに苦痛を強いてきた、自分自身に、貴方は堪えますか？」

誰に聞かせるわけでもなく、プレシアが去ったほうを向き、そう言葉にした。

今回の計画そのものにはミルアとしても、それなりの自信は持っていた。ただ、その後、フェイト達の、互いの心情やその後についてまでは何一つ自信を持てないでいた。

こればかりは完全に自分の力の範疇を超えている。

それがミルアの正直なところだった。

しばらくしてミルアは部屋を後にした。ケーキの入った小さな箱を残して。

今のプレシアにはフェイトのことについて、何を言っても無駄だ

ろう。

そんなことはミルア自身わかってはいた。

それでもミルアは、ボロボロの体で、なおかつボロボロの心を一つの希望で継ぎ接いだプレシアを見ていてフェイトの事を聞かずにいられなかった。

予想していた答えが返ってきて、ミルアは、どうする事もできない自身の無力さを痛感していた。

壊れた想い（後編）（後書き）

ミルア「ミルアと」

はやて「はやての」

ミルア&はやて「お助け座談会ーっ！」

はやて「リリカルなのは本編も終盤に近づいてきた今、出番が恐らく此処だけになりつつある悲劇のヒロイン八神はやてです」

ミルア「若干、作者に対する悪意のようなものを感じるんですが・・・」

はやて「若干？ ノンノン。悪意100%や。車椅子で轢いてやろうかと思っただくらいや」

ミルア「不憫な・・・」

はやて「はい。さて、ミルアの動きがより激しくなってきました。そして遂に本編におけるミルアの目的が明らかになりましたね」

ミルア「いや、目的自体はありがちですよ？ テスタロッサ一家全員助けちゃえ、というのは」

はやて「そやね、でもええんとちゃう？ ミルアらしいし」

ミルア「私らしい？」

はやて「お人よし」

ミルア「否定はしません」

はやて「しかしジュエルシードを使って『タイムふる〇き』やるとわね」

ミルア「ジュエルシードに『ご都合主義』を付加してみました。と作者が」

はやて「便利やねえ『ご都合主義』ところで、ミルアの動きますます管理局とぶつかる勢いやね。管理局嫌いなん？」

ミルア「まさか。私はアンチ管理局じゃありませんよ。それでも以前お世話になってるんですから。本当は対立したくないんですが。アリシアさんの蘇生ってどう考えても倫理的にアウトですよ」

はやて「なるほどねえ、という事はさつさと蘇生させて既成事実作っちゃおうと？」

ミルア「イエスです」

はやて「ほな最後に・・・ゲストとか呼びたくない？」

ミルア「はい？ ゲスト？」

はやて「ちよっくら呼んでくるわっ！（脱兎）」

ミルア「え？ はやて？ だからなんで車椅子でそんなに速く動け

るんですか・・・ええと、次回はゲストが来るそうです。こんな忙しいときに本編から引つ張ってくるみたいです。それでは（ノシ」

第10話 善の執行者（前編）

このタイミングでようやくお出ましですか。

ミルアはそう思い、目の前の黒衣の魔導師を、仮面の奥の瞳で見つめる。

眼下に数多く並ぶは運送用のコンテナ。ミルアの視線の先でフェイトとなのはが戦闘を行っていた。

そこへ黒衣の魔導師が乱入してきたのだった。

黒衣の魔導師はかち合う直前のフェイトとなのはのデバイスをそれぞれ片手で受け止めながら、

「そこまでしてもらおうか。君達には聞きたいことがあるんだ。出来るなら実力行使はしたくない」

闖入者はそう言って、その場にいる全員の顔を見渡した。

全員が動きを止めているのを堪忍した闖入者は、

「自己紹介が遅れたね。時空管理局、執務管クロノ・ハラオウンだ」

先に動いたのはフェイトだった。

時空管理局の執務管と名乗ったクロノに背を向け、未だ確保されていないジュエルシードに向かって駆ける。

「待てっ！」

叫ぶと同時にクロノは背を向けたフェイトに魔力弾を放つ。

フェイトの背に迫る魔力弾は、フェイトに直撃する寸前に叩き潰される。

魔力弾を叩き潰したミルアは、そのままクロノと相対する。

クロノはフェイトを庇うように立ちはだかるミルアに、

「君も抵抗するつもりかい？ さっきも言ったように出来ることから実力行使はしたくないんだよ。穏便にすますことが出来るならそれに越したことはないからね。だが抵抗するのなら容赦は出来ないよ、執務管として君達の行為を見逃すわけにはいかないんだよ」

「心遣いは感謝しますが、こちらにも事情というものがあります。それに話し合っただうにかなるものではないというのは、こちらが一番わかっているのです」

ミルアはそう言ってクロノを拒絶し、

「フェイトさん、アルフさん。ここは私が引き受けます。ジュエルシードをもって即、離脱を」

フェイトは軽く頷くと、その場を後にする。

「待つて！ フェイトちゃんっ！」

なのはが追いつがろうとするが、そんな、なのはの眼前にミルアは魔力弾を放つ。

しかし、ミルアの放った魔力弾は、なのはの前に移動したクロノによって粉碎された。

クロノはなのはを庇うように立ち、自らのデバイスをミルアに向け、

「仮面の君が殿という事でいいのかな？」

「理解が早くて助かります。執務官さん」

ミルアがそう言うと同時にクロノは一気にミルアに迫り、デバイスで薙ぐ。

その一撃をミルアは軽く跳んでかわすとクロノに双頭を振り下ろす。

クロノはデバイスで振り下ろされた双頭を受け止めるが、一撃の重さに顔をしかめる。

そんな小さな体でこれだけの一撃、よくやる。クロノがそう思った矢先、ミルアは双頭を受け止められた状態から一回転する形で再び双頭をふり、力任せにクロノをデバイスごと弾き飛ばす。

「ちい！ スティンガーレイっ！」

クロノは弾き飛ばされつつも射撃魔法を放つ。

しかしミルアはそれを最小限の動きで回避する。

すぐさま体勢を整えたクロノは立て続けに射撃魔法を数発放つ。

先程と同様に回避しようとしたミルアだったが放たれた半数が直撃した。

すぐさま動きを読んでくるなんて。ミルアはそう思いながら距離をとる。

「ブレイズキャノンっ！」

距離をとるミルアを追う様にしてクロノは直射型の砲撃魔法を放つ。

視界一杯になって迫るそれに対してミルアは横へ跳ぶようにして避けると、そのままクロノに対して魔力弾を乱射する。

命中精度は二の次といわんばかりに乱射される魔力弾を、クロノは空へ飛び上がることで回避する。

しかしミルアは射角を変えクロノを追撃する。

「無茶苦茶な」

クロノはそう呟き、眼下で自分を見上げ魔力弾を乱射するミルアに対して、迫る魔力弾を飲み込むように再びブレイズキャノンを放つ。

ミルアはそれを難なくかわし、そのまま添うようにして飛翔し、一気に上昇して、双頭を突き出す形でクロノに突撃する。

その速度に驚きつつもクロノは突撃してくるミルアに対してシルドを展開し、双頭を受けるでなく、そのままいなす。

ミルアの突撃をいなし、結果として背後を取ったクロノは、その背に向かってステインガーレイを放った。

未だ突撃姿勢のままの状態なら余裕で直撃すると思われた。空中での姿勢制御はそう容易くはない。

ましてや、いなされたとはいえ、突撃の勢いはまだ死んでいない以上、防御や回避はむずかしい。クロノはそう判断していた。

しかし結果としてミルアはクロノの予想を打ち砕いた。

突撃の勢いが残る中、ミルアは強引に体をひねり、左手に持った双頭で、自分に追い迫る魔力弾を打ち砕き、空いた右手でバスターを放った。

クロノは咄嗟にシルドを張るが、ミルアのバスターを正面から受ける形となって、自身の魔力を削られる羽目になった。

他の二人といい、なんて出力だ。クロノは防御の上から魔力を削られながらそう思った。

バスターが止み、クロノが再びミルアを視界に捕らえたとき、既にミルアはクロノの眼前へと迫っていた。

しかしクロノは慌てることなく、むしろ笑みさえ浮かべていた。

まずい。ミルアがそう思ったとき、魔力による鎖がミルアの体を縛り上げた。バインドだ。

「クロスレンジにおける君のパワーやスピードはやっかいだったからね。あらかじめ手はうたせてもらったよ」

クロノはそう言ってミルアにデバイスを向ける。

しかしクロノは何かについて咄嗟に後ろに下がる。

次の瞬間、先ほどまでクロノがいたところに黒き一撃が振り下ろされる。

クロノの眼前に割り込んできたフェイトの後ろでミルアはバインドを力任せに引き千切り、瞬時にクロノの背後に回りこみ双頭を横にふりかぶった。

しかし、今度はミルアが咄嗟に後ろに下がった。

それと同時にクロノとミルアの間を桜色の砲撃が通過する。

砲撃を終えたなのはクロノの背中を庇うようにミルアの前に立ちただかった。

「ゼロはやらせない」

「やれやれ民間人に助けられるとはね」

「困ったときはお互い様なの」

「正直私も困ってます」

フェイト、クロノ、なのは、ミルア、それぞれに言葉をもらった。フェイトとミルアがクロノとなのはを挟み込むような立ち位置。

フェイトはクロノに、ミルアはなのはに対してデバイスによる直接攻撃を試みる。

それに対してクロノとなのははそれぞれ自分のデバイスで受け止めた。

ミルアは左手で双頭を持ちそのまま、なのはのレイジングハート

に押し付ける。

そして空いた右手をクロノとなのはの二人に向けると、

「執務官殿、これは先ほどのお返しです」

ミルアはなのはの後ろにいるクロノにそう声をかけた。

フェイトの攻撃を受け止めていたクロノが少し振り返ると、

「くっ！ バインドかつ！」

「え？ ええ？」

ミルアの右手から伸びた一本の魔力による鎖がクロノとなのはの二人を縛り上げる。

「こちらの目的はあくまでジュエルシードなのでご安心を」

ミルアはそう言うのと右手から伸びた鎖を切り離した。

次の瞬間その鎖は、切り離された箇所から順に次々と爆発していき、クロノとなのはを飲み込んだ。

第10話 善の執行者 (前編) (後書き)

お助け座談会は次回の(後編)の方に書きます。

善の執行者（後編）

ダメージもそこそこに、クロノとなのはが爆煙を払いのけると、周囲にミルアとフェイトの姿はなかった。

クロノは「目的はあくまでジュエルシード」と言っただけと呼ばれていた少女の言葉を思い出す。

逃げるが勝ち、ということか。クロノはそう納得した。

「エイミー補足は？」

念のため周囲を警戒しつつもクロノは不意に現れた空中に浮かんだモニターに話しかけた。

「ごめんクロノ君、素早い多重転移で捕捉しきれなかった」

モニター内の女性はそう言って首を振る。

クロノは「仕方ないさ」と言うと、所在なさにしている、なのはの方を振り向き、

「色々あったけど、とりあえず君だけでも来てもらえるかな？あと、下にいる君にも」

クロノはそう言ってこちらを見上げているフェレット状態のユーノに声をかけた。

なのははユーノの下へ降りると互いに頷いた後、クロノの方にも頷いて返した。

いくつもある次元世界。その次元世界の狭間を航行する船、次元空間航行艦船『時空管理局・巡航Ⅷ級8番艦・アースラ』の中になのはとユーノはいた。

クロノの案内の元、なのはとユーノが艦内を歩いていると、クロノは不意になのはに振り返って、

「ああそうだ、いつまでもその格好は窮屈だろうから、バリアジャケットとデバイスは解除しても良いよ」

クロノの言葉を受けなのははバリアジャケットを解きレイジングハートも待機状態に戻した。

次にクロノはユーノを見下げ、

「君も元の姿に戻るといいよ」

その言葉を受けたユーノも久方ぶりに元の少年の姿に戻るが、そもそもユーノの本当の姿を今の今まで知らなかった、なのはに、めいっばい驚かれる事になった。

なのはとユーノは、アースラの艦長である女性、リンディ・ハラウンとクロノの四人で話をしていた。

なのはは何処か落ち着かない様子で今いる部屋の中を見回していた。

現状のなのはが知る由もない事だが、リンディが、日本人であるなのはに配慮して室内を盆栽やらお茶に用いる茶道具やらで満たしていたのだ。ご丁寧に「ししおどし」まである。

そんな、急ごしらえ的な、にわか日本様式な部屋の中、ユーノが自分達の事情を話しはじめた。

自分達スクライアの一族の生業である遺跡の発掘作業中にジュエルシードを発掘した事。その運搬中に起きた事故のために今いる地球の海鳴市を中心にジュエルシードがそれぞれ散らばってしまった事。発掘者として責任を感じたユーノが自発的にジュエルシードの回収に乗り出した事。回収中に負傷したため魔法の資質があった現地の人間であるのはに助力を求めた事。

ユーノがそこまで話すとリンディはユーノの責任感を指してなのか、

「立派だわ」

と、口にした。

確かにその責任感と行動力は大したものだ、とリンディの隣に座っていたクロノは思った。

しかし、ロストロギアであるジュエルシードの危険性を考えれば、

「同時に無謀でもある」

クロノはそう言葉にせざるをえなかった。

一応自覚はあったのかクロノの言葉にユーノは、しゅんと小さくなった。

「あ、あの、ロストロギアって何なんですか？」

小さくなっているユーノを横目になのはが質問した。

なのはの言葉にリンディが次元世界などの話を始める。

要約すればロストロギアとは様々な技術が発展した世界が、その技術ゆえに滅んだ際に残した厄介な遺失物。

それらを総称してロストログアと呼んでいる。

それらの殆どが使用法によっては次元世界に様々な被害をもたらす危険性を秘めており、それ故に回収、封印、管理が必要とされている。

時空管理局の仕事の一つでもある。

ジュエルシードは次元干渉型エネルギー結晶体、なのは達はそう説明を受けた。

もし、この場にミルアがいれば「それらロストログアを最小限のリスクで有効利用する連中がいる」とぼやいたかもしれない。

リンディは一通りの説明を終えると、ジュエルシードの回収、その全権は時空管理局が持つ事を告げた。

今まで関わってきたという事実、何よりフェイトの事が気がかかるな、なのはが食い下がると、リンディは、なのはとユーノ、二人でじっくり話し合ってから、再び話をしようと提案し、なのはもユーノもその提案を受け入れた。

「送っていいこう。元いた場所でいいね？」

クロノの言葉になのはもユーノも静かに頷いた。

次元空間航行艦船アースラの中の一室、そこにアースラ通信主任兼執務官補佐エイミー・リミエッタとクロノがいた。

室内の巨大なモニターで、先ほどの、なのは、フェイト、クロノ、ミルアの四人の戦闘の記録映像を見ながらエイミーは手元のコンソールを叩いていた。

「なのはちゃんだっけ？それと、この黒い服の子、凄いいえ。魔力値だけならクロノ君を上回っているよ」

そんなエイミイの言葉にクロノは眉をひそめながら、

「魔法は魔力値だけの大きさじゃない、状況に合わせた応用力と、的確に使用できる判断力だよ」

そう言うクロノに対してエイミイは「それはもちろん」と言いながら少しからかう様に「信頼してるよ」と最後に付け加えた。

クロノが少しむくれたような顔でエイミイを軽く睨みつけると、部屋の扉が開き部屋着に着替えたリンディが入ってきた。

リンディはモニターに映る記録映像に目をやり、

「ああ、あの子達のデータね」

リンディはしばらく黙って映像を見ていたが、

「確かに凄い子達ね。なのはさんとユーノ君がジュエルシードを集めていた理由はわかったけど、こっちの黒い服の子と、仮面の子、この二人の理由は何なのかしらね」

リンディがそう言うエイミイは何か思い出したように、

「仮面の子といえば、クロノ君、あの仮面の子と戦ってみてどうだった？」

「どうだった？ って的を獲ない質問だな」

「んー、なんかクロノ君が苦戦してたっぽいし、それに、この子だけ魔力値の最大がはつきりしないんだよね。ブレ幅が酷いというか」

エイミイの言葉にクロノは厳しい表情をすると、

「確かにね・・・あのスピード、パワー。基本的な身体能力が他の二人を凌駕してるとしか思えない。体格に大した差はないのに」

クロノはコンソールを叩き記録映像のある地点にあわせ、

「この時、突撃後の勢いが残る中、背後からの僕の攻撃に対して、かなり強引に体を捻ったように感じた。筋肉や関節、下手をすれば骨にまで相当な負担が掛かったはずだ。にもかかわらず、その後の動きになんの支障も出ていないように感じる」

「確かに、私なら一発でぎっくり腰、しばらく動けそうにないよね」

エイミイはそう言って、あははーと笑う。

「それに、この子の使っている魔法体系は僕達が知っているどれにも該当しない」

戦い慣れしていて、何処か飄々とした雰囲気、あの場にて最も異質。恐らく一番厄介な相手だろうな。クロノはそんな事を思いながらモニターを見つめていた。

善の執行者（後編）（後書き）

ミルア「ミルアと」

はやて「はやての」

ミルア&はやて「お助け座談会っ！」

クロノ「何故僕が此処に・・・」

ミルア「今回といい、本編といい、本当に申し訳ありません」

クロノ「いや、まあ本編の方は物語の都合上というものがあるだろうから」

ミルア「しかし今回のゲストの件は私が公式たぬきを抑えれないばかりに」

はやて「ちょお待ち、誰や公式たぬきて」

ミルア&クロノ「・・・（黙ってはやてを見る）」

はやて「A、s本編始まったら覚えときやあんた等」

ミルア「軽く犯行予告かましてくれてるので、何とかしてください
執務官殿」

クロノ「今の段階ではいくらなんでも無理だよ」

はやて「はいっ！ 流れをぶった切って、ゲストのクロノ君、何か質問がありますか？」

クロノ「え？ ゲストの僕にふるのか？」

はやて「ゲストもホストも関係あらへん。ここでは私が絶対者や」

クロノ「ええと、じゃあ、質問、ミルア、君、歳はいくつなんだ？」

はやて「最低やつ！ レディに年齢聞くとか最低やつ！」

クロノ「ちょっと待てっ！ 質問しろっていったのは君だろ」

はやて「質問ならなんでもいいと思ったたらあかんで。それなら私はアースラの全女性スタッフのスリーサイズを所望する」

ミルア「はやては置いといて、正直、正確な年齢は私自身わかりません。気がついたときには既にこの体格でしたし。とりあえず最低でも、〇年は生きてます」

はやて「私より若い一ケタ代・・・ショックっ！」

クロノ「いや、はやて、君は別にショックを受けるような歳じゃないだろ」

はやて「クロノ君には女心を叩き込む必要があると判断した」

ミルア「はい？」

クロノ「え？」

はやて「というわけで・・・（ガシッとクロノの肩をつかみ」

クロノ「ちょっとまで、ズボンのベルトがいつの間にか車椅子にながれてっ・・・！」

ミルア「ご愁傷様です・・・（ノシ」

クロノ「はやてっ！ 止まれっ！ 止まるんだっ！ 熱っ！ お尻が焼けるっ！ 擦り切れるっ！」

ミルア「今回もこんな感じでおしまいとなってしまうました。ん？ ああ前回、最後に使った魔法ですが『マインバインド』といいまして、直接的なダメージよりも相手の防御の破壊や足止めに重点を置いた魔法です。見た感じ、ただのチェーンバインドに爆発能力を付加しただけです。それではまた次回（ノシ」

第11話 思いよせて（前編）

ジュエルシードの制御装置の製作は順調に進んでいた。以前、ミルアが解体した『人形』も素材として利用していた。

「なるほど、この個体は私がこの世界にくる直前に私が破壊した個体だったんですね」

モニターに仮面を装着していないミルアが映っていた。

時の庭園内の研究室でミルアは破壊した『人形』のメモリーチップを調べていた。

何か使い道はないかと調べていたが、特に何か見つかったわけではなかった。

もはや役に立つ事もないだろうと判断したミルアはモニターに映る映像を消し、メモリーチップを手にとると、そのまま指で握りつぶした。

現在プレシアは自室で休んでいる。細かい作業などはミルアが行うことによってプレシアの体調に余裕を持たせるのが目的だった。

ジュエルシードの使用時、万が一に備えてプレシアの体調を可能な限り整えておきたいというのが理由。

しばらくミルアは研究室でプレシアに指示された作業を行っていたが、それを終わると研究室を後にした。

制御装置のほうはともかく、ジュエルシードの収集が思わしくない。

私は研究室から出ると一人、現状の確認をする。

プレシアさんの体調は万全とはいかないが、以前より悪化している様子はない。

かつてプレシアの使い魔でフェイトの魔法の先生でもあった、そして今は消滅してしまったりニスが残した、薬湯のレシピに私が手を加えた物が多少なりとも効果があったようだ。

現状一番の問題は、本格的に関わってきた時空管理局と、それに協力する、なのはさん達だ。

フェイトさんと連絡を取ったところ既にいくつか先にジュエルシードを確保された様子。

「さすがに全部とまでは贅沢は言いませんが、もう少し確保しておきたいですね」

私は誰に聞かせるわけでもなく、言葉にすると、そのまま時の庭園を後にした。

「こう、あっさりと見つけると拍子抜けしますよね」

とある山の中、森が途切れ、大きく開けた所にジュエルシードはあった。

透き通るような青空の下、太陽の光を反射しジュエルシードはその存在を示していた。

ミルアはジュエルシードを手にとると封印処理をして懐に入れた。

「さて、私は早々に立ち去りたいんですけどね」

そう言ってミルアが上を見上げると、ミルアを含めた周囲一帯が広域結界によって包み込まれる。

ミルアが振り向くと、その視線の先にデバイスを手にしたクロノが立っていた。

ミルアはやれやれといった具合に、

「正直、貴方が来るとは思いませんでしたよ執務官殿」

そんなミルアの言葉に、クロノは表情を変えず、

「どうして疑問に思うのかな？」

「どうもそちらは、なのはさん達を協力者として使ってるようなのでね。わざわざアースラの切り札である貴方が出てくるとは思いませんでした」

「相手にあわせた人選するのは当然だろう。しかし、おかしいなのは達の事はともかく、何故君がアースラの事を知っている」

そう言ってクロノは僅かにミルアを睨みつける。

ミルアは、しまったな、という具合に内心舌打ちをしながら、

「さあて、ね」

そういつて軽く首をかしげた。

次の瞬間、仮面の横を魔力弾が一発かすめていく。

それを合図と言わんばかりにミルアは双頭を展開し、クロノが振り下ろすデバイスを受け止める。

「先手必勝などとは言いが、世の中そう甘くはないね」

クロノはデバイスを受け止められながらも、そう口にした。ミルアは、同感です、と口にし、クロノを一気に押し返す。力じゃ到底かなわない。

クロノはそう思うと魔力弾でけん制しつつ距離をとり、続けざまにブレイズキャノンを放つ。

しかしミルアはそれを横へとかわすと、あけられたクロノとの距離を詰めるように駆け出した。

向かってくるミルアに対してクロノは上空へ飛び上がると、眼下のミルアに対して魔力弾を乱射した。降り注ぐ魔力弾を、ミルアは右へ左へと、ステップのみでそれらを回避した。

そしてクロノを追うようにミルアも上空へ飛び上がる。

追いつがるミルアに対してクロノは先ほどと同じように魔力弾を乱射する。

接近させないつもりだろうか。

ミルアはそう感じつつ、せまる魔力弾に対して上下左右への動きで回避行動をとるが、数発ほど着弾してしまった。

空中での運動性能が地上に比べて落ちてるのか？

クロノはそう思うが同時に、

ほとんど避けられてるから、つけいる隙とはいいがたいな。と、思った。

魔力弾乱射後、クロノとミルアは仕切りなおしと言う具合に一定の距離を保ったまま動かなかった。

先に動いたのはミルアだった。

双頭に魔力刃が展開され、ミルアは横に一回転する形で魔力刃をクロノへ飛ばした。

初めて見る攻撃だが、クロノは冷静に、円盤状になって自分へ向かってくる魔力刃をくぐるようにしてかわす。

しかし、飛翔する魔力刃をかわしたクロノが目にしたのは一瞬に

して距離を詰め、目の前まで迫っていたミルアだった。
振り下ろされる双頭。

魔力刃こそ展開はされてないがミルアの力によって振り下ろされるそれは脅威でしかない。

しかしクロノは咄嗟に自らの左腕で双頭を受け止める。

それと同時に右手に持ったデバイスでミルアの仮面を殴りつけた。強度で言えば仮面のほうが上、クロノの攻撃は特に意味を成さない。

いや、そもそもこの状況ならゼロ距離からの射撃という選択肢もあつたはず。

ミルアとしても、まさか双頭を素手で受け止めに来るとは思わなかったのだから。

なら何故・・・まずい。

ミルアがそう思った瞬間、左腕の痛みには耐え苦痛の表情をしていたクロノに僅かだが笑みが浮かんだ。

次の瞬間、ミルアの仮面を激しい衝撃が襲った。

声にならない声をあげるミルア。

当然のごとく仮面を襲った衝撃はミルア自身にも伝わり、勢いよく吹っ飛ばされると、そのまま地面をえぐるように墜落する。

クロノは左腕をだらりと下げながら、

「ブレイクインパルス・・・どうやら効果はあつたみたいだね」

杖による接触後、対象の固有振動数を割り出し、それに合わせた振動エネルギーを送り込んで粉碎する魔法、それがクロノがミルアの仮面に行った攻撃だった。

ゼロ距離での射撃は回避行動を取られる可能性があるかと判断したクロノは、回避することなく、その強度にまかせてそのまま受ける

であろう仮面への攻撃を選択した。

結果としてクロノは読み勝ったのだった。

しかし仮面を完全に砕く事は出来なかったようで、一部の破片だけが周囲に散り、直ぐに単なる魔力に戻り四散した。

地上に降り立ったクロノは左腕を押さえる。

咄嗟の防御時、瞬間的に防御用のフィールドを左腕に集中させたとはいえ、それは絶対とは言えず、左腕からくる痛みにクロノは背中をつめたい汗が伝うのを感じた。

痛みを堪えつつクロノは仰向けの状態で地面に倒れているミルアに近づいていった。

その途中、吹っ飛ばされる際に落としたのかクロノの目の前に双頭が転がっており、クロノはそれを脇へと蹴りどけた。

しかし、それは余計な事だった。

ほんの一瞬、ほんの僅か、クロノの意識が双頭へ向けられた瞬間、弾かれるようにミルアが起き上がる。

クロノは咄嗟に後方へ下がろうとした。

しかし、ミルアは地を一蹴り、クロノの目の前まで迫ると、勢いに乗せて左の拳を突き出した。

第11話 思いよせて (前編) (後書き)

次回の後書き「お助け座談会」・・・ゲストは未だ未定。

ミルアVSクロノ次も続きます。

想いよせて（後編）

「クロノ君っ！」

アースラのブリッジで、クロノとミルアの戦闘をモニター越しに見ていたなのは思わず声をあげた。

なのはに限らず戦闘を見ていたアースラスタッフは声をあげそうになっていた。

あんな墜落の仕方しててまだ動けるなんて化け物か？

細かな違いはあるものの、皆、同様の感想を持っていた。

しかし艦長であるリンディだけは表情を変えることなくモニターを見つめていた。ただ、握った拳には僅かに汗がにじんでいた。

クロノの胸部を狙うかのように突き出された拳を、クロノは咄嗟にデバイスの柄の部分で受け止めた。

しかしミルアの拳の前にそれは何の意味もなさず、そこに障害物など最初からなかったかのようにデバイスの柄をへし折った。

結果としてミルアの拳はクロノに届いた。

しかし、クロノが咄嗟に後ろへ下がったこと、そして同時にわずかに上体をそらしたことでダメージは最小限ですみ、距離をとりつつ魔力弾でけん制するという余裕をクロノに与えた。

仮面の左目部分はくだけ、相当の衝撃が頭部を襲ったはず、なおかつ地面をえぐるような派手な墜落、生半可なダメージではなかったはず。

「まったくどういう体の構造をしてるんだ君はっ！」

クロノは正直な感想を思わず吐く。

へし折られたデバイスの柄は魔力ですぐさま修復される。

間髪いれずミルアはクロノに迫り、右足で薙ぐように蹴りをクロノへ見舞う。

クロノはそれを上体をそらす形でかわすが、次の瞬間、腹部への衝撃で後方へ飛ばされる。

右足による蹴りを回避されクロノに背を見せる形になったミルアは、そのまま後ろ手に左足でクロノを蹴り飛ばしたのだった。

やはり、この子の戦闘スタイルはクロスレンジが主体か。

腹部の痛み顔に顔をしかめつつクロノはそう判断した。

クロノがそう判断した矢先、ミルアは後方へ飛びのくと左手を指先までピンと伸ばす。

するとミルアの指先から一メートルほどの魔力刃が伸びた。

ミルアは地を蹴りクロノへ迫ると魔力刃を振り下ろす。

それをクロノは横へかわすとデバイスでミルアの胸を薙ぐ。

しかしミルアはそれを飛び退いてかわすと、横へ一回転するようにして魔力刃をクロノへ向かって飛ばす。

飛翔してくる魔力刃をクロノは魔力をまとわせたデバイスで力任せに払いのける。

見ると、既にミルアは新たな魔力刃を発生させていて、その切っ先をクロノへ向けていた。

クロノがそれに対応しようとした瞬間、ミルアは今まで以上の速度で突撃してきた。

かわしきれない。

クロノはそう思った。

しかしミルアの魔力刃はクロノに届くことはなかった。

クロノの、青色とは違う魔力の色をした、緑色の魔法陣状のシールドがミルアの魔力刃を阻んでいた。

「なっ？ ユーノっ？」

ミルアとクロノの間に割って入ったユーノに驚くクロノ。
次の瞬間ユーノのシールドが弾け、ミルアはその衝撃で吹っ飛ばされる。

「なのはが助けに行くって聞かなくてね、僕が行くってことで強引に納得させてきたんだ」

ユーノは振り返ることなくクロノへそう言った。
クロノはそんなユーノに苦笑しつつ、

「正直助かった。今のはかなりやばかったんでね」

そう言うクロノにユーノは笑みを返すと、ミルアに向かってチェインバンドを放つ。

魔力による鎖は一直線にミルアに向かっていくが、ミルアはそれを魔力刃で払いのけると、ユーノへ向かって駆け出した。

しかし、ユーノの後ろから飛び出したクロノが魔力弾を乱射してミルアの行く手をさえぎる。

足を止められたミルアに二本目、三本目と鎖が伸びてゆくが、ミルアは先ほどと同様にそれらを払いのけた。

次の瞬間、ミルアをクロノのブレイズキャノンが襲う。

ミルアは迫る直射砲をシールドで正面から受け止めた。

直射砲を正面から受けた事により、その余波でミルアの周囲を土埃がおおふ。

土埃でミルアの姿が見えなくなりクロノは内心、舌打ちした。
するとクロノとユーノにエイミィの通信が届く。

「二人ともまずいよっ！　あの子の魔力値が跳ね上がってる。何かする気だよっ！」

そんなエイミイの言葉にクロノとユーノは今よりもミルアとの距離をとろうと、その場から動こうとした。

「なにっ？」

「えっ？」

クロノとユーノは思わず声をあげる。

その場から動こうとした矢先、自分達の足元に魔法陣が現れ、それと同時に自分達の足が動かなくなった。

地面に縫い付けられたかのように動かない足に困惑しつつクロノとユーノは正面を見据える。

土埃が晴れていきミルアの姿が確認できた。

左目部分が碎けた仮面の奥、クロノとユーノの二人は鈍く光る赤い瞳を確かに見た。

相対する二人を見つめ、両足を肩幅ほどまで広げたミルアは僅かに腰を落とす。

ミルアは大きく息を吸うと、

「あああああっ！」

響かせるような声をあげると、一気に上空へと跳び上がる。

そして、ある程度まで跳び上がるとミルアとクロノ達の間に二つの魔法陣が展開される。

重力に任せて僅かに降下したミルアは、

「おりゃあああああっ！」

声と共にミルアは魔力をこめた左足を突き出すようにして一つ目の魔法陣を突き抜ける。

するとミルアの降下速度が一気に上昇し、それと同時に左足に集中する魔力も飛躍的に上昇していた。

それに対してクロノとユーノはお互い示し合わせたわけでもなく、同時に複数の魔法陣状のシールドを二人で重ね合わせるようにして展開した。

二つ目の魔法陣を突き抜け、その速度と左足の魔力をさらに上昇させたミルアが、クロノとユーノのシールドに接触する。

一枚二枚。

三枚四枚。

・・・

ミルアは次々とクロノとユーノが重ね合わせたシールドを突き破ってゆく。

そしてミルアはクロノとユーノの眼前の最後のシールドに到達した。

シールドを破られまいと、クロノとユーノは必死に耐える。

激しい振動と衝撃、攻撃する側と、攻撃される側の魔力がぶつかり合い周囲を衝撃波が襲った。

そして激しい爆音と共に三人は土埃に包まれた。

その光景にモニタリングしてたアーススタッフはあわててクロノとユーノの安否を確認する。

二人のバイタルは確認できるが、なのはやエイミィが必死に呼び

かけた。

すると土埃の中から、ユーノがクロノに肩を貸すようにして上空へと飛び上がった。

「あと、ほんのちょっと防御が甘かったら、僕達こうしてないよね」

ユーノが引きつった表情でそう呟くと、クロノも無言で頷いた。そんな二人にアーススタッフは胸をなでおろした。

そして土埃が晴れると、そこにはクロノとユーノを見上げるミルアが立っていた。

先ほどまでクロノ達がいた地面は、ミルアを中心にクレーター状にえぐられている。

ミルアは上空へあがろうと、ほんの僅か膝を曲げた次の瞬間、何かが弾ける様な音がした。

ミルアを始め、クロノやユーノもその音源に視線を向けた。

三人の視線の先、ミルアの左足、その何箇所かが裂け血を吹き出し、赤黒い何かが飛び出していた。

ミルアはその光景に動じることなく左手に魔力刃を展開すると、それを後方へ飛ばす。

飛翔してゆく魔力刃が、広域結界の一部に風穴を空け、ミルアは地面すれすれを飛び、そのまま風穴を抜け広域結界から脱出した。

「追わなくてもよかったのかい？」

地上に降りたユーノはクロノに問うと、

「僕も君も追える様な状態じゃないからね」

クロノはそう答えると、広域結界に空けられた風穴とは反対方向にあった双頭を拾い上げる。

静かになったその場所を風が吹きぬけ、クロノ達に血の臭いを届けた。

想いよせて（後編）（後書き）

ミルア「ミルアと」

はやて「はやての」

ミルア&はやて「お助け座談会ーっ！」

はやて「完全に出番が此処だけになってる悲劇の美少女、私、八神はやてと」

ミルア「何やら本編で左足がえらいことになってるミルア・ゼロがお送りします」

エイミィ「はいはい、ゲストのエイミィ・リミエッタです」

ミルア「なんかもう色々申し訳ありません」

エイミィ「ミルアちゃん、局の関係者が来るたび謝る気？ いいよ、いいよ、そんな事にしなくて。ここでは楽しくやろうよっ」

ミルア「そ、その結果、クロノ執務官は・・・」

エイミィ「あはは・・・まあ野良犬に噛まれたと思って・・・」

ミルア「野良狸ですけどね」

はやて「なんか私が悪いみたいな言い方やね」

ミルア「・・・」

はやて「え、何？ その、うわコイツ自覚ないのか？ みたいな目は」

ミルア「気のせいですよ、ねえ」

エイミィ「そうそう気のせいだよ」

はやて「二人で通じ合ってなんか疎外感っ！」

ミルア「ちよっ、はやて何処へ行くんですかつ！」

エイミィ「あああ、行っちゃったね」

ミルア「ですね」

エイミィ「ところでミルアちゃん。今回本編で見たあのド派手なキックは何？」

ミルア「魔法陣を突き抜ける事によって強引な加速と威力の向上をはかってます」

エイミィ「名前は？」

ミルア「特にないです。しいていうならラ○ダーキック？」

エイミィ「いや、それはちよっと・・・」

ミルア「追々考えときます」

エイミー「それじゃ今回はこのへんで」

ミルア&エイミー「それでは、また次回〜！（ノシ）」

第12話 その言葉は確かな一歩（前編）

アースラに帰艦したクロノとユーノを医療スタッフが取り囲む。その迅速さと言い知れぬ圧力にユーノはたじろぐが、クロノはおとなしく治療を受けていた。

「クロノ執務官、悪いのだけど治療がすんだらブリッジに来てくれないかしら」

モニターに映るリンディに対してクロノは、了解しました、と答えると、

「そう言うわけだ。行こうかユーノ」

「ちょ、ちょっと待って。僕はともかく、クロノ、君はっ」

そう言っただけで慌てるユーノの視線は包帯の巻かれた左腕に注がれていた。

そんなユーノにクロノは左腕を少し動かして見せて、

「さすがに戦闘は無理だが、それ以外なら、まあ問題はないだろう。消耗した魔力や体力も数日もあれば全快するだろうし」

「い、いや、でも・・・」

「本当にまずいのなら休むさ。大丈夫なら動く。僕等、管理局はそれ相応の責任がある。そんな簡単にダウンするわけにはいかないんだよ」

そう言ってクロノは口の端で笑うと、先立って歩き出した。
そんなクロノの後姿をみてユーノは軽いため息をつくが、直ぐに
あとを追っていった。

僕とユーノがアースラに帰艦してから少し時間がたっていた。
アースラの一室、僕はそこに安置されている、ある物を見ていた。
先ほどの戦闘でゼロが放置して言った武器だった。
当初、僕はこれは彼女のデバイスだと思っていた。
しかし報告によればこれにデバイスとしての機能はないらしい。
つまり彼女は今までデバイスの補助が一切ない状態で魔法戦を繰
り広げていたという事だ。
努力の結果か、天性のものか、何にしろ大したものだ。
ふいに部屋のドアが開くと、エイミイが入ってきた。
彼女は僕の横に立つと、

「クロノ君、報告は聞いた？」

彼女の問いに僕は頷き、

「ああ、材質は不明だって」

「そう、もうお手上げだって。小さな子供の背丈ほどの大きさなの
に木の棒みたいに軽い。そしてまともに傷がつけられないほどの強度。
おまけに魔力の通りがよくて魔力刃の展開も迅速。打撃、斬撃、防
御、いろいろ使えてかなり便利みたいだね。これでデバイスとして
の機能があればいう事なし。局にもほしくらいだね」

「デバイスとしての機能を省いてるからこそその強度じゃないのかな。純粹なまでの近接専用の武器だな」

「でも、あの子、ゼロちゃんはこれを置いて行っちゃったんだよね？」

「あの場からの離脱を最優先したんだろう。そして彼女は武器がなくなっても充分に戦える」

そう、彼女自身の力。

彼女の拳は僕のデバイス、S2Uをあっさりとへし折った。そして最後の攻撃。

僕とユーノの全ての防御を打ち砕き、地面をえぐり飛ばしたあの攻撃。

途中貫いてきた魔法陣は恐らく内部からの強化に加えての外部からの強化の為の物。

そうやって、あの時彼女は、瞬時に膨大な魔力を内と外から左足一点に集中させた。

結果として僕等の防御は打ち砕かれ、彼女は反動で左足が弾けた。自分を犠牲にした攻撃、何故彼女は、

「何故そこまでして戦う、戦える」

僕はいつの間にかそう声にしていた。

あれから数日、フェイトさんとアルフさんはジュエルシードの探索を続け、残すジュエルシードは恐らく六つ。

現状こちらが九つで管理局側が六つ。

先の戦闘で弾けた左足は完治しているから私も探索を手伝おうと思った。

しかしフェイトさんからストップをかけられてしまった。

先の戦闘直後、一時避難先として私はフェイトさんとアルフさんが潜伏しているマンションを選択した。

ズタボロの状態ですがに八神家に帰る度胸はなかったのだ。

左目付近を砕かれた仮面を付け、体のいたるところがボロボロで、おまけに左足がなんともえげつない事になってる状態で、私はマンションに転がり込んだ。

その時のフェイトさんとアルフさんの慌てっぷりは中々のものだった。

私が何度も「大丈夫です」と口にして、左足から飛び出していたものを強引に手で押し込むとアルフさんが「うえ」と声をあげ、フェイトさんは青白い顔をしていた。

あんな二人はそう見えるものじゃないと思う。

シャワー室を貸してもらい、左足の血を洗い流し、出血が止まったのを確認してから適当に包帯を巻いておいた。

仮面も修復し、さてそろそろ、おいとましようかとシャワー室を出ると、厳しい表情をしたフェイトさんが待っていた。

で、結果として私は、時の庭園でプレシアさんの世話係兼、留守番をさせられている。

「無茶をしすぎ」と怒られたのだ。

プレシアさんの世話と留守番というフェイトさんの要求に対して勢いで頷いてしまった。

「無茶はしても無理はしません」と反論はしてみたが勢い負けしてしまった。

思い返せば元の世界でも大人なフェイトさんに勢い負けしてた気

がする。

自分でも少々情けないと思う。

しかし、私の体のことを聞いてこないあたりはフェイトさんなりに氣を使ったのだろう。

もつとも、聞かれたところで大した問題ではないのだけど。

まあ、フェイトさんらしいといえば、らしい。

そう思うと自分の頬が少々緩んでいることに氣がつく。

こちらの世界に来てから、そう長くはないが、かなり濃い日々を送ってきた氣がしないでもない。

多少なりとも表情と呼べるものが自分にも出来てきたのかもしれない。

以前は大人な、はやてに頬を引つ張られたりもした。

はやては何処でもはやてで、フェイトさんも何処でもフェイトさんだ。

忘れてはいないが、なのはさんも何処でもなのはさんだ。

彼女の使う集束砲、スターライトブレイカーなどは色々と参考にさせてもらった。

恐らくこちらのなのはさんも、やがてはスターライトブレイカーを使うのだろう。

できれば自分がその標的にならないようにしたい。

なんでも、フェイトさんは小さい頃、真正面からお見舞いされたらしい。

そこまで思い返してて私はふと、あることに氣がついた。

大人なフェイトさんの言う「小さい頃」とは何時の事だろう？

もしかして、もしかしなくても、今、このジュエルシードを巡る事件の最中だろうか？

もしそうだとするならば私も標的になる可能性が出てくる。

できれば勘弁願いたい、そうなったらそうなたで仕方ない。

私は若干諦めつつ近くのモニターに視線を向け「貴方も無茶しいですよ」と口にした。

そこには荒れ狂う海上で残り六つのジュエルシードを、なのはさんやユーノさんと協力して封印するフェイトさんとアルフさんが映っていた。

第12話 その言葉は確かな一歩 (前編) (後書き)

次回、後編にて「お助け座談会」

ゲストは既に決定済み。

出演：八神はやて

ミルア・ゼロ

ゲスト：アルフ

その言葉は確かな一歩（後編）

「友達になりたいんだ」

それは紛れもない、なのは、フェイトに対する正直な想いだっ
た。

何処か淋しげな瞳に惹かれ、何処か自分と重ね、いろんな想いを
分かち合いたいと。

確かになのは、そう思うようになった。
友達になりたい。

その事に気がつき、言葉にすることに多少の時間はかかってしま
ったが、ようやく、なのはは言葉にすることができた。

残り六つのジュエルシードは海上でなのは、フェイト、ユーノ、
アルフの四人が協力することによって無事封印された。

封印された六つのジュエルシードを間に対峙するようにして、な
のはは自らの想いを言葉にした。

フェイトは、なのはの言葉に戸惑いを隠せないでいた。

無理もない「友達になりたいんだ」なんて言われたことなどない
し、そもそも、よく考えてみたら「友達ってなんなんだろう？」と
いう感じた。

結果としてフェイトはなのはの想いに答えることができず、ただ
ただ戸惑うことしかできなかった。

ユーノはそうでもないが、アルフはフェイト同様に戸惑っていた。
使い魔であるがゆえに、主であるフェイトの戸惑いがアルフに伝わ
っていたことも要因だ。

やはり貴方はこの世界でも貴方なのですね。

ミルアはなのに対してそう思った。

自身が介入することで、なのはのフェイトに対する想いの妨げになることを若干危惧していたが、どうやら杞憂に終わったようだった。

タイミングとしてはちょうどいい。

計画の最終段階に移るには現状は悪くない。

時間を伸ばせば、肝心のプレシアがもたない可能性がある。

今というタイミングに対して、ミルアの内にもったく不安がないわけではない。

だが今を逃せば次が何時になるか。

それがミルアを決断させた。

「フェイトさん、アルフさんご苦労様です」

そう声が聞こえ、未だ海上にいた四人は声の方がする方に視線を向けた。

なのは達より遙か上空にミルアがいた。

そのこと事態にそれほどの驚きはない、しかし、

「ゼロ、あんたいったい何を・・・」

アルフは思わずそう口にした。

ミルアの周囲に何十もの小さな魔法陣が展開されている。

似たような光景に覚えがある。

フェイトとアルフはそう思った。

そして、その記憶が何なのか、それに思い当たる。

「まさか」

フェイトとアルフがそう口にしたのは同時だった。
そしてミルアは口を開く。

「シャインシューター・クリアフォーム」

ミルアの声がなのは達に届く。

ユーノとアルフは、咄嗟にそれぞれなのはとフェイトの前に立った。

「シュートっ！」

ミルアがそう口にすると、何十もの魔法陣から大量の魔力弾が周囲一帯に降りそそいだ。

安全な場所など何処にあるのか。

何千にもなるであろう大量の魔力弾はなのはやユーノはもちろん、フェイトやアルフにも降りそそいだ。

狙いなど定めていない。しいて言うなら封印済みのジュエルシードにだけは魔力弾は降りそそいでいなかった。

降りそそぐ魔力弾に対してユーノとアルフはそれぞれ、なのはとフェイトを守るようにしてシールドを展開し、何時止むとも知れない魔力弾の雨に耐えていた。

一発ずつの威力も高くなく、命中精度は決して高くない。
それ故に耐えることは容易にできる。

ただ逃げ場がまったくなく、ともに動くことができない。
おまけに先のジュエルシードの封印で魔力も消耗している。
このままじゃ、その内、限界が見えてくる。

ユーノがそう思った矢先、幸いなことに魔力弾の雨が止んだ。

「なのはっ大丈夫？」

ユーノがなのはに声をかけると「うん、大丈夫と」と、なのはから返ってきた。

なのはは、すぐさまフェイト達を確認する。

フェイトとアルフも無事には無事だが、魔力の消耗が激しかったらしく、二人揃ってその高度を下げていつていた。

「なのはとユーノは、あの二人を確保、いや保護するんだ」

現場に駆け付けたクロノはなのは達に指示を飛ばすと、自分よりも遙か上空のミルアに視線を向ける。

封印されたジュエルシードは既にミルアの手にあった。

クロノはミルアを睨みつけ、

「味方まで攻撃するとはどういうつもりだ」

クロノがそう問うと、ミルアはただ一言「必要だったから」とだけ答えた。

その言葉にクロノは不快感を隠さず、

「君はいつたい何がしたいんだ」

「助けたい人達が」

「その為に君がやっている事が正しいと？」

「いえ、まったく」

「なら何故？」

「他に適当な手段も思いつかず」

わずかな問答、そしてしばしの沈黙。

その後、先に口を開いたのはミルアだった。

「正義というものは、あなた方にあります。ですから私はあなた方の行為を批判するつもりはありません。批判されるべきなのは私ですから」

「君は助けたい人達がいると言ったね。僕たちに出来ることはないのか？」

クロノの問いにミルアは首を横に振った。

「心遣い感謝します。執務官殿。ですが目的の為に私は非合法な手段を取らざるをえません。ですから貴方は、貴方の正義に従ってください」

「そこまでわかっていて、どうして・・・」

「単なるわがままですよ。きっと私の恩師は私の行為を否定するでしょう。ですが、私は否定されても自分の気持ちに、願いに正直でありたいんです。自分を偽ってしまうことのほうが顔向けできないと感じているので。無論、手段は合法であるにこしたことはないのですが。今回は合法というわけにはいかないのです」

自分を傷つけ、自ら罪を背負う。

そこまでの覚悟があるのなら、もはや言葉は・・・

クロノはそう思うと、ミルアに自らのデバイスを向ける。

ミルアも左手に魔力刃を展開させ、その切っ先をクロノへ向けた。

ミルアとクロノは空中で何度も切り結んでは離れるを繰り返していた。

クロノは合間合間に魔力弾を放つが、ミルアはそれらをかわすことなく全て切り払う。

お返しにとばかりにミルアも魔力弾を数発放った。

クロノはそれらを回避しようとしたが、思いもかけず全て被弾してしまった。

今までの魔力弾とは質が違ったのが要因。

速度と精度に特化したタイプか、僕とした事が油断した。

クロノはそう思い、苦々しい表情をした。

「そろそろですね」

ミルアはそう呟き懷から先ほど確保した六つのジュエルシードを取り出した。

すると、それらはミルアの手から離れ、そのまま空へと吸い込まれゆく。

それを見たクロノは、

「物質転送かつ！ エイミー！」

アースラ内でエイミーは「了解っ」と声をあげ、コンソールを叩きジュエルシードの転送先を割り出し始めた。

「不用意な物質転送は仇になるよ」

クロノはそう言ったが、ミルアは首を横に振り、

「いえ、予定どおりです。少々危ない橋ではありますが」

そのミルアの言葉にクロノは「なに？」と漏らしたが、ミルアの足元に魔法陣が展開され、この場から転移しようとしている事に気がついた。

させまいと、ミルアに迫るクロノだったが、直前にミルアが放った二つの誘導弾がクロノの眼前で互いに衝突して爆発し、クロノの視界を塞ぎ、その足を止めた。

そしてクロノの視界が晴れたとき既にミルアの姿はなかった。

逃げられたことに若干の落胆を見せるクロノだったが、ミルアの計画が大詰めを迎えようとしていることを知るはずもなかった。

その言葉は確かな一歩（後編）（後書き）

ミルア「ミルアと」

はやて（テープレコーダー）「はやての」

ミルア&はやて（テープレコーダー）「お助け座談会ーっ！」

ミルア「・・・（テープレコーダーを投げ捨てる」

アルフ「ええと、ゲストのアルフです」

ミルア「ようこそいらっしやいました。こんな所へ」

アルフ「ええと、もう一人いるんじゃないの？」

ミルア「前回の一件から拗ねてます。自室で絶賛引き籠り中です」

アルフ「あんたも大変だね」

ミルア「慣れたくはないですが慣れてしまいそうです」

アルフ「出番が此処だけって聞いたけど」

ミルア「今のところはそうですね。しかしPT事件もそろそろ終局。時期に出番も増えるでしょうね」

アルフ「そうっ！ もうそろそろPT事件も終局なんだよっ！ な

んかいかなりフェイトごと誤射された気がするけど」

ミルア「いえ確信犯です」

アルフ「え？」

ミルア「わざとフェイトさんとアルフさんを巻き込みました。申し訳ない限りです」

アルフ「・・・（表情に変化がなければに本気で謝ってるのか判断できないんだけどなあ。フェイトならあっさり許しちゃいそうだし」

ミルア「お詫びと言ってはなんですがコレを・・・（ドックフード、割と値段高め」

アルフ「過ぎた事はいいよ。そっちにはそっちの都合もあるだろうしっ（テンションUP」

ミルア「・・・（自分でやっついてアレですが、ここまであっさりとしていいのだろうか」

アルフ「そうそう、そっちも忙しいだろうに、ここにいていいのかい？（既にドックフード開封中」

ミルア「え、まあ、そうですね。今回は早めに切り上げますか」

ミルア&アルフ「それではー（ノシ」

アルフ「もつとない?」(ドックフード「

ミルア「ありますよ」(「そそ」

第13話 事実という名の刃（前編）

その光景はフェイトにとって、いや、その場にいた者にとつてどれほどの衝撃だっただろうか。

クロノ達は本件の首謀者がフェイトの母であるプレシアテストロツサであることを突き止め、先の海上戦でジュエルシードを物質転送したことにより、それを逆探し、結果としてプレシアの居城である時の庭園の所在を突き止めた。

当初は武装局員を送り込もうとしたが、クロノがゼロの存在を警戒し、武装局員の出撃を見合わせた。

そしてクロノ達はフェイトやアルフを保護してアースラに帰還しブリッジに来ていた。

その時だった。

アースラに時の庭園から通信が入った。

モニターを表示すると、そこにはゼロとプレシアが映し出された。

プレシアは愛おしそうに一人の少女をその腕に抱きかかえていた。

クロノはこの時、フェイトとアルフをブリッジに連れて来たことを後悔した。

プレシアが抱きかかえている少女の名前は「アリシア・テストロツサ」

プレシア・テストロツサの一人娘にして、

フェイトの「オリジナル」

プレシアは言う「所詮フェイトはアリシアを蘇らせるまでの慰めの人形に過ぎない」と。

「もうやめてっ！」

プレシアの言葉に思わずなのは叫び、ミルアも「プレシアっ」と少し語尾を強めて諫める。

「そろそろ時間です。プレシアはアリシアさんと一緒に実験室のほうへ移動してください」

ミルアがそう言うときプレシアはモニターから姿を消した。

僕はフェイトとアルフをブリッジに連れてきたことを後悔していた。

テストロッサというファミリネームから「もしや」と思い、プレシア・テストロッサまで行き着き、彼女の経歴を知ることができた。

どのような研究、開発を行っていたか。

そしてその結果の悲劇。

それらを知ることによって僕はフェイトの出自について、ある仮説を立てることができた。

「人造魔導師」

プレシアの一人娘、アリシアをオリジナルとしたクローン。

それが僕の立てた仮説であり、結果としてそれは仮説でなくなつた。

何の疑いもなく当然のように母親と信じていたプレシアに、自らの出自を聞かされ、自分の存在を否定された。

子供にとつて親にその存在を否定されることがどれほどショックだろうか。

執務官として親にその存在を否定や拒絶された子供を何人も見てきた。

故に今フェイトがどれほどショックを受けているのか、ある程度の想像はできる。

想像できるからこそ、自分の失態が無力さが腹立たしくてしかない。

考える。

僕等は何をすればいい。

僕等に何ができる。

ジュエルシードを発掘した者として、僕が責任を果たさなきゃならない。

最初はそんな思いからジュエルシードの探索、封印に乗り出した。その過程でなのはに出会い魔法を教え、ここまでできた。

僕一人だったらここまで来ることはなかっただろう。なのはと一緒にならきつと大丈夫。

そう思っていた。

それがこんな事になるなんて、露にも思わなかった。

「友達になりたい」とフェイトに伝えた優しいなのはのことだ、フェイトのことを思いすごく苦しんでいる。

フェイトを助けたい。

僕だってそう思う。

なのは僕以上にそう思っているだろう。

そして、同時に自分の無力さに苦しんでいるに違いない。

なのは巻き込むべきじゃなかったのかもしれない。

そんな考えが僕の頭をよぎった。

群れから離れ、一人寂しく死を待っていたあの時。

フェイトに出会い、そして助けられたあの日から、ずいぶんと時間がたつたように感じる。

「ずっとそばにいたい」

それが使い魔としてフェイトと交わした契約。

「フェイトのそばにいたい」「フェイトの力になりたい」「フェイトを守りたい」

それは契約とは違う、まぎれもない私の本心だ。

使い魔になつたことになんの後悔もない。

使い魔としての精神リンクで主であるフェイトの気持ちは今まで伝わってきていた。

つらい思いをしながらも母親であるプレシアの笑顔を見たくて一生懸命がんばってきた。

なのに結果がこれだ。

私はフェイトの使い魔なのに何もできない。

「力になりたい」「守りたい」

そんな思いだけが空回りする。

今のフェイトからは何も伝わってこない。

フェイトがどんどん壊れていく。

誰か・・・

誰か、フェイトを助けて・・・

「もうやめてっ！」

私は思わずそう叫んでいた。

フェイトちゃんのお母さんがフェイトちゃんを否定した。

フェイトちゃんを人形だと言った。

フェイトちゃんのそばで聞いていた私ですら、それに耐えられなかった。

否定されたフェイトちゃん本人はどれほどショックだっただろうか。

それを思うと胸が苦しい。

「友達になりたい」

私のその気持ちはフェイトちゃんの出自を聞いても変わることはない。

けれどフェイトちゃんにその答えを用意する余裕などあるはずがない。

寂しげだけど強い決意を秘めていたフェイトちゃんの瞳には、今は何も写っていない。

友達になりたいという私の思いが叶わなくてもいい。

今はただただフェイトちゃんを助けてあげたい。

なのに私に何ができるのかわからない。

自分の無力さに気がつく。

くやしい。

くやしくてたまらない。

第13話 事実という名の刃 (前編) (後書き)

約一ヶ月にも及ぶ修理からPCが帰ってまいりました。
更新再開します。

事実という名の刃（後編）

プレシアによるフェイト出生の暴露。

そして存在の否定、拒絶。

その後の空白の時間はほんのわずかなものだっただ。

その場にいたものは、ほんのわずかな時間がとても長く感じられた。

「フェイトさん、フェイトさん聞こえますか？」

わずかな沈黙をやぶり、ミルアの声がモニターから届く。

しかし、その声にフェイトは反応を示さない。

クロノ達だけがミルアの言葉を待つ。

「申し訳ありませんフェイトさん。こんな形であなたの出自を明かすことになって」

「君はすべて知っていたのか」

クロノが少し責めるように問うがミルアは答えない。

この世界より時の進んだ世界から来たミルアは事実を知っていたが、事実をフェイトに告げることなどできるはずもない。

そもそも、赤の他人である自分の言葉をどうやってフェイトに信じさせればいいのか。

ましてや、それを自分がやってしまっているのか。

ミルアは考えた末に流れに任せることにした。

最終的な目的のため、フェイトの足を引っ張るようなことはできなかった。

例えそれが、目的の過程でフェイトを傷つけることになるうとも。

それは、なによりフェイトの為にと思い、行動を起こしたミルアにとっては苦渋の決断だった。

ミルアはモニターに映るフェイトを見るが、反応がまったくない。私の言葉は届いていないかもしれない、けれども、ほんの僅かでも耳に残ってくれれば。

ミルアはそう思い、再び口を開き、

「プレシアさんは、あのようには言いましたが、アルフさんが大好きなもの、なのはさんが『友達になりたい』と思っただのも『アリシア・テストロッサ』の代わりの人形ではなく『フェイト・テストロッサ』という一人の人間なんですよ」

そこまで言うともミルアは一呼吸おくがやはりフェイトの反応は見られない。

「なりより私がここに居るのは、あなたを助けたいと思ったからなんですよ」

ミルアはそこまで言うと、モニターより一步下がって、

「アルフさん、なのはさん。フェイトさんをよろしくお願いします」

そういつてミルアは頭を下げた。

アルフとなのはは困惑した表情を浮かべた。

フェイトを助けたいといいながら今はプレシアと共にいて協力している。

その真意が読めなかったからだ。

アルフとなのはの疑問はその場にいた全員が持っていたものだ。

「君はフェイトを助けたいといったな。それはいったいどういう意

味だ」

クロノが皆の疑問を代弁するがミルアは答えない。

「質問を変えよう。プレシアではなく、君はどうするつもりなんだ？」

クロノが質問を変え再度問うとミルアは、

「ジュエルシードを複数個同時使用による、プレシアさんとアリシアさんの肉体の時間逆行、および、その固定です」

ミルアの答えにアースラのブリッジがざわめく。
ミルアの答えの意味を瞬時に理解したためだ。

「アリシアを生き返らせる」

ミルアはそう言っているのだ。

クロノはモニター内のミルアを睨みつけ、

「それがどれほど危険か君はわかっているのか？」

「ええ、もちろん。だからこそ今まで準備してきたんですよ」

ジュエルシードが一つでも莫大なエネルギーを有していて、単体でも次元震を起こせるほど危険なのは今さらな話だ。

扱いも慎重に慎重を期さなければならぬし、封印処理が必要不可欠だ。

そんな危険でデリケートな代物を複数個同時使用となれば、歴史に残るような次元災害を引き起こしても何の不思議でもない。

今、なのは達のいる地球や宇宙だけではすまない。

周辺の世界をも巻き込んで一斉に崩壊していくだろう。

それらの世界に住む生物に逃れるすべなどなく、ただただ世界と運命を共にするしかない。

そして、その場所と規模しだいでは歴史に残るところか、歴史として残す者すらいなくなりかねない。

しかしミルアも、そんなことは重々承知している。

だからこそ、今までフェイト達がジュエルシードを収集してるさなか、着々と準備を進めてきたのだ。

念には念を。

限りなく完璧といえるほどの安全対策を。

それはまるで、かつて、大型魔力駆動炉開発で万全の安全対策を行いたくても行えなかったプレシアへの皮肉のように。

フェイトを助けたいというのは結局のところ自己満足に過ぎない。

ミルアはそう自己分析していた。

別にそれが悪いことなんて考えてはいないが、せめて周囲へのリスクは可能な限り抑えておきたい。

失敗して次元災害、なんてのはミルア自身ごめんこうむる。

「人助げか」

クロノが不意にそう呟き、なのは達はその意味がわからずクロノの方を見た。

周囲の視線を感じたクロノは、

「プレシアは以前、ある企業での大型魔力駆動炉開発で事故を起こしたんだ。アリシアはその事故に巻き込まれて亡くなったんだよ」

クロノがそういうとなのは達は少し納得したようで、クロノは続けて、

「不幸に見舞われた親子を助きたい。ゼロ、君の気持ちもわかる。執務官として以前に、僕だってそう思う。けれど君のやろうとしていること、死者を生き返らせることは違法以前の問題だ」

「重々理解しています。例えアリシアさんが生き返っても、その先、ただの少女として生きていくのは困難でしょう。普通とは違う者として扱われるのは目に見えてます」

「だったら何故」

「アリシアさんの死が、プレシアさんが壊れた原因です。人助けなんて聞こえはいいですが、結局のところ私がそうしたいから、そうするんです。それにこんなチャンスはもう二度とないでしょうから、やれるだけのことはやっておきたいんです」

ミルアがそこまで言うところクロノは大きなため息をついて、

「ゼロ、覚悟はできているね」

「はい、この件に首を突っ込むと決めたその時から」

「では、時空管理局執務官クロノ・ハラウンとして君達の逮捕にこれから向かう。無論、それは君達の目的の阻止を意味する」

「どうぞ、執務官殿のご自由に。こちらにあるのは個々のわがままだけ。正義はそちらに。もっとも目的の為、抵抗はさせてもらいますが」

ミルアの言葉を聞き終えると、クロノはモニターに背を向け歩き出した。

「フェイトさん。もう少しでプレシアさんに笑顔が戻るはずですよ。その笑顔が少しでもフェイトさんに向けられるといいんですけど」

ミルアがそう言うとクロノは少し足を止め「なるほど、そういうことか」と呟き再び歩き出した。

事実という名の刃（後編）（後書き）

ミルア「ミルアと」

はやて「はやての」

ミルア&はやて「お助け座談会っ！」

ミルア「……」

はやて「……（カチカチ）」

ミルア「あの…はやて？ 何を？」

はやて「薄桜鬼（PSP）」

ミルア「何で持ってるんですか？」

はやて「PCを一ヶ月ほど修理に出してた作者が暇つぶしに買ってきてプレイしてた。ちなみに作者は斎藤一ルートに」

ミルア「それをなんで、はやてが持ってるんですか？」

はやて「とりあげたからにきまつとるやん。ほっといたら遊び惚けるにきまつとるし」

ミルア「はあ…まあ、そうですね。さてここでお便りです」

はやて「おっ！ 私、宛やん」

ミルア「『薄桜鬼返せ公式たぬき by 鷹音』」

はやて「着火ーっ！（燃える便り）」

ミルア「あぶなっ」

はやて「奴は早く本編をA、S編に突入させるべきなんやつ！ 私の出番増やせっ！ はよせえへんと薄桜鬼攻略してネタバレかますでっ！」

ミルア「ええと…このように公式たぬきがお怒りですので鷹音さんは早く本編を進めるのが賢明かと思われます。鷹音さんの苦手な暑い時期がやってきましたが半死半生でがんばってください。今回はこのへんで、それではノシ」

第14話 始まりから終わりへ（前編）

「クロノ君っ！」

時の庭園へ向かうべくアースラの転送ポートへ向かっていたクロノはその途中でなのはに呼び止められた。見ると、ユーノもなのはの隣にいる。

「僕となのはも一緒に行くよ」

ユーノがそう言っているとクロノは、

「危険すぎる。許可できないね」

執務官として民間人である二人に対しての回答としては何の不思議もない。

しかし、なのはは、そんな事は意に介さず、

「あのクロノ君、武装局員の人たちは？」

「時の庭園の外周部で待機させている。何が起きるかわからないからね。直ぐにでも突入できるようにはしているが」

「じゃあ、やっぱり私たちも行くよ」

そう言いきるなのはにクロノは顔をしかめる。

声色からなのはの意志の強さは伝わってきていた。

なのはとユーノの実力は戦力としては、とても助かる。

正直、民間協力者をこれ以上危険に巻き込みたくはないが、この

局面ではやむをえないか。

それに、下手にアースラに待機させて飛び出てこられても困る。そう思ったクロノは、

「わかった。協力を受け入れよう。ただし中は相当危険だ。僕の指示には従ってもらおうよ?」

クロノの言葉になのはとユーノの二人は黙って頷いた。

庭園の内外にはプレシアがあらかじめ用意していた鎧姿の傀儡兵たちであふれていた。

武装局員たちが牽制をしてクロノ、なのは、ユーノの三人が内部へ突入して行った。

「ずいぶんと派手な歓迎だね」

そう言うクロノの前に傀儡兵達が立ちはだかる。

それらはクロノ達へ向かって押し寄せてくるが、クロノがブレイズキャノンを連射し、それらを消し飛ばしてゆく。

クロノはなのはとユーノの方を振り向き、

「僕はゼロやプレシアを押さえに行く。君たち二人は庭園内の動力炉を封印してきてくれ。ジュエルシードの制御となればそれなりのエネルギーが必要になるはずだから」

クロノはそう言うのと再びブレイズキャノンを放ち、傀儡兵達を消

し飛ばして、なのはやユーノの為の道を開く。

なのはとユーノの二人はクロノに頷いて見せ、走り出した。

「クロノ君も気をつけて」

なのはがそう言っているとクロノは一言「ああ」と答えて見せて、

「ユーノ、なのはを頼むよ」

走り去るユーノの背に声をかけた。

ユーノもそれに手を上げて答える。

それを確認したクロノは、なおも押し寄せてくる傀儡兵達に目をむけ、

「あまり時間の余裕があるとは言えないんでね。道をあけてもらおうか」

そう言つて自らのデバイスを傀儡兵達へ向けた。

「ミルアが自由に考えて、自由に行動ができる。これって凄くいいことなんだよ？ だからね？ ミルアの考えや、気持ちを大切にしておほしいんだ。あとミルア自身も」

互いの額が触れるのではないかと思うほど彼女は顔を近づけ、私の目を覗き込むようにしながら、私に語りかけた。

金色の髪が風でなびき、その前髪がサラサラと私の目の前で揺れ

た。

初めて出会った時も、風になびく、その金色の髪が印象的だった。私を守るようにして目の前に立ち、背を向けつつも、軽く振り向きながら「もう大丈夫だよ」と私に声をかけた。

その光景はいつでも思い出せる。

とても綺麗だ

それが私が抱いた感想だった。

その人、フェイト・T・ハラオウンは本当に綺麗な人だった。

僅かな揺れを感じて、私は目をさました。

どうやら、うたた寝してしまったらしい。

この局面で、うたた寝とは私も相当神経が図太い。

少し自嘲しながらも、私は視線をプレシアさんに移す。

ジュエルシードの制御装置につながれた円筒状のカプセルの中で、プレシアさんは、アリシアさんを抱きしめ、横になって眠っていた。装置の本格的な稼働まで、それほど時間はない。

けれど庭園内へ突入してきた彼らが此処へたどり着くのも時間の問題。

傀儡兵達の配置や割り当てを変更したほうがいいのかもれない。

「もう少しだけ時間を稼ぐ必要がありますね」

私の視線の先、庭園内の見取り図上に映る、傀儡兵達の反応が次々と消えていった。

「あんた達、大丈夫かい？」

ふとアルフの声が耳に届き、私は周囲に視線をめぐらせた。
ここは何処だろうか？

小さな個室の中、私はベットに寝かされて、近くにはモニターが開いていた。

ああ、そうか、私は管理局につかまって、この船に連れてこられたんだ。

そして母さんに……

捨てられた

そう、文字通り物として捨てられんだ。

私は母さんの娘じゃない。

母さんにとって私は、アリシアに似た人形にすぎなかったんだ。
だから、いらなくなったら、あっさりと捨てられた。

母さんに言われた言葉が次々と思い出される。

先ほど味わった感覚を何度も何度も反復してしまう。

もったいない

すべてどうでもいい

そう思い、何気なしに視線をモニターに移した。

見るとアルフと、あの白い魔導師と一緒に戦っている。
母さんたちを止めようとしているのだろうか？

アルフはあの子たちと一緒に頑張って必死に戦っている。

アルフ・・・

私の大切な使い魔。

そうだ、私がすべてを投げ出したら、その後、アルフはどうなってしまうのだろうか？

「ずっと一緒にいること」

そう契約したのは私だ。

そんな私がすべてを投げ出したら・・・

「プレシアさんは、あのようには言いましたが、アルフさんが大好きなもの、なのはさんが『友達になりたい』と思ったのも『アリシア・テストロッサ』の代わりの人形ではなく『フェイト・テストロッサ』という一人の人間なんですよ」

私は不意にゼロの言葉を思い出した。

フェイト・・・フェイト・テストロッサ・・・

私は何度も自分の名を心の中で呼ぶ。

私はフェイト・テストロッサだ。

頭の中が少しではあるがクリアになってくる。

これから先、私がどう生きていけばいいかなんてわからない。

けれど、このままじゃ何も変わらない、何も始まらない。

母さんに会いに行こう。

会って話をしよう。

すべてはそれからだ。

ベットの横、机の上に置かれた待機状態のバルディッシュを手に取り。

「バルディツシュ、力を貸してくれる？」

私がそう問うと、彼はただ一言、了解の意をこめて力強く答えてくれた。

なんだかいつも以上に力強く感じる。

行こう。

他の誰でもない、私自身の意思で。

「艦長、フェイトちゃんが・・・」

エイミイがフェイトが抜け出したことを告げるとリンディは軽く首を横に振り、

「いいわ、行かせてあげましょう。このまま、あの子のあずかり知らぬところで全てが終わってしまったら、彼女自身、けじめのつけようがないかもしれない。あの子を、母親のために必死になれる、優しいあの子を信じてあげましょう」

リンディの言葉を聞いたエイミイや他のブリッジクルー達は軽く微笑むと「了解」と一言だけ答えた。

始まりから終わりへ（後編）

傀儡兵達の配置を変え、庭園内を歩いていた私は少し安堵していた。

先ほど庭園内のカメラの映像で、フェイトさんがアルフさんやなのはさん達と合流したのを確認したからだ。

フェイトさんに、ほんの僅かではあるが立ち直りの兆しが見える。フェイトさんが立ち直らないと、私のやってきたことは結果として失敗になってしまう。

しかし、フェイトさんが立ち直る要因と言うのがフェイトさん自身の強さや周囲の人間にかかっているというのが私としては情けない話だ。

プレシアさんとアリシアさんの存命という私のやろうとしていることはフェイトさんから見ても大きな事だろう。

しかし、フェイトさんが立ち直るという点で見れば、私のいた世界では、プレシアさんやアリシアさんがいなくても立ち直っているのだ。

現にフェイトさんは自ら行動をおこしている。

私の言葉が届かずともだ。

つくづく、私は人の心というものの弱い。

少々ではあるがへこみたくなる。

私は仮面の奥で軽くため息をつき気を取りなおす。

とにかく今のところ状況は順調と言える。

ここまではいい。

あとは私がちゃんとやれるかどうかだ。

大丈夫。ちゃんとやれる。

やってみせる。

私はふと足を止め正面を見据える。

今いる場所はちょうどホールのようになっていて、天井も相当高い。

戦闘を行うには十分な広さだ。

そう戦闘を行うには。

私が、その場所の中央に立つと、ちょうど正面の扉が開いた。

「おかえりなさいと言っべきでしょうかね？ 一応」

扉の向こうから現れたフェイトさんに私はそう言った。

「うん。そうだね。ただいまゼロ」

フェイトさんがそう言うと言つとアルフさんが、

「ゼロ、そこを通してもらうよ」

「それはできない相談です。残っていた傀儡兵達を他に割いた以上、私はここで貴方たちの足を止めないといけませんから」

「ゼロ、君が母さんに協力しているのは何故？ もしかして、全部私の為なの？」

何故フェイトさんが「全部私の為」という答えに行き着いたか私にはわからないが、私はその答えに正解とは言わず、首をかしげ「さあて、ね」とだけ答えた。

するとフェイトさんは何を感じたのか一言「ありがとう」とつぶやき、一度深呼吸した後、バルデッシュを私に向けた。

「例え力ずくでも通してもらうよ。母さんと話をしなくちゃならな

いんだ。私は私として、私の意志で生きてみたいと思い始めたから。これは最初の一步なんだ」

「フェイトさん、それは今でないといけませんか？」

「必ずしもそうじゃない。けど、もし・・・」

フェイトさんはそこで言葉を切る。

言いたいことはわかる。

この状況、へたをすればプレシアさんとは二度と会えない、なんて事にもなりかねない。

それを思えば、いても立ってもいれないのだろう。

たとえ冷たく突き放されてもフェイトさんにとってプレシアさんは大切な母親なのだ。

だが、フェイトさんには申し訳ないが私はあなたの足止めをしないといけない。

大丈夫。どの様に事態が転がろうとプレシアさんと二度と会えない、なんて状況は私が作らせない。

私が行ってきた準備にはそれも含まれていたのだから。

私は数歩後ろへ下がり、

「フェイトさんと、ちゃんと本格的に戦うのは今回が初めてになりますね。さあ、はじめましょうか」

私はそう言うと、左手に魔力刃を展開した。

やっぱりゼロは強い。

それがフェイトの感想だった。

何度切りかかって、かわされるか、さばかれるかしてしまふ。弾速にすぐれたフォトンランサーもことごとくさばかれる。

基本的なスピードはミルアとフェイトにそれほど差はない。

しかし空戦における敏捷性で言えばむしろフェイトのほうが上だ。ミルアとフェイトの空中での動きを見比べればフェイトの方が「綺麗」といえる。

ただ、ミルアは動体視力と単なる四肢の動きがフェイトよりも圧倒的に優秀な為、フェイトの攻撃をさばききれていた。

「見えていれば」基本的にさばこうと思えばさばききれる。それがミルアの強みだった。

「はああっ！」

何度目かのフェイトの斬撃。

それをミルアは左手の魔力刃で受けると、新たに右手の展開させた魔力刃をフェイトのわき腹に叩きつける。

「くっ」

フェイトは息を漏らし、わき腹を押さえながらもフォトンランサーを連射、そのまま後退してゆく。

ミルアはそれらを今まで同様、かわし、さばいてゆく。

アルフがフェイトのフォトンランサーにあわせてミルアに急接近し殴りかかったが、ミルアはそれかわして、お返しとばかりにアルフを蹴り飛ばした。

「アルフ、大丈夫？」

「あたしは大丈夫。フェイトこそ大丈夫かい？」

「私も大丈夫。だけど、このままだとジリ貧だ」

フェイトはそう言って頬をつたう汗を手の甲でぬぐう。

「正直ゼロが本気を出しているように思えないんだ。だったら本気を出される前に一気にいこう」

フェイトがそう言うところアルフは頷いた。

フェイトの視線の先、ミルアは空中にたたずみ、フェイトの出方をうかがっていた。

ジュエルシードの制御装置が次の段階に移行するまで後数分、この分なら大丈夫か。

ミルアがそう考えていると、正面からフェイトが突っ込んできた。ミルアも魔力刃をかまえるが、フェイトはミルアの目前でソニックムーブを使い、瞬時にミルアの背後に回りこむ。

それに対応してミルアも瞬時に振り返りフェイトの斬撃を受け止めるが、それと同時に背中を激しい衝撃が襲った。

着弾時に炸裂効果を付与したフォトンランサーがミルアの背中を直撃していた。

フェイトさんは囧だったか。

そう思い、肉薄するフェイトを押しつけ自身の遙か後方にいる、射手であるアルフに向き直ろうとしたミルア。

しかし完全に振り返るより早く、その足にアルフのチェーンバインドが絡みついた。

ミルアは軽く舌打ちをして、絡みついたバインドを魔力刃で切断

しようとしたが、ミルアから距離をとったフェイトがフォトンランサーを連射、アルフもそれにあわせて連射してきた。

ミルアはすぐさま両手を左右に広げ、それぞれにシールドを展開し、挟みこむ形で打ち続けられるフォトンランサーを受け止める。結果として、その場に足止めされるミルアに対してフェイトは更なる追い討ちをかける。

両手を左右に広げ、シールドを展開した状態のミルアの四肢を次々とフェイトのバインドが捕らえた。

それどころか、さらにアルフのバインドまでがミルアを空中に固定する。

準備はできた、これできめる。

そう思うフェイトの周囲にフォトンランサーの発射台であるフォトンスフィアが次々と形成されていき、その数は数十基以上にのぼった。

それらの射線は全てミルアを捕らえている。

圧倒的物量ともでも言うべきそれらは強い金色の輝きを放つ。

アルフはすぐさまフェイトの射線軸上からはずれ、フェイトの後方に回り込む。

「フォトンランサー・ファランクスシフト・・・撃ち、砕けええっ！」

フェイトの声を皮切りに、各スフィアから、毎秒7発のフォトンランサーが放たれ、その軍勢が全てミルアに襲い掛かっていった。

たとえ防御されても、その防御の上から強引に削り取る攻撃。

それは確かに、フェイトにとっての必殺の魔法。

断続的に続く衝撃がミルアの体を襲い、視界が、おびただしい数の金色の槍で満たされる。

ミルアの姿は着弾時の縛煙ですぐに見えなくなったが、フォトンランサーの軍勢は約4秒ほどミルアに襲い掛かった。

そして打ちつくされたスフィアの残滓をフェイトは自らの手に集め、

「スパーク・・・エンドっ！」

槍状に形成されたそれを爆煙の中のミルアへ投擲した。

始まりから終わりへ（後編）（後書き）

ミルア「ミルアと」

はやて「はやての」

ミルア&はやて「お助け座談会ーっ！」

はやて「戦闘描写が短いっ！」

ミルア「作者が無茶言うな、と言ってました」

はやて「フェイトちゃんの攻撃をさばきつつける空戦描写を省いた結果がコレか・・・」

ミルア「なんか私の戦闘スタイルが悪いみたいな言い方ですね」

はやて「動きを脳内再生すれば曲芸みたいでいいかもしれんけど文字だと単調になりがちか・・・」

ミルア「それは作者批判？」

はやて「否定はせん」

ミルア「なんか遠くから舌打ち聞こえるんですけど」

はやて「あとで車椅子で轢きに行くからかまへん」

ミルア「最近買ったホンダのXR230モタード（黒）で逃げられると思いますけど（逆にはやてを轢き返さないあたり作者も甘いなあ」

はやて「ところで今回のゲストは？」

なのは「えと、あの、どうも・・・」

ミルア「先ほどから来てますが」

はやて「原作主人公キターっ！」

ミルア「管理局の白い悪魔とか一部では言われてますね」

なのは「え？ ええ？ で、でもミルアちゃんも白いよね？」

ミルア「フリーの犯罪者に何を言ってるんですか」

なのは「ええ・・・（不満げ」

はやて「さて、なのはちゃん。今回なんかミルアに聞きたいことがある？」

なのは「え、じゃあミルアちゃんの戦闘に関して。今後の参考にもしたいし」

ミルア「具体的には？」

なのは「ミルアちゃんの空戦のあれこれ」

ミルア「（具体的？）そうですね、例えばフェイトさんとの比較ですが単純な飛行速度なら確かにフェイトさんと大して差はありません」

はやて「単純な飛行？」

ミルア「魔法による飛行です。私自身、元々、陸戦向きなため空戦においても陸戦と同じ移動方法をとることができます」

なのは「え？ どうやって」

ミルア「空中に魔法につて簡単な足場を作つて、それを蹴ります。それに魔法による飛行を組み合わせれば瞬間的にですがフェイトさんのスピードを上回ることができます。空中に足場を作るのは、遺跡などで高所での作業が多いユーノさんなんかは得意な魔法ですね」

なのは「そうか、だからいきなり間をつめられたりしてたのか、それも直線的に」

ミルア「はい。ですから高速での空戦となると直角的な動きが目立つてフェイトさんや、なのはさんの空戦における機動と比べると少々不恰好になってしまいます」

なのは「うーん。わかるにはわかったけど、墜すのは難しそうだね・
・」

ミルア「なんかあつさりと物騒なことってますね」

はやて「10年早いんちゃう?」

ミルア「文字通り」

なのは「うう・・・でも、レイジングハートと一緒にがんばって戦略をかんがえるよっ!（握りこぶし）」

ミルア「・・・（正直勘弁してほしい）」

はやて「・・・（なのはちゃん、なんて恐ろしい娘）」

なのは「魔力の量とかは? ユーノ君とかがミルアちゃんは底なしか? とか言ってたけど」

ミルア「底なしというか、消費した後からどんどん湧き出てくるというか・・・」

なのは「え、なにそれ・・・」

ミルア「ノーコメントで」

なのは「ええゝずるいゝ（いろんな意味で）」

ミルア「追々説明するんで今回は勘弁してください」

なのは「はい」

ミルア「それでは今回はこのへんで、それではゝノシ」

第15話 星の光に立ちむかうは混沌の輝き（前編）

『上には上がいる』という言葉のリニスに教わった覚えがある。確かに『上には上がいる』

現に私の視線の先に、私の遥か上がいる。

不思議な感じだ。

悔しいと言う感情はわからない。

ああ、やっぱりかなわないな、そんな感想だ。

無論、最初からあきらめてなんかいないし、今だって、まだあきらめていない。

フォトンランサー・フアランクスシフトは私の必殺の魔法だ。ゼロに対しての手ごたえもあった。

しかしゼロは当然のごとく、そこに、空中にたたずんでいた。さつき爆煙が晴れたとき、ゼロの周囲には、ゼロの魔力が高密度で漂っていた。

恐らく私とアルフのバインドでまともな防御ができなかったゼロは、自分の魔力を、何かしらの細工をした上で一定の範囲に高密度でばら撒いて、攻撃に対する緩衝材として利用したのだと思う。

はつきり言ってでたらめすぎる。

普通に考えれば魔力の無駄遣いもいいところだ。

しかし現にゼロはそれをやったのけたのだ。

よく見れば先ほどあったからだの傷は跡形もなくなり、損傷していたバリアジャケットなども既に修復済みだ。

尋常でない回復力と魔力量。

ゼロは本当に強い。

ただ強いという認識しかできない。

何処まで強いかがわからない。

でも・・・

それでも。

私は勝たなきゃならない。

進まなきゃならない。

此処で立ち止まるわけには行かない。

ゼロは否定も肯定もしなかったけど、ゼロが今までやってきたことは私や母さんの事を思つてのことだ。

言葉の端々や態度をよくよく考えて、その答えに行き着いた。

思えば最初の出会いから不自然だった。

自分の周囲の安全を確保する為にジュエルシードの回収を手伝うなんて、おかしい話だ。

回収していたのは私だけじゃない。

無視していてもいずれ誰かが回収していたのだ。

なのにゼロはどんどん深いところまで入ってきて、今じゃまるでこの件の主犯みたいになっている。

ゼロには何か別の目的がある。

そんなことはすぐにわかった。

でも、ゼロを見ると、とてもゼロ自身の為に動いてるようには感じなかった。

自分の負担は無視して私や母さんの事ばかり心配して動いていた。そう、守られていた。

今にして思えば、リニス、アルフ、ゼロ。

私は守られてばかりだ。

母さんを助けるとか言つて、いつも誰かが私を守ってくれていたんだ。

守られているだけの私じゃ、母さんを助けることもできないし、

此処から先にだって進めない。

だから私はあきらめない。

先に進むんだ。

フェイトさんが手に力をこめバルデツシュを構えなおした。
仮面の奥で思わず微笑する。

やはりフェイトさんは強い。

先ほどの攻撃もそうだ。

高機動の自分を囷として、私の隙を誘発し、断続的な攻撃で動きを止めて、バインドによって無防備な状況を作り出した。

そして一撃必殺ともいえるフォトンランサー・フランクスシフト。

普通なら墜されている可能性が高い。

私が普通でなかったら今頃、昏倒していただろう。

普通でない自分に感謝したい。

クリアフォーム

それに、私のシャインシューターCFはフェイトさんのフォトンランサー・フランクスシフトを参考にしたものだ。

だからあれのことは、それなりに理解している。

理解してるからこそ防ぐ手段も思いついた。

そしてあれがどれほど消耗が激しいかも。

「はあああつ！」

先に動いたのはアルフさんだった。

私は突撃してくるアルフさんの攻撃を後退しながらかわし、殴りかかってきたアルフさんの腕をつかみ、そのまま地面にむかって投げつける。

しかし地面すれすれのところで持ち直したアルフさんは、私に向かって魔力弾を放ってきた。

だがフェイトさんよりも精度の低いそれを、私はかわすことも捌くこともなく「蹴り」とばす。

フェイトさんがいる方向へ。

「フェイトっ！」

アルフさんが叫ぶが、体力、魔力共に消耗が激しいフェイトさんは、かわすことも防御することもできず魔力弾の直撃を受けてしまった。

フェイトさんの名前を叫びつつアルフさんは墜落していくフェイトさんの下へ駆けつけ、墜ちるフェイトさんを抱きとめる。
そして、私の方を見上げ睨みつけてきた。

ゾクリ

と、一瞬寒気がした。

アルフさんの眼光にではない。

何か来る。

その何かを探ろうと、その何かを感じる方向を探る。

斜め下後方。

視線の先にあるのは壁だけだ。

いや違う。

視界の端に僅かにフェレットのような小動物が写った。

次の瞬間、轟音と共に壁をぶち破って桜色をした魔力の波が私に向かつて、一直線に迫ってきた。

回避か防御、私は防御を選択し、それがすぐミスだと気づく。

魔力が、いやそれを行使するための体力が削られていくのがわかる。

射手などわかりきっている。

なのはさんだ。

正直この展開は予想してなかった。

何故なのはさんが此処にいる。

同じ建物内にいる以上、此処に居てはいけないということはない

がタイミングがまずい。

私は体の構造上、魔力自体は恐ろしく余裕があるが体力ばかりはそうはいかない。

普通の体ではないがサイズが小さい分、体力は少なめなのだ。大事を控えてる前にそうホイホイと魔法戦なんか繰り返してられない。

そうこう考えているうちに砲撃が止みそれと同時に思念制御された魔力弾が左右から一発ずつ私を挟み込むように飛んできた。

軽く後方に下がりそれらをかわすと、さらに正面から二発。

私は上昇して、その二発をかわす。

すると先にかわした二発が背後から迫ってきたが振り向きざまに魔力刃で叩きつぶし、さらに追いすがる残りの二発を精度重視のシューターで撃ち抜いた。

「デイベインっバスターっ！」

「シャインっバスターっ！」

なのはさんが砲撃を放つのと私が振り向きざまに砲撃を放つのはほぼ同時だった。

そして互いの砲撃をやはり同時に回避する。

「デイベインシューターっ！」

「シャインシューターっ！」

なのはさんが魔力弾を放ち私がそれらを全て撃ち落とす。

なのはさんの経験が浅い分、私でもまだ余裕で撃ち落とせる範疇ではある。

だが、このまま悪戯に時間を消費するのはまずい。

確かに戦闘の目的は時間稼ぎだったが限度というものがある。
このまま、こう着状態、というわけにはいかない。

私にはジュエルシード制御装置の最終的な制御という役目がある
のだから。

星の光に立ちむかうは混沌の輝き（後編）

あまり時間がないとあせる私をよそにいつの間にか人の姿に戻ったユーノさんが、下からチェーンバンドを伸ばしてきた。

私はそれを切り払うが、なのはさんがそれに合わせて一気に距離を詰めてきた。

読みが正しければ恐らく――

私は左手に展開した魔力刃を振り下ろす。

それをなのはさんは左手に持ったレイジングハートで受け止めた。魔力刃を受け止めたなのはさんは右手を私にむける。

そんなことだろうと思った。

なのはさんの右手から魔力砲『ストライクスマッシャー』が放たれる直前、私はその右手を払いのける。

結果、なのはさんのそれは、あさつての方向へ放たれ、たまたまその先に居たユーノさんの近くに着弾し、ユーノさんは思わず驚きの声をあげた。

「ユーノ君っ！」

「なのはっ！ 前っ！」

なのはさんは思わず目線をそらしユーノさんの身を案じた。

私はその隙を逃すことなく、なのはさんの胸倉をつかみ、ユーノさんのいる場所に向かって放り投げる。

そのままケリをつけようと二人に向かって砲撃を放とうとしたが、背後から迫る魔力弾に気が付き、私はとっさに振り返り迫る魔力弾を切り捨てた。

今度はアルフさんか。

アルフさんは魔力弾を乱射しながらこちらに突っ込んでる。

私は放たれる全ての魔力弾をいとも簡単に切り捨てた。
しかしアルフさんは速度を落とすことなく突っ込んでくる。
何を？ と、私は一瞬動きを止めてしまった。

「うおおっ！」

アルフさんの雄叫びの後、ガクンと私の体を衝撃が襲った。

「つかまえたっ！」

アルフさんは、してやったりといった表情でそう叫んだ。
ちょうど私の腰の位置、私の両腕ごとアルフさんは私にしがみついていた。

力づくでなら振りほどけくはない。

ただそんなことをして私にからめているアルフさんの腕は大丈夫だろうか？

そんな事を考えてしまいアルフさんが先に行動をおこした。

「うおりゃああっ！」

アルフさんは私にしがみついたまま、真っ逆さまに急降下してゆく。

もちろん地面に向かって。

真っ逆さま・・・そう頭が下、それも私のほうが先に地面に激突する。

直前でアルフさんが離脱することができるとは分らないが、私の激突はまぬがれそうにない。

轟音と今までにない激しい衝撃。

一瞬、視界が暗転する。

肉体にそれほど物理的ダメージがあるわけじゃない。

だがさすがに頭がクラクラする。

わずかに視界もチカチカしている。

だが、かまうものか。

私は立ちあがって一歩踏み出した。

「にがすかつ！」

空中に飛び上がろうとした時、地面に這いつくばった状態のアルフさんが両腕を、私の左足にからめてきた。

この程度なら特に気にすることなく振りほどける。

私は強引に飛び上がろうとした。

しかし、

「ちいつ！」

思わず声にした。

両手両足に茜色と緑色のチェインバインド、そして桜色のバインド。

計算されたことなのか偶然なのか、アルフさんの捨て身の行動で隙の出来た私を三重のバインドが拘束した。

まったくもって、本当にやってくれる。

「アルフさん、離れてっ！」

上空からなのはさんの声が届き、アルフさんが私から離れる。依然恐れていた状況が、今、現実となって目の前にあった。

「集束・・・砲撃っ」

思わずつぶやいた。

レイジングハートを高く掲げるなのはさんの前に桜色の光が、周囲に飛び散っていた魔力が集められていく。

その集められる魔力はなのはさんの物だけではない。

この場で魔法戦を行った者、全員分だ。

無論、私の分も含まれている。

おまけに私は先ほど緩衝材代わりに魔力をばら撒いている。まずい。

いくらなんでもこれはまずい。

時間の消耗以上にまずい。

あれを受ければ魔力体力ともに相当消耗する。

私の背を冷や汗が伝う。

「うけてみて、ゼロちゃんっ！　これが私の全力全開っ！」

私のあせりを余所になのはさんが声をあげる。

彼女の言う【ぜんりよくぜんかい】は間違いなく【全力全壊】だ。正直勘弁してもらいたい。

いま思いつく手段は一つしかない。

迷っている時間はない。

魔力の消耗を抑えつつこの場での戦いにケリをつける。

私は両腕に魔力を込め強引にバインドを引きちぎった。

なのはさん申し訳ありませんが、この場に満ちる魔力をあなたに全て渡すわけにはいきません。

「混沌たる輝きよ我がもとに集い全てを飲み込めっ！」

周囲に満ちる魔力が私の叫びのもと正面に集束していく。

複数の色をした魔力がそれぞれまじりあうことなく一つの塊とな

った行く。

その光景になのはさんは驚くがそれでも決して怯むことはない。
やがて、なのはさんは大きく息を吸いこむ。

それは私も同じ。

なのはさんが声をあげ私が後に続く、

「スターライトっ——」

「ハイ・シャインっ——」

なのはさんがレイジングハートを振り下ろし、私は左手の拳を集束された魔力の塊へ叩きつける。

「ブレイカーっ！」

「バスターっ！」

私となのはさん、それぞれによって集められた巨大な魔力が瞬時に衝突し、周囲一帯を光と衝撃が襲った。

体が宙に浮くのを感じ、次の瞬間には背中に衝撃がはしる。

踏ん張りきれずに壁まで吹き飛ばされたようだ。

見ればホール自体が耐えきれずにガラガラと崩れ始めている。

結局、非常にまずい事態であることには変わらないようだった。

ホールが崩れ始めると同時に生じた砂埃が晴れ始め、視界が確保され始めた。

いつのまにか私を除いた、ホールに居た全員に結界が張られていたらしく、落ちてくる瓦礫からそれぞれを守っていた。

それによく見てみればホール自体の損傷もそれほどひどくはない。なるほど。ホール自体にも結界を張ったのか。そう思い結界を張ったであろう人物に目を向ける。

「さすがですねユーノさん」

「大したことじゃないさ。とっさのことだったしね。君のほうこそ凄いや。まさか君も集束砲を使ってくるとは」

そう言ってユーノさんはなのはさんを見る。

なのはさんは先ほどの衝撃で気を失っているようだった。

フェイトさんとアルフさんも同様だ。

私はユーノさんに

「さて、どうしますか？」

「どうするも、こうするも僕はまだ戦えるよ。無論君に勝てるとは思ってないよ？ でもね、勝てなくても、負けるつもりもないんだよ」

そう言っつて身構えるユーノさん。

私の行動は決まった。

「シャインランスっ！」

私は後退しつつランスを投げつける。

直撃しては爆発するランスを、ユーノさんは冷静に、次々と防いでいった。

おまけにチェインバインドを伸ばし、それを迫るランスに当てることによって、その軌道を逸らすということまでやってのける。

なのはさんの防御が単純に『堅い』ならユーノさんの防御は『巧い』だ。

しかし今はその防御も意味はなさない。

何故なら私が逃げの体制に入っているからだ。

それに気がついたユーノさんは接近を試みるが、私は彼の足もとにランスを投げつけ、その爆発でユーノさんの行く手と視界を遮った。

同時に私はその場から全力で離脱した。

星の光に立ちむかうは混沌の輝き（後編）（後書き）

はやて「はやてのお助け座談会ーっ！」

はやて「本日ミルアは本編が忙しく私一人となっております」

はやて「ミルアーっ！カムバーっク！」

はやて「ここ最近夜もかえってこうへんし、ぬくい抱き枕がいなくてさみしいです」

はやて「さて本編も本当にあとちょいでひと段落がつきそうです」

はやて「A、S編にまでたどり着けばついに私の時代が来ます。もっとミルアと一緒に居られるんよー」

はやて「そこで作者からA、S編における重要な情報を手に入れたで」

はやて「なんと私とミルアがk——」

ザー（砂嵐）

ザー（砂嵐）

ピー（試験電波）

ピー（試験電波）

第16話 失われた生と失われゆく生の結末（前編）

「・・・起きていたのですか、プレシアさん」

「ええ・・・」

ミルアが実験室に入るとプレシアが目を覚ましていた。
プレシアは腕の中のアリシアを撫でながら、

「これで・・・これでやっと、やりなおせるのね」

その表情はミルアが今まで見たこともないような穏やかで優しい表情だった。

しかしミルアは軽く首を横に振り、

「そう簡単にはいかないでしょうね」

その言葉にプレシアはミルアを軽く睨みつけ、

「どう言う事かしらゼロ？」

「死者を生き返らせるなんてとんでもない禁忌を犯すのですよ？
これから先、平穩無事というわけにはいかないでしょうね」

周囲の反応、対応、生き返ったアリシアが、一少女が歩むには相当過酷な茨の道となるのはわかりきった話だ。

そんな事はプレシアも理解はしているだろうが、プレシアは気丈に、

「例えこの先、何があるうと、私は今度こそアリシアを守り抜いてみせるわ」

「それは頼もしい」

プレシアの言葉を嬉しく思い、ミルアは本心を口にした。

しかしプレシアはからかわれたと思ったのか不満げな表情をする。

「そろそろ制御装置も最終段階に入ります。もう一度眠っていてくださいプレシア・・・」

ミルアの言葉にプレシアは無言で頷くと再び横になった。

ジュエルシードが本格的にその力を発動し始めプレシアは深い眠りにつく。

そして、その数分後、爆音とともに実験室の分厚い扉がふつとんで、中にクロノが駆け込んできた。

見ればクロノのバリアジャケットはボロボロで所々、出血もしている。

息つく間もなくクロノは自らのデバイスをミルアに向け、

「ゼロ、君をロストログアの違法使用の現行犯で拘束する。その装置を止めるんだっ！」

ミルアは仮面の奥の瞳をまっすぐクロノに向け、

「残念ながら一足遅かったですね。ジュエルシードは既に本格的な発動状態にあり、制御装置もフル稼働中。ここで下手に止めればジュエルシードの暴走は免れませんよ」

ミルアの言葉にクロノは今にも歯ぎしりしかねない表情で、

「君は死者を生き返らせることがどれだけ重大なことかわかっているのか？ 下手をすれば命の価値そのものに影響を与えかねないんだぞ？」

「逆にいえばそれだけのリスクを背負ってでも、ということですよ。一人を生き返らせる為には此処までしなければならぬ。しかもここまでの条件をそろえることすら偶然の産物に過ぎない」

ミルアの言葉に対して、クロノはミルアを睨みつけ、

「世界はいつも思い通りにはいかない。こんな筈じゃなかったっていう事ばかりだ。それは誰だってそうなんだ。君は・・・君は、それを覆そうというのかっ！」

そのクロノの言葉はミルアには叫びのようにも聞こえた。

ミルアは視線をクロノから外し、瞼を閉じると、

「こんな筈じゃなかった事ばかり、ですか。確かにそうですね。私にも覚えが嫌というほどあります。けれどやはり人はそこにチャンスがあれば手を伸ばしてしまうものなんですよ。ましてや既に壊れてしまっていたプレシアさんにとっては藁にもすがる思いだったでしょうね」

そこまで言うミルアは再びクロノを見て、

「執務官どの、過去は過去、やり直しは聞きません。ですからこれはやり直しではなく新たな一歩なんです。いや、それでも思わなければここまで来ることはできなかった。今の私はどうしようもなくプレシアさんの味方なんですよ」

そう言って肩をすくめる。

クロノは何かを考えるように軽く目を閉じ、やがて深いため息をつき目を開くと、

「情けないが、これは僕たちの負けなのかもしれないな。現状、僕らにその装置とジュエルシードをどうこうする手段はない。下手なことをして暴走、次元災害となれば本末転倒もいいところだしね」

クロノはミルアに向けていたデバイスを下げると、

「まったく、君に対する怒りよりも、ここまでに止めることができなかった自分自身に対する怒りのほうが大きいよ」

ミルアが「難儀ですね」というとクロノは「余計な御世話だ」と返した。

直後、実験室内部に、けたたましいアラーム音が響き渡る。

音源は制御装置からだった。

クロノは慌てた様子で、

「ゼロっ！ 何が起こっているんだっ！」

クロノとは対照的にミルアは落ち着いた様子で、

「おそらく、なのはさんたちが、この庭園の動力装置を封印したのでしょうね。このアラームは、つまりエネルギー不足を伝えるものですね」

それを聞いたクロノは頭を抱えなくなった。

なのは達に動力炉の封印を指示したのは自分なのだ。

まさか、このタイミングでそれが悪い方向へつながるとは思いもなかった。

「なのは達に協力してもらったのがこんな形で裏目に出るなんて・
」

「大丈夫ですよ。一応こういう事も想定していたので」

ミルアはそう言つと制御装置内に収納されていた一本のコードを手繰り寄せた。

クロノは怪訝な顔をして、

「ゼロ、何をするつもりだ？」

「足りないのならば、他所から補給すればいい話ですよ」

ミルアはそう言つてコードの先端のプラグを自分の首に突き刺した。

元からそんなところに接続用の穴などあるはずもなく、接続されたプラグ部分からわずかに血が流れる。

クロノはミルアの行動に驚いてわずかに声をあげた。

しかしミルアはそんなクロノを無視して、

「安全装置の解除を確認—— M M N F R の出力上昇を開始——
出力、10%、15%、25%」

徐々にミルアの背や肘から魔力が光の粒子となつてあふれ出てきた。

クロノはその光景に唾然とする。

肌で感じることできる、この魔力。一個人が扱うようなものじ

やない。彼女はいったい何なんだ？

クロノの驚きを他所にミルアの魔力はさらにその出力を増してゆく。

「40%、50%、60%・・・スタート・・・アクセラレーションっ！」

ミルアの声と共に光の粒子は一気にあふれ出し、それと同時に制御装置のアラームが鳴り止んだ。

「なんてでたらめな」

思わずクロノはつぶやく。

一個人が大型動力炉としての役目を果たすなんて非常識にもほどがある。

ましてや彼女は制御装置の補佐にも魔力を消費しているようだ。

器用なんてものじゃない。

クロノは考えた。

彼女は、ゼロはいったい何なのか。

一魔導師としては規格外すぎる。頑丈な体に、異常なまでの魔力量、MMNFRという聞いたことのない単語、以前の怪我が体の何処にも見られないことから、それなりの治癒魔法か自己再生の能力も有しているのかもしれない。

そこまで考えてクロノは軽く首を横に振る。

駄目だ情報が少なすぎる。

とにかく今は無事に事が済めばそれでいい。

彼女の拘束はそれからでも遅くはない。

いっばっ

と、そんな音を聞いてクロノは眉をひそめた。

何の音だ？

そう思い、その音がした方を見る。

ゼロがいる。

そこまではいい。肩で息をしているのも理解できる。これだけのことをしているのだ。肩で息をするくらいでなければ納得ができない。

というか、そうでなければ怖すぎる。

クロノが再びミルアを注視した時、ミルアが咳き込んだ。

そして仮面のちょうど口の部分。

そこに呼吸用の隙間でもあるのだろうか、その部分から赤い液体が流れ出てきた。

先ほどから信じられないような光景を目撃していたクロノだが酷い混乱はしていない。

だからすぐに、その流れ出る赤い液体が何なのか理解できた。

流れ出る赤い液体、それはまさしくミルアが吐血した証拠だった。

失われた生と失われゆく生の結末（後編）

「ゼロっ！」

ミルアが吐血したことに気がついたクロノは思わず叫んだ。

これだけの魔力の放出に制御装置の補佐。

小さな体にどれほどの負担がかかっているのか想像もできない。

「大丈夫ですよ、執務官殿。まだいけます」

他人の、しかも敵対していた者の「大丈夫」などそう易々とは信用できるはずもない。

自分に何ができるかわからないが、それでもクロノはミルアに駆け寄りそうになった。

その時、クロノがぶちやぶった扉があった部分から、なのは、ユーノ、フェイト、アルフの四人が駆け込んできた。

「母さんっ！」

フェイトはプレシアが眠るカプセルに駆け寄り声をかけるが、その声にプレシアは反応しない。

次いでフェイトはミルアの方を見て驚いた。

背中や肘、さらにはひざ裏からあふれ出る尋常じゃないほどの大量の魔力。

フェイト以外の三人は真っ先にそれに気がついたようで三者三様に啞然としていた。

そして四人とも気がついた彼女が吐血していることに。

「ゼロっ！」

フェイトは叫び駆け寄るが、それをクロノが手で制した。

「駄目だフェイト。今彼女は制御装置とつながっていて迂闊なことをすればジュエルシードが暴走しかねない」

クロノの言葉に再び驚く四人。

その時、ガタンと音をたてミルアが肩ひざをついた。その手は決して制御装置から離すことなく。

恐らく制御する上で必要なことなのだろうか制御パネルの横に埋め込まれた大きな球状の水晶に右手を乗せたまま。

それを見たクロノは意を決してミルアの左横にたつと肩を貸して立ち上がらせた。

なんて軽い体なんだ。

クロノはそんな事を思いつつ、

「この水晶に手を乗せればいいのか？」

クロノの問いにミルアは彼の方を見ることなく、

「なんの真似ですか？」

ミルアが逆に問うとクロノは自嘲的な笑みを浮かべ、

「現状で、次元災害を最も確実に、かつ安全に防ぐには君を手助けするのが一番だと判断しただけだ。無論、現在進行形の犯罪に手を貸すのは本意だが背に腹は変えられないしね。執務官ではいられなくなるかもしれないし、最悪、僕も罪に問われかねない」

ミルアが「だったら」と言うがすぐさまクロノは自分の声でそれ

を制して、

「言つたる？ 背に腹はかえられない。正直、ジレンマやらなんやらで、すぐにでも胃に風穴が開きそうなんだよ」

そう笑つて言うクロノに対してミルアは一言「感謝します」というと、

「その水晶に手を置いてください。制御の補佐は私がやるので、それに必要な魔力を肩代わりしてください。それほど量は必要ないので、装置からの反動があるので気をつけて」

クロノはその言葉に従い手を水晶の上に置いた。

なるほど確かに結構な反動があるな。

クロノは全身が激しく揺さぶられるような感覚に襲われた。

短時間でも酔つてしまいそうな感覚に陥りそうである。

精神的にきついし、それに引つ張られて肉体的にも疲労してくる。

いったい自分ひとりでどれだけゼロの負担を軽減できるか。

クロノがそんな不安を抱えているとミルアの右隣、つまりはクロノの反対の位置から誰かが水晶の上に手を置いた。

とたんにクロノの負担が若干減る。

クロノはその手の主を見て、

「君もかい？ ユーノ」

若干睨みつつ言うクロノにユーノは「あはは」と笑いながら、

「なのは達に比べたら僕が一番余裕があるからね」

そう言つてユーノはミルアの腰に空いた腕を回して、その体を支

える。

するとミルアは軽く天井を見上げ、

「これって両手に花ですか？」

「君は・・・意外と余裕なんだな」

「僕達、花って柄じゃないよね」

ミルアの呟きにクロノとユーノがそれぞれ感想をもらした。

「僕が言えた事じゃないけど、君は一人で全部やろうとしていたのかい？」

不意なユーノの問いにミルアは軽く首を横にふり、

「あくまで、可能な限りですよ。まあ、存外、一人で出来るが多かったですが」

「こうなる前に、僕たちに出来ることはなかったのかい？」

「執務官殿と似たようなことを言うのですね。その質問に答えるなら、私の選んだ道にはなかった、が答えです」

「そう・・・なのはがね、ずっと気にしていたんだ。君の事を悪い人とは思われなかったから」

ユーノの言葉にミルアは答えることなく、視線をなのはに向けていた。

どれほど時間がたったのだろうか、誰も声を発することの無かったその場の沈黙を破ったのはパキリという音だった。

何の音かとそちらを見ると、制御装置内に収められていた全てのジュエルシードにひびが入り、そのまま一気に砕けた。

その場にいたミルアを除いた全ての者が驚きの声をあげる。

クロノはあわててミルアを見て、

「ゼロっ！ 何が起きたっ？」

「内包していたエネルギーを一気に放出して器が耐えられなくなっただけです。制御装置が無ければ周辺の次元世界を複数巻き込んで跡形もなくなっていたでしょうけど」

ミルアのその言葉にクロノは冷や汗をかいた。

目の前の制御装置内でもんでもない事が起こっていたことを改めて実感した。

「まあ、あんな代物が現存し続けることを考えれば砕けてしまった方がいいのでは？」

しれっと言うミルアにクロノは、

「物は言いようだな」

「でも、まあ僕もなくなってしまった方がいいとは思っけど」

ユーノは苦笑してそう言った。

それは間違いなくユーノの本音だった。

そもそも彼は自分達がジュエルシードを発掘したことに罪悪感を感じていた。

発掘さえしなければこれ程に多くの人を巻き込み、傷つけることもなかった。

直接ユーノは聞いてはいないが世の中は「こんな筈じゃなかった」ことばかりである。

もっとも誰もユーノを責めたりはしない。

スクライアー族が発掘したものがたまたまロストログアで、たまたま悪用されたにすぎないのだから。

ましてや、なのはがユーノを責めることは絶対にあり得ない。

なのはにとつてジュエルシードこそが魔法やユーノ、そして皆との出会いのきっかけなのだから。

でも、それでも思ってしまうのはユーノの性格だろうか。

「止まった・・・のかな？」

静かになった実験室の中、ユーノの問いにミルアはうなずいて見せる。

そしてプレシアたちが眠るカプセルを指差した。

その場にいたミルア以外の者は我が目を疑う。

プレシアがどう見ても若返っていた。

ぱっと見ではつきりと判るほどに。

そしてアリシア。

彼女はプレシアの腕の中で、プレシアと一緒に静かな寝息を立てていた。

「母さん・・・アリシア・・・」

二人の無事を確認したフェイトはへなへなと、その場にへたり込んだ。

クロノは苦々しい顔をして、

「本当に死者を蘇らせたんだな・・・」

「みたいだね・・・」

ユーノがそう答えたとき、突如、爆音とそれに伴う揺れが、連続して実験室を襲った。

なのはが「え？ え？」と慌ててきよろきよろとする。

なのはに限らずその場にいた全員がそれぞれ驚いていた。

いや、ミルアを除いて。

その事に気が付いたクロノがミルアに詰め寄り、

「ゼロっ！ 何をしたっ！」

「簡単に言えば証拠隠滅です」

「証拠隠滅？」

「制御装置を作るにあたって使用した機材や、その過程のデータが残っているであろう物を木っ端微塵に」

「何故・・・」

「何故？ そんなの決まってますよ。こんな規格外のことをやってのけた制御装置を復元されないためです」

しれっと言うミルアにクロノは一瞬納得しかけた。

この制御装置がとんでもない事をやってのけたのは理解できるし、それを悪用されない為と考えれば、それらの証拠を隠滅するという

のも理解は出来る。

だが、しかし・・・肝心の制御装置その物は目の前にあるのに・・・

そこまで考えてクロノはいやな予感が頭をよぎった。

「おいっ！ まさかつ！」

クロノは慌ててユーノの襟首を掴んで制御装置から離れる。

いきなりの事にユーノは驚くがそんなことを気にしている場合じゃないかった。

さすがにないとは思うが、いきなり目の前で制御装置を爆破されたらたまったものじゃない。

「わざわざ、離れていただいてありがとうございます。おかげで手間も省けました」

ミルアはそう言ってクロノたちに手を振った。

そして、制御装置を中心にして、床に巨大な魔法陣が展開される。相変わらず自分たちとは違う魔法体系に、この魔法陣がどういうものか理解できないクロノだったが、先程、ミルアが手を振ったことから、その意図が掴めた。

ここから転移する気か。

クロノがそう思った瞬間、ミルアがクロノたちに向かってシャインバスターを放った。

せまりくる魔力砲にクロノはとっさに掴んでいたユーノを横に投げ、自分はその反対側に飛ぶ。

床に顔面から滑り込んだユーノはクロノに文句を言いたかったが、とりあえず魔力砲の直撃は免れたので善しとした。

そしてクロノとユーノが立ち上がった時、既にミルアは制御装置ごと実験室——いや、時の庭園から姿を消していた。

後に「ジュエルシード事件」と呼ばれるようになる、この一連の出来事はこうして一応の終わりを迎えた。

主犯と見られるゼロの消息が不明のまま・・・

失われた生と失われゆく生の結末 (後編) (後書き)

はやて「はやてと」

ミルア「ミルアの」

はやて&ミルア「お助け座談会ーっ!」

はやて「いよっしゃーっ! 次回からA、S編やあーっ! (手にしたクラッカーを天井に向ける」

ミルア「あの・・・エピソード的なものがまだ・・・」

はやて「どチクソーっ! (手にしたクラッカーを投げ捨てる」

ミルア「・・・(出番のなさのイライラが限界に達してるよこの人」

アリサ「さわがしいわね」

ミルア「このタイミングに申し訳ないです」

アリサ「まあ私も出番全然ないし」

ミルア「作者もその所、頭を悩ませてます」

アリサ「鷹音だっけ? あいつ私のファン?」

ミルア「正確には軽度の釘。病です」

アリサ「ああ・・・そう・・・もしかしてアレかな、今同時に『ゼ口の使い魔』で二次創作してるのもそれが原因？」

ミルア「理由のひとつではあるそうです。ちなみに一番好きなキャラは胸革命なエルフだそうです」

はやて&アリサ「チクソーっ！ 胸かよっ！ 結局、胸の差かつ！」

ミルア「（無視して）とりあえず自己紹介お願いします」

アリサ「こほん・・・作者一押し、アリサ・バニングスですっ（セクシーポーズ）」

はやて「後4、5年は待とうな。小学三年生でそれはないわ。それと自分で作者一押しいうな」

アリサ「うぐぐっ・・・」

ミルア「あ、作者からメールです」

はやて&アリサ「・・・（メル友か？）」

ミルア「『セクシーポーズはともかく単純にアリサはかわいいと思う』だそうです」

アリサ「よしっ！ 軽度の釘。病も相まって出番は期待できそうね」

はやて「ちょおミルア端末貸して・・・ええと・・・『うせろロリ

コン』と、送信・・・」

ミルア「人の端末で何してくれてるんですか・・・」

はやて「お、返信してきよった・・・何々・・・『ロリコンじゃねえよ。前回の座談会の伏線なかった事にするぞマメダヌキ』」

アリサ「作者の強権発動ね」

はやて「ふふふ・・・ええ度胸してるやないの・・・（投げ捨てたクラッカーを拾い上げる）　ちよっと出かけてくるわ・・・」

アリサ「どこ行っただのかしら・・・」

ミルア「作者をあのクラッカーで襲撃するつもりでは？」

アリサ「あのクラッカー、メガホンより大きいわよ」

ミルア「大ダメージでしょうね。さて今回はこのへんで・・・」

アリサ「え？　いいの？　作者ほつといて」

ミルア「いいんじゃないですか？　なるようになるでしょう。それでは皆さんまた次回、ではーノシ」

第17話　しばしの休息へ（前編）

—— 時空管理局・巡航し級8番艦・アースラの通路をクロノは一人歩いていた。

その腕や額には、庭園内で負った怪我のためか包帯が巻かれている。

「ああ、エイミィ」

クロノはとある部屋から出てきたエイミィに声をかけた。
エイミィの表情は心なしか沈んでいる。

「ああ、クロノ君・・・怪我、大丈夫？」

そう問うエイミィにクロノは笑って、

「大丈夫だよ。大げさに包帯を巻かれてはいるが実際大したことはないよ」

「そう、ならいいんだけど」

そう答えエイミィは少しだけ安心したような表情をした。

「ところでエイミィ、プレシアの様子は？」

クロノはエイミィの後ろの扉を見ながら言った。

「一応目は覚ましたよ。今は艦長がそばにいる」

エイミイの答えにクロノは「そうか」とだけ答えた。
そして一呼吸おいた後、

「アリシアは？」

「それが・・・」

「目を覚まさないか・・・」

クロノがそう言うときエイミイは黙ってうなずいた。

アリシアは時の庭園で息を吹き返した。

死者の蘇生に成功した。

それは奇跡と呼べるものだったが、未だ一度もその意識を取り戻してはいない。

死者の蘇生なんてものが前代未聞な為、医者達も完全にお手上げ状態で今に至っていた。

クロノは閉められた扉を見ながら、

「アリシアに関して、プレシアは？」

「何もわからないって・・・でもプレシアの表情は以前に比べたら随分とマシになってると思うよ。少なくとも以前に比べたら現状はよっぽど希望があるもの」

「希望ね・・・だが、これから先も相当大変だぞ。間違いなく死者だった者が生き返った・・・恐らく様々な組織、機関が、合法非法あらゆる手を尽くして手に入れようとするだろう。彼らからすればアリシアは二つとない貴重な『サンプル』でしかないからな」

「そうだね、たぶんクロノ君の言うとおりになるだろうね」

苦々しい顔をしてそう言うエイミィにクロノは軽いため息をついて、

「無論、そんな連中にアリシアを渡すつもりはないけどね。なんとかして管理局の庇護下に置けるようにするが、所詮、管理局も人の集まり、一枚岩というわけにはいかないからね、正直先が思いやられる」

クロノはそう言うが、そんなクロノに対してエイミィはにやりと笑うと、

「でも手を抜くつもりなんかないよね。大丈夫、クロノ君ならやってくれるって信じてるよ」

エイミィの言葉にクロノは少し顔を赤くしてそっぽをむく。

しかしエイミィはそれに気がついており、しばらくの間にやにやとしていた。

やがてエイミィは自らの手でにやけていた顔をむにむにとほぐして元に戻すと真剣な表情で、

「それでプレシアはこれからどうなるのかな？」

クロノも真剣な表情に戻して、

「正確なところはなんともいえないが、彼女は魔導師としても研究者としても優秀だ。今回の件も事情が事情だ、一応アリシアが生きている以上今後の再犯の可能性は極めて低い。彼女が管理局に全面的に協力、奉仕するというのならかなりの減刑が望めるかもしれない。管理局の万年人材不足が妙な所で功を奏するかもしれない」

「アリシアちゃんやフェイトちゃんにとっては朗報だね」

「そのフェイトはどうしてる？」

「別室でおとなしくしてるよ。精神的な意味であまり元気はないけど」

「そうか」

「でも、艦長がデータ取りと気分転換もかねて、なのはちゃんと全力で模擬戦してみなか？って提案してたよ」

エイミイのその言葉にクロノは驚いて、

「ちょっと待てっ！ あの二人が全力で模擬戦？ そんな話まったくもって聞いてないぞ」

「うん。だから今、報告したよ」

しれっと言うエイミイにクロノは頭を抱える。

あの二人の持つ魔力は馬鹿魔力といえるほど大きい。

そんな二人が全力で戦ったらと思うと頭が痛い。

模擬戦に使用する周辺域の結界やら何やらの準備が大変そうだな、
と思い、自分が先頭に立って準備すれば、まあ、なんとかなるかと思
い直し、早速準備を始めようと渋るエイミイを引きずってその場
を後にした。

「これからどうするつもり？」

アースラの艦長であるリンディは、ベットの上で上体を起こしているプレシアにそう声をかけた。

リンディの問いにプレシアは何も答えない。

ただ顔を伏せ、ちょうど腿の上におかれた両の拳をただ、ぎゅつと握っていた。

しばらくの間、室内を沈黙が支配していたが、やがてプレシアが顔を伏せたまま、わずかに口を開き、

「あの子は、あの子『たち』はどうしてるの？」

「アリシアさんはまだ目を覚まさないわ。フェイトさんは、そうね一応元気かしら・・・アリシアさんの事は当然として、やっぱりフェイトさんの事も心配？」

リンディの言葉にプレシアはさらに拳を強く握る。爪が手のひらに食い込むみわずかに血がにじむほどに。

「わたしは・・・」

顔を伏せたまま呟くプレシアにリンディは少し顔を上げ、

「彼女は、ゼロさんはあなたがこうなることを予想していたのかしら？ アリシアさんが蘇生してあなたが、かつての優しい母親に戻ることになれば、あなたがフェイトさんにした事で、あなたがあなた自身を苦しめることになるって・・・」

リンディは軽くため息をついて、

「苦しいわよね？ でも逃げないでほしいの。その苦しみはきつと今回の件で、あなたが一番背負わなければならない物のはずだから」

リンディは終始穏やかな口調でそう言う。

しかしリンディの言葉でプレシアは自分がしてきた事の光景をはつきりと、次々と思い返せていた。

一つ一つの光景を思い返すたび、胸が全身が抉られる様な感覚に襲われる。

その苦しみに身を任せれば嘔吐をしてしまいそうになる。

いっそのまま壊れてしまったほうが楽になれるかもしれないと思うほどに。

いったい自分は何をしてきたのか。

自分を母親と疑わず、自分に喜んでほしい、笑ってほしいと必死になって働いていたあの子に自分は何をした？

もしアリシアと姉妹になることができたなら、きっと仲のいい姉妹になったであろうあの子に自分は何をした？

過程はどうあれ、あの子は間違いなく自分が生み出したのだ。

そう、アリシアではないが、あの子は間違いなく自分のもう一人の娘といえる存在だった。

何故そんなことに気がつかなかった？

いや気がついてたはずだ。

だが頑なに自分はそれを認めようとしなかったのだ。

認めてしまえば今まで自分を支えていた何かが壊れてしまう気がして。アリシアが本当に自分の下から去ってしまう気がして。

だから必死に否定した。いつしかあの子はただの人形と思うほどに。

だが今は？

未だ目を覚まさないとはいえ、アリシアが息を吹き返した今は？

自分があの子にしてきたことで自分は苦しんでいる。

なんて都合がいいんだ。

今更・・・今更自分がしてきたことを悔いている。

そう、本当に今さら悔いているのだ。

アリシアが蘇生したことをいいことに。

そう、アリシアが蘇生して自分の願いがかなった今、あの子に対して行ってきたことを悔いている。

都合がよすぎる。

自分勝手にもほどがある。

なんて卑怯なんだ。

こんな自分がアリシアにとって優しい母親となりえるのか？

いや、未だそんな事を思っているのか自分は？

こんな卑怯な自分が誰の母親になれるはずもない。

もう何も望んではいけない。

アリシアは生きている。

それで全てだ。

これ以上何も望んではいけない。

罪を償いたい。

それすらも望んではいけない。

自分はそれだけのことをしたのだから。

しばしの休息へ（後編）

「とりあえずフェイトさんに会ってみない？」

リンディのその言葉にプレシアはわずかに顔を上げ、

「私が・・・私なんかが、あの子と何を話せというの？」

「何でもいいわ。きっとフェイトさんには話したいことがたくさんあるだろうから」

「会えない。会えるわけがない・・・私はあの子に・・・」

「逃げないで」

「え？」

「あなたがフェイトさんにしてきたことを悔いているのはわかるわ。だからこそ逃げないで。今度こそフェイトさんとちゃんと向き合って。もう、彼女に悲しい思い、さびしい思いをさせないで」

リンディはそう言って血のにじむプレシアの両手を包み込むように握り、

「時間はたっぷりあるわ。今まで得られなかった親子の時間、これから埋め合わせしましょ。もちろんアリシアさんも一緒に」

自分の手を握るリンディの手を見つめるプレシアの目に涙があふれてきた。

きっとこれから自分は自分を許すことができない。
それでも、それでも、今度こそ自分の時間を、あの子たちにあげたい。

他でもない、あの子たちのために。

望んではいけない。

望む事は許されない。

けれど、あの子たちのためにと思えば思うほど、自分の望みがあふれてくる。

「——会いたい。あの子たちに会いたい。会って謝りたい。会ってこの腕で抱きしめたい」

プレシアは搾り出すように自分の思いをリンディに伝えた。

リンディは微笑んで頷くと軽くプレシアを抱きしめる。

アリシアを生き返らせたいというプレシアの願いは叶い、そして今、フェイトの願いも叶い始めた。

止まってしまい、決して動くことがないと思われた『親子の時間』がわずかではあるが、動き出そうとしていた。

これは決してプレシアやフェイトだけの願いではなかったはずだ。この事件に関わり真相を知った多くの者願いであったはずだ。そして、戦うために生み出された少女の願いでもあった。

ジュエルシードを使用しての時間逆行による蘇生。
これは何か確証があって行ったことではなかった。
はつきり言ってしまうえば賭けだったのだ。

願いを叶えるとされたジュエルシード。

もしかしたらジュエルシードはプレシアだけではなく、多くの者の願いを汲み取ったのかもしれない。無論、それを確かめるすべはないが、そう思うのもいいかもしれないと、後にこの世界を旅たつ時、ミルアはそう口にすることになる。

とあるマンション。

そこはフェイトとアルフが地球にいる間、滞在していたマンションだった。

そして、フェイトたちが使用していたフロアの一つ下。

そのフロアの一室に『イーター』第14艦隊所属のリアがいた。

彼女の目の前には一辺がメートルほどの正方形のモニターが展開されている。

『で、リア、そっちのほうはどうなった？』

「はい『クリエイター』 時の庭園は健在。プレシア・テストロッサも生存しています。アリシア・テストロッサにいたっては蘇生が確認されています」

リアの答えに『クリエイター』はくつくと笑い、

『そうか、そうか。そんな事になったかそっちは。で、それらはミルアの仕業か？』

「そうですね、お膳立ては確かにゼロの仕業ですね。ですが結果は奇跡といっても差し支えないものかと」

『お膳立てね。私達から以前奪ったデータを使ったか・・・』

「そうですね、あの中にはジュエルシードの制御装置としても使える物があつたはずですから」

『しかしまあ、あいつは大きく流れを変えたな』

「そうですね、ですがこれから先はどうなるかはわかりません。どう転んでも闇の書の復活は避けられませんから」

『関わると思うか？』

「当然関わると思います。現状、ゼロは八神はやての家に居候しているのです。それに、そちら側の八神はやてとも関わりがありましたからね」

『中々面白いことになりそうだな』

そう言って笑う『クリエイター』は本当に楽しみにしているようだった。

そんな『クリエイター』につられてリアはわずかに微笑むが、すぐに真剣な顔をして、

「それで、今回の本題ですが・・・」

『表情を見る限りあまりいい報告とは言えなさそうだな』

「はい、偵察用の『人形』一機がゼロに発見され破壊、その後メモリーの一部が解析され『人形』用の拠点が襲撃され残りの四機も破

壊されました」

『あああ……こちらの監視がばれたか』

「結論を言えばそうなります。どうしますか？ 『人形』が駄目なら『リング』でも――」

リアがそう言うのと『クリエイター』は首を振って、

『ああそれ駄目。ミルアは『リング』でも見抜くぞ』

「全身機械仕掛けの『人形』ならまだしも、改造人間の『リング』すら見抜きますか」

『そこらへんの感覚の鋭さはオリジナルゆずりだな』

「で、どうしますか？」

『増援をと言いたいところだがこれ以上ミルアを刺激するわけにもいかないしな。それにこちらでも先日二隻沈められて観察どころじゃない』

その言葉にリアは目を見開き思わずモニターに詰め寄り、

「な、何があつたんですかつ！」

『敵の新造艦の奇襲をうけた。無論『連合』所属のだ。正確には精霊側の新造艦だったな。確か『白姫』とか言ったか。おまけに搭載戦力は厄介な連中だったからな。ミルアのオリジナル込みでな。おかげで新造艦一隻相手に二隻も沈められた』

『クリエイター』はそういつてけらけらと笑う。
しかし、一方のリアは苦々しい顔をして、

「沈んだ艦は？」

『ものの見事に補給艦をやられた。二隻ともな。よって現在、物資の底が見えてきた。そのせいもあってかなり忙しい』

そう言われリアはわずかに眉間を指で押さえ、

「つまり一度かえってこいと？」

『そういうことだ。よろしく』

『クリエイター』のその言葉を最後に通信は途絶え、リアは深くため息をついた。

そして、この世界を脱つべく部屋の片づけを始めた。

あくまで観察の間の滞在なので部屋の中はシンプルライフとも言える状態で、見方によってはそれ以上に物が少ない。

よって、早々に荷物の整理がついたリアはすぐさまその部屋をあとにした。

しばしの休息へ（後編）（後書き）

はやて「はやての」

はやて「お助け座談会ーっ！」

はやて「って、また一人かーっ！」

フェイト「あれ？ ゼロいないの？ いろいろお礼が言いたかったんだけど」

はやて「そういう重要な事は本編でやってください」

フェイト「う、うん。機会があるといいんだけど・・・」

はやて「とりあえずや、これでA、S編に入れるはずや」

フェイト「えと・・・おめでとう」

はやて「さて、本日のゲストに自己紹介をお願いしよか」

フェイト「あの、フェイト・テストロッサです」

はやて「さてフェイトちゃん聞いてもいいかな？」

フェイト「なに？」

はやて「なのはちゃんとの模擬戦はどうなったん？」

フェイト「それはまた別の話でやるって作者が・・・なんでも直ぐに書けそうにないって」

はやて「さぼりかつ？ さぼりやなっ？」

フェイト「ち、ちがうと思うけど。ところでゼロはなんでいないの？」

はやて「ただいま音信普通です」

フェイト「え、ええっ？」

はやて「まあ、そういうわけやからで探しにいきます」

フェイト「え？ ちょっと待って私一人じゃ何もできないよ。待つてはやてえ・・・（カメラからフェードアウト）」

・
・
・
・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3017o/>

SAVIOUR ~ 機兵が歩む道 ~ 魔法少女リリカルなのは編

2011年12月5日11時48分発行